

明治・大正期のヘーゲル

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林

(巻 / Volume)

61

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

324

(終了ページ / End Page)

172

(発行年 / Year)

2014-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021177>

明治・大正期のヘーゲル

宮 永 孝

はじめに

- 一 ヘーゲルの発見者 西 周
 - 一 ヘーゲル哲学の講義者 フェノロサ
 - 一 明治・大正期の文献資料に現われたヘーゲル
 - 一 本稿で取りあげたヘーゲル関連文献一覧表
 - 一 ヘーゲル略年譜
- むすび

概観 日本における西洋哲学とヘーゲル受容

はじめに

わが国に西洋哲学が輸入されて約四百三十年になる。ここである西洋哲学（思想）とは、スコラ哲学（教会付属の学校でおこなわれた哲学）のことである。豊後の府内（現・大分市）において、天正八年十一月（一五八〇・一一）ころ「聖パウロ学院」（*Collegio de S. Paulo*）がつけられ、ポルトガル人神学生らに——日本語、日本古典文学、論理学、教理神学、秘蹟などを教えた。

また文禄三年（一五九四）には、天草の学院（*コレジオ*）において、日本人神学生は、西洋の神学生といっしょにキリスト教神学や倫理神学（良心問題）などを学習した。



ヘーゲルの肖像

キリスト教が日本に伝わったのは、室町（戦国）時代末の天文十八年（一五四九）のことであるが、宣教師は信徒の教育と公衆をおしえみちびく布教師を養成するために、神学やその補助学科として *Philosophia*, *Philosophar*, *Philosophia*, *logica*（当時はまだ「哲学者」「哲学」「論理学」の訳語はなく、ポルトガル語やラテン語をそのまま、使っていた）などを教えた。しかし、キリシタンのこういった教育機関は、秀吉や家康が発した禁教令によってやがて潰え、消滅するのである。

近年、筆者は本邦における西洋哲学の受容史に関心があり、これまでにいくつか略史を紀要（『社会志林』）に発表した¹が、いまは影響力が大きかったヨーロッパの大家哲学者ヘーゲルやスピノザの日本移植史に興味がある。ヘーゲルは、日本にかぎらず、ヨーロッパ各国において愛好され、これまでに数多の論文や著書や訳本が刊行されている。著名の士ともなれば、当然研究の対象となりやすく、書誌が編まれることもある。が、日本におけるヘーゲルの書誌的研究は、昭和から平成期までのものがあっても、明治・大正期のものはまだないようである。筆者の研究は、その間隙^{かんげき}をぬうものであるが、膨大な文献資料のすべてに目を通したわけではない。もれこぼれた部分もたくさんあるはずである。しかし、主なものにはふれたつもりである。雑誌ひとつを例にとっても、明治から平成のこんにちまでの間に刊行されたものは数千種をかぞえるようである……。

本稿は、主として明治・大正期のヘーゲル紹介の跡をたどったものであるが、さらにくわしい書誌的研究が生れるまでの足場になれば幸いである。

一 ヘーゲルの発見者 西周

日本にも神代から固有の哲学があり、さらにそれに包容同化された儒教・道家（老子や莊子の学説を奉ずる学派）¹・仏教哲学などがあったが、近代における西洋哲学の輸入は、明治維新後のことである。

わが国において西洋哲学の発見者、輸入者、紹介者としての榮譽をになったのは、西周^{あまね}（一八二九〜一八九八、明治期の啓蒙的官僚学者）で

ある。西は幕命を奉じてオランダ留学の途にあがるまえ——蕃書調所の手伝並のころ、西洋哲学に関心をよせ、英書によって西洋哲学をまなんでいた。留学先のライデン（ハーグの北東にある大学町）では、法律・政治・経済学などをまなぶのが大きな目的であったが、こういった政法の学を修めるにしても、その根本原理であるところの“ウィスベヘールテ” *Wysbegeerte*（蘭・哲学の意）を究める必要があった。

西の学問の根底にあったのは、まず儒学であり、ついで実証哲学（現象を基礎として現実を解釈する。科学的に実証できるものだけが正しいとする立場）の洗礼をうけた。またその哲学は多少唯物論（精神は物質に規定される）に近いものであった。⁽²⁾

西は津田真道とともに、慶応元年（一八六五）に帰国すると、いったん開成所の教授となった。が、間もなく騒乱の京都に召され、公務のかたわら私塾をひらき、維新後は沼津兵学校の頭取をへて、東京において新政府の役人となり、明治三年（一八七〇）十月より、浅草鳥越町に私塾「育英舎」をひらき、「インサイコロヘシア」（おそらく英書による *encyclopedia* 「百科事典」——書名、版元、刊行年については未詳）により、⁽³⁾ 學術・技芸など百般について講義した。この私塾は、明治六年（一八七三）ごろまでつづいた。

西は英語の *Philosophy* を「理学」「窮理学」「哲学」と訳しているが、塾生にむかって哲学の語源、定義、倫理学、法哲学、哲学小史（古代から近代まで）を口授した。

とくに近世における西洋哲学者としては、つぎのような英・仏・独・蘭の著名な哲学者十六名の名にふれ、簡単にその学説を紹介している。

フランシス・ベーコン

（一五六一〜一六二六、イギリスの哲学者、古典経験論の祖）

ルネ・デカルト

（一五九六〜一六五〇、フランスの哲学者、数学者、物理学者）

バルーク・スピノザ

（一六三二〜一六七七、オランダの哲学者、汎神論「万物は神の現われ、とする説」の

代表的思想家）

ゴットフリート・ヴィルヘルム・フォン・ライプニッツ

（一六四六〜一七一六、ドイツの哲学者）

トーマス・ホッブズ

（一五八八〜一六七九、イギリスの哲学者）

ジョン・ロック

（一六三二〜一七〇四、イギリスの哲学者）

デヴィッド・ヒューム

（一七一〇〜一七六六、スコットランドの哲学者・歴史家・政治家）

シャルル・ド・スコンダ・ド・モンテスキュー

（一六八九〜一七五五、フランスの政治哲学者・啓蒙思想家）

ジャン・ジャック・ルソー

イマヌエル・カント

ヨハン・ゴットリープ・フィヒテ

フリードリヒ・ヴィルヘルム・シェリング

ゲオルグ・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル

オーギュスト・イシドール・マリ・フランソワ・ザビエル・コント

ウィリアム・フュエル

ジョン・スチュアート・ミル

(一七二一〜七八、フランスの思想家・文学者)

(一七二四〜一八〇四、ドイツの哲学者)

(一七六二〜一八一四、ドイツ観念論「外界は実在するものではなく、認識主体がそう思っているにすぎないとする説」の代表的哲学者)

(一七七五〜一八五四、ドイツ観念論の哲学者)

(一七七〇〜一八三一、ドイツの哲学者)

(一七九八〜一八三七、フランスの哲学者・数学者・社会学の創始者)

(一七九四〜一八六六、イギリスの哲学者・数学者)

(一八〇六〜七三、イギリスの哲学者・経済学者)

注・これらの哲学者名は、西のもと塾生・永見裕の筆録本(「百学連環」)から、ひろったものである。

「西先生口授

第二編 第二号

百学連環 第二編 稿中

(永見) なかみの饒香^{ゆたか}より。

これは『西 周全集 第一巻』(日本評論社、昭和20・2)に収められている。永見裕(一八三九〜一九〇二)は、元福井藩士。西の「育英舎」でまなんだのち、陸軍省に出仕したが、職を辞し、宮城縣属に転じ、かたわら私塾をひらき、子弟を養った。

西の哲学への貢献は、明治十年前後をもっておわり、そのあとドイツ哲学をわが国に伝えたのは、お雇い外国人のフェノロサ(一八五三〜一九〇八、アメリカの教育家。日本美術研究家)であった。フェノロサは明治十一年(一八七八)八月に来日し、同十九年(一八八六)まで八カ年東京大学において、哲学史・政治学・理財学(経済学)・社会学・倫理学などを講義した。

とくに本稿の主人役であるヘーゲルについていえば、ヘーゲル哲学の移植の出発点⁽⁴⁾は、フェノロサが来日し、東京大学でドイツ観念論の講義を開始した明治十一年(一八七八)とする言説がみられるが、日本人の塾生にむかってフェノロサよりも早く、はじめてヘーゲルの名とその学説の

片りんを語ったのは、西周であった。その時期は、明治三年十月（一八七〇・一一）以降のことと推定される。

西は講義（「百学連環 第二編 稿中」）において、ドイツの形而上学学派についてふれたのち、フィヒテやシェリングの学説に言及し、ついでヘーゲルの現象学（物の本体は認識できないものであり、あたえられた現象を実在とみとめる立場）の到達点である「絶対値」(absolute Wissen) —— 絶対精神（じぶんの知識と絶対者である神の知識とが重なるとき、知識の最高段階に現われる哲学的知識）にふれている。

ヘーゲルの説は absolute にて、此彼の二ツを兼ねて、天地万物は皆神のなすところにして一体ならざるはなし

ヘーゲルは、当時ドイツ哲学の中心地であったイエナ（ドイツ南西部、ベルリンの南西二六一キロ）の大学に私講師として赴任し、四名の学生⁽⁵⁾を相手に講義をはじめたが、聴講料はわずかであり、生活は苦しかった。一八〇五年に助教教授に昇格したが、生活はいっこうによくならなかった。翌一八〇六年十月——イエナはナポレオンの軍隊によって占領された。

折からヘーゲルは主著『精神の現象学』（一八〇七年刊）を執筆ちゅうであった。ときにヘーゲル三十六歳。西はそのときの様子をつぎのように語った。

一千八百六年 Jena なる処の学校の教授なりしか、此時仏の兵乱入り来りけるゆえ、その著ハすところの書を携へて避けけり。その仏兵を食ひ留めしは全く此ヘーゲルの力なり。

ところでヘーゲルの「国家観」とは、どのようなものであったのか。シュヴェーグラーの『西洋哲学史』（岩波文庫）によると、それは古代的な国家全能の考え（国家は何でもできる）を堅持したもので、近代的な自由主義に反発するものであった。ヘーゲルがいちばんよい政体（国家の主権が運用される形式、政治の形態）と考えたのは、イギリス流の君主制——世襲的君主制であった。それは君主や首相の一定ていどの専行（ひとり決めて、かってにおこなう）をみとめるものであった。

西はヘーゲルが説くところの為政者の専恣（かかってなふるまい）をつぎのように語った。

ヘーゲルは Organization の説を建て、天地万物皆一体なるものにて、人体も亦然り、耳目鼻口手足を具して人となすものなるか故に、その区別なかるべからず、一国に於ても君あり、宰相あり、人民あるものにて、その区別あるは天の道理なり。ロウソーの説の如き人民区別なしとすべきものにあらす、君たるものあるときはその威権を以て人民を苦しむ等の如きは、甚だ悪しきところなれども、君は君たることを為し、宰相たることをなすときは、他に天理に反することなしとて Constitutional Monarchy の説を主張せり。

古昔（むかし）は西洋一般に君主專擅なりしを（ほしいまゝにする）ロウソーの説にて破れしを、又ヘーゲルの説にて首、体、足の区別ありと言ひしより一変して、方今の西洋は皆此政体に依るところなり。

英国は独り仏国の乱を受けず、其以前に国内一揆等の乱ありて既に君主に権（權力）を擅にせざるに至れり。其制度及び論する所もヘーゲルと符合し同じしか故に、西洋一般に之に倣ふて（まねて）変革するに及へり。

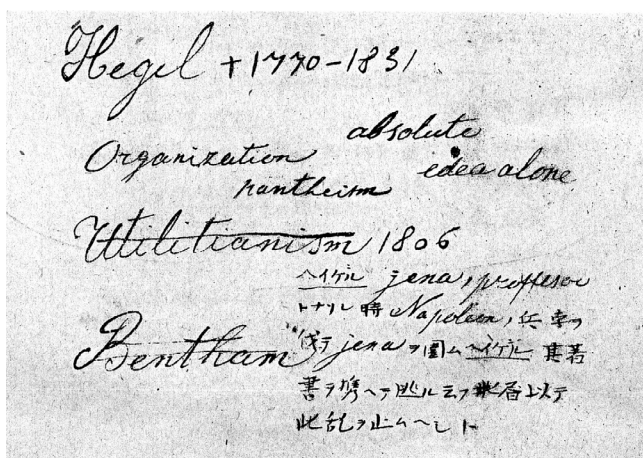
西には講話のもとになった「草稿」（百字連環覚書）——『西周全集 一卷』所収——があり、そこにもヘーゲルについてのメモがみられる。
すなわち——、

Hegel † 1770—1831
absolute
organization idealisme
pantheism

*Utilitarianism 1806
ヘイゲル Jena, professor
トナル時 Napoleonノ兵 李ヲ
Bentham 伐テ jenaヲ圍ム ヘイゲル其著
書ヲ携ヘテ逃ル云フ□以テ
此乱ヲ止ムヘシニ



西 周



西のヘーゲルに関するメモ

注・*は西の誤字。正しくは Utilitarianism (功利主義の意)。
字はプロシア軍の意。

ところで西が私塾「育英舎」において、塾生に該博な知識をさずけるときに用いた種本については、はっきりしたことはわかっていない。哲学についての講話の粉本となったものは、英米の encyclopaedia の一種であろうが、書名・出版社・刊行年に関してはかいかくわからない。哲学史は、ひょっとすると、つぎに掲げるアルベルト・シュヴェグラーの英訳『簡約哲学史』(一八五七年)やフレデリック・デニス・モリス師の『近代哲学すなわち十四世紀からフランス革命までの倫理学および形而上学論。十九世紀も瞥見』(一八六二年)を参考にしたものか。

A history of philosophy in epitome, by Dr. Albert Schweigler, translated from the original German, by Julius H. Seeley, second ed. D. Appleton and Co., London, New York, 1856

注・シュヴェグラーの同書は、三六五頁ある。ヘーゲルの部分は、三四三〜三六五頁まで。

Modern philosophy: or a treatise of moral and metaphysical philosophy from the 14th century to the French Revolution with a glimpse into the 19th century, by the Rev. Frederick Denison Maurice, M. A., Griffin, Bohn, and Co., London, 1862

注・同書は開成所や静岡学校が架蔵していた。ただし開成所所蔵のものは、アンカット本。六七六頁ある。ヘーゲルの部分は、六五六〜六五八頁。

西によるヘーゲルについての最初の講話のなかに、「……天地万物は皆神のなすところにして

一体ならざるはなし」という文章があるが、これと酷似しているのは、George Henry Lewes 著『列伝哲学史』(A Biographical History of Philosophy——筆者が所蔵するものは、一八九三年にロンドンの George Routledge & Sons から刊行されたもの。西は一八五七年版をもっている)にみられる、つぎの文章である。

Nature is made one with God, and God one with Nature, p.627

(自然は神と一体となり、そして神もまた自然と一体となった)

ヘーゲルが『精神の現象学』*Phänomenologie des Geistes*をかきおえたのは、イエナの城壁の下で大砲が咆哮している最中のことであった。かれは著述に没頭するあまり、戦いのことはまるで念頭になかった。翌朝、かきおえた原稿を手にして出版社へむかうとき、⁽⁶⁾かれはフランス兵の誰何をうけた。フランス兵にしてみれば、町が危急の秋原稿どころの話でもなかった。……

西はかたる――、

一千八百六年 Jena なる処の学校の教授なりしか、此時仏の兵乱入り来りけるゆえ、その著ハすところの書(原稿の意——引用者)を携へて避けけり。その仏兵を食ひ留めしは(侵入をそれ以上におよぶことを防ぎとめる)全く此ヘーゲルの力なり。

この一節の出所は、ルイスの『列伝哲学史』の記述のほか、シュヴェグラの英訳『簡約哲学史』(三四四頁)にみられる、つぎの章節を参考にしたようにおもえる。

Yet in 1806 he became professor in the university though the political catastrophe in which the country was soon afterwards involved, deprived him again of the place. Amid the canons thunder of the battle of Jena, he finished "the *phenomenology of the Mind*" his first great and independent work, the crown of his Jena labors.

(しかし、一八〇六年ヘーゲルはイエナ大学の教授になったが、この国がその後間もなく巻きこまれる政治的不幸のために、ふたたびその地位をうばわれた。イエナの戦いにおいて、大砲が咆哮しているさなか、ヘーゲルは『精神の現象学』を書きおえた。同書はかれの最初の偉大にして独自の著作である。またそれはかれのイエナ時代の努力の結晶でもある)。

そして先に引用したヘーゲルの「国家観」や「政体論」に関するような記述の財源は、おそらく英米の百科事典にある記事を参考にしたものかもしれない。

一 明治・大正期の文献資料に現われたヘーゲル

日本人にむかってヘーゲルの名をはじめて発したのは、西周だとすると、その名が本邦において活字となって一般読者の目にふれたのはいつのことか。ヘーゲルの名の誌上紹介は、明治八年(一八七五)六月のようにおもわれる。

もっとも西には明治四年(一八七二)ごろ起筆し、同六年(一八七三)六月に脱稿した「生性発蘊^{せいせいほううん}」という稿本があり、ヘーゲルが散見する。

カント
フント
韓図ノ後、踵^{ついで}デ興^{おこ}レル日^{てつか}ノ哲家(ドイツの哲学者——引用者)ハ、非布^{ヒフテ}埒^リ、酒^{シエ}兒^{エル}林^{リン}、俾^{ハイ}歇^{イゲル}兒^{エル}トス、……

……
これ
パン
テイ
ズム
之ヲ万有皆神学ト云フ、而俾歇兒以上、總テ斯学派ヲ指シテ、超理学派ト云ヒ、所謂ル形而上ノ理ヲ論ジ、……

注・『明治哲学思想集——明治文学全集80』(筑摩書房、昭和49・6)より。

「明六社」(明治六年「一八七三」創設の思想団体)の機関誌『明六雑誌』(第三十八号、明治8・6)の「人世三宝説 一」のなかに、カントやフィヒテやシェリングの名といっしょにヘーゲル(俾歇兒)の名がみられる。



フェノロサ

欧州哲学上 道德ノ論ハ、古昔ヨリ種々ノ变化ヲ歴テ今日ニ至リ、終始同一轍（おなじきまり）ニ歸スルヲ莫シ、中ニモ曩時（むかし）ノ説「王山ノ哲学派、韓國ノ絶妙純然盡知ノ説、非布瑤、酒兒林、俾歇兒ノ觀念学等ナリ」。

注・ルビの一部、句読点は引用者による。

一 ヘーゲル哲学の講義者 フェノロサ

この記事を書いたのは、西周であった。西がヘーゲルの名を発した第一号とすれば、第二声を発した者は、東京大学文学部の「政治学教授」として招かれたアーネスト・フランク・フェノロサ（一八五三—一九〇八、お雇い外国人・美術研究家）であった。フ

エノロサは、政治学のほか哲学や経済学、社会学などを教えた。かれは担当した科目を器用にこなしたが、みずから学びながら教えるといった風だった。

哲学についていえば、ドイツの哲学書を原文で精密に研究したというより、英訳本などを通じて学んだようである。かれはけっして哲学の専門学者ではなかった。当時の学生は、にわか勉強した教師から、受け売りの講義をうけたようだ。

東京大学文学部で教鞭をとった明治十一年（一八七八）から同十九年（一八八六）までの一八カ年間の担当科目についてふれると、つぎのようになる。

〔第一年級〕

明治11・9・11〜翌12・7・10……論理学・心理学（大意）

理財学（経済学）

〔第二年級〕

哲学史・心理学

政学（政治学）

〔第三年級〕

哲学（道義学）

理財学（経済学）

〔第四年級〕

哲学

政学（政治学）

欧米史学または哲学

明治12・9・11

明治13・9・11

哲学史

哲学史

理米史学または哲学

理米史学または哲学

Modern Philosophy,
from
Decartes to Schopenhauer
and
Hartmann.

By
Francis Bown, A. M.,
London:
Sampson Low, Marston,
and Rivington,
Crown building, 188 Fleet Street.

注・
23.5
cm
×
15
cm。
厚さ
3.5
cm、
全四
八四
頁。

フェノロサは、来日した最初の年（明治十一年）の第二年度の「哲学史」の講義において、デカルトからヘーゲル、スペンサーにいたる近代哲学史の大意をさずけた。学生に要点を講述したり、暗記または筆記のテストを課した。かれの哲学史の講義は、フランシス・ボウエン（一八一〇、アメリカの哲学者、ハーバード大学教授）の『近代哲学』（一八七七）によったものだった。すなわちつぎに記す書がそれである。

明治 14・9・11 ）	論理学	世態学（社会学）	哲学・理財学
明治 15・9・11 ）	論理学	哲学	哲学・理財学
明治 16・9・11 ）	論理学	西洋哲学（哲学史）	西洋哲学（近世哲学）
明治 17・9・11 ）	論理学	世態学（社会学）	理財学（通貨および銀行論）
明治 18・9・7 ）	論理学・西洋哲学	哲学史・理財学	社会学・近世哲学
明治 19・8	（文部省に雇替——政治学、理財学などを講じたが、資料に欠ける）	理財学	理財学（通貨および銀行論）

翌明治十二年（一八七九）の第二年級の「哲学史」のクラスでは、アルバート・シュヴェーグラの英訳『簡約哲学史』（おそらくJulius H. Seelyeが訳した *A History of Philosophy in Epitome*, 1856）やジョージ・ヘンリー・ルイスの『列伝哲学史』（*The Biographical History of Philosophy*, 1846）をテキストまたは参考書に指定した。

坪内勇蔵（逍遙、一八五九～一九三五、明治から大正期の評論家・劇作家）は、フェノロサが来日した当初——明治十二年（一八七九）九月から、第二年級において「哲学史」を受講したが、ヘーゲル哲学の成立をのべた部分の講述をノートにとることができなかったようで、いたるところに穴や欠落、誤字などがみられる。

Hegel: his philosophy.

Hegel set out in the criticism of Schelling and his pl entirely absolute.

Decartes started out with neumerical

duality, that is, he Considered mind & Matter and God as equally neumerical.

Kant had two dualities.

Real + Ideal Reality, which preceeding

Philosophers had only one reality.

Schel,,,,,,

Hegel real unity of particular ex

注・早稲田大学演劇博物館が所蔵する逍遙の学生時代のノートより。

フェノロサが主に説いたところは、「ヘーゲルの学」であったという（井上哲次郎談「日本の哲学教師」『太陽』明治36・11）。ともあれフェノロサは、哲学の講義において、学問的に

Hegel, Georg Wilhelm Friedrich. German
philosopher. b. 1770; d. 1831. 歌
傑爾、
Hegelianism or Hegelism. 歌傑
爾學派、

『哲学字彙』（東京大学三学部、明治14）より。

ヘーゲルの論理^{ロジック}

ヘーゲルの弁証法（否定が否定に、また否定されるといった理くつ）

など、ドイツのヘーゲル思想を説いた先駆者の一人であった。すなわちフェノロサこそ、明治十年代にドイツ哲学のタネをまいた最初のひと
もいえる。

ヘーゲルの名がはじめて活字になったのが、明治八年（一八七五）六月だとすると、二度目は六年後の明治十四年（一八八一年）のことであっ
たと思われる。井上哲次郎・和田垣謙三・国府寺新作・有賀長雄らが編んだ『哲学字彙』（東京大学三学部から刊行、再版は明治十七年「一八八
四」五月、東洋館書店刊）に、欧文で「ヘーゲル」（Hegel）の名と「ヘーゲル哲学」（Hegelism）の二つが出てくる。

明治十五年（一八八二）ごろ、フェノロサは第三年級には、ディヴィッド・ヒューム（一七一―一七六、スコットランドの哲学者、歴史家・政
治家）の『人性論』やカントの『純粹理性批判』について講述し、第四年級にはおなじくカントの『純粹理性批判』およびワレーズ訳によるヘー
ゲルの『論理学』を講義した（『東京大学第二二年報』）。



井上哲次郎

三度目は、これより二年後の明治十六年（一八八三年）三月のことであろう。それは哲学にもとづいて『道徳ノ説』（倫理、道義）をといた西洋の哲学者——プラトン、アリストテレス、ペーコン、ロック、カントらにつづいて、ヘーゲル（希傑爾）の名が出てくる（『東京学士会院雑誌 第四編 自明治十五年十一月至全 十二月』明治16・3）

其四 西国ノ理学（哲学）ニ基ツク者 理学ニ基キテ道徳ノ説ヲ立ツル者ハ、上古希臘ノ布拉多^ト 亞立欺度德^{アリスト} ヲ初トシテ、近代英国ノ倍根^ベ 駱克^ロ 德國ノ坎德^カ 希傑爾^ヘ 法国ノ特加爾多^デ 坤篤^{コン} 等ノ名賢大儒輩出シテ説ク所ニシテ（七五頁）

四度目は、その一ヵ月後の明治十六年四月のことか。井上哲次郎（一八五五—一九四四、明治・大正期の哲学者。明治十七年—同二十三年「一八八四—一八九〇」までドイツに留学し、ドイツ観念論哲学を研究）は、『西洋哲学講義 卷之一』（発兌人 阪上半七、明治16・4）の第一節において、哲学とはいかなるものかについて説き、そのなかでヘーゲルに言及した。

ヘーゲル氏ハ 之ヲ弁証式ニ由リテ 絶対（アブソリュート）ヲ論究スルノ学トシ、又自ラ覚知スル（知覚スル）理性ノ学トス……
独逸ノカント フィヒテ セリング^セ ヘーゲル等ノ諸氏ハ 皆デカルト氏ノ学風ヲ伝フ、即ち形而上学派ノ人ナリ

おなじ井上による『倫理新説』（出版人 酒井清造、明治16・4）は、『西洋哲学講義 卷之一』とおなじ時期に刊行されているが、明治十四年（一八八二）東大における倫理の大本に関する講義を編んだもののような（「緒言」）。

井上によると、洋の東西をとわず、思想家は性格がかたより、ねじけており、偏狭であり、ひとをばとうしてはばかるところがない。

東洋西洋、論議一ナラズ、大儒（大学者）小儒、各分派ヲ為シ、師父ヲ誹謗シ、朋友ヲ罵詈訾シ、孔丘（こうきゅう、孔子）ノ聖ニシテ異端ヲ排シ、



晩年の西村茂樹

といったものがあるほか、――

権ヲ主張シ……

〔四条〕

其他フイヒテ氏併ニヘーゲル氏ノ如キハ性、法、学、派、テハアラネトモ、亦同シク天賦ノ自由

歇傑瀾ノ賢ニシテ牛董ヲ嗤フヲ以テ、其^{その}余ハ益々^{ますます}偏曲ニ陥リ、詭弁蜂起シ、遁辞百出ス（三頁）

五度目は、翌月五月のことか。西村茂樹（一八二八―一九〇二、明治期の啓蒙的官僚学者）は、「心学畧伝」のなかで、「心ノ学」（形而上学、心理学）にふれたのち、ヨーロッパにおける哲学の沿革に言及した。このなかにヘーゲル（夏傑爾）の名が出てくる。

歐洲ノフヒロソフヒイハ希臘ニ起リ、羅馬ニ伝ハリ、西羅馬ノ滅亡ト共ニ消滅シ、夫ヨリ文学晦昧ノ世トナリシガ、耶蘇生後一千五百年ノ頃ヨリ此学再興シ以テ今日ニ至リテ益々其精微ヲ極メタリ、希臘ノフヒロソフヒイニテ初メテ記スベキハ大列士ニシテ夫ヨリ瑣克^{ソクラテス}底、布^{プラト}拉多、亞立斯度德^{アリストテレス}熱^{ゼノ}那ノ諸大賢アリ、羅馬ニハ路克勒周、塞^セ丙加、西塞魯ノ諸大家アリ、文学ノ新紀元以來ニハ倍根、德加爾多、士畢諾撒、駱克、休模、萊伯尼士^{バール}覇結黎^{ウオルフ}、窩爾^{カント}仏、坎德、些爾林、夏傑爾、坤篤、士低瓦多、黎德等ノ諸名家アリ、是等ノ諸賢ノ人心ヲ論ズルハ、皆全ク心ノ学ヲ以テ一個独立ノ学トナシテ、之ヲ研究スル者ナリ

加藤弘之の「自由史 草稿第四」（『加藤弘之文書 第一巻』所収、同朋舎出版、平成2・8）に、ヘーゲルの名が散見する。たとえば、天賦の自由権について論じただけに、――

ヘーゲル氏ハ 吾人々類社会ノ目的ハ 吾人ノ自由ヲ増大スルニアリト説テ……

〔第十九条〕

といった一文がみられる。これらの文書は、明治十七年（一八八四）四月ごろ記したものと考えられている。

明治十七年（一八八四）一月に現われる、徳島県士族・和田瀧次郎によるジョージ・ヘンリー・ルイスの『列伝哲学史』——題して『哲学通鑑』（石川書房）の「第九紀——第三章」に、ヘーゲル伝・ヘーゲルの推理法・純全唯心論・ヘーゲルの論理法・天理・歴史・宗教および哲学における該推理法の適用などについての記事がみられる。未見。

西周は「人世三玉説 一」（『明六雑誌』明治8・6）においてヘーゲルの名をひいてから、しばらく黙していたが、「論理新説」（『東京学士会院雑誌』所収、明治17・5）において、西洋の論理学（正しい認識をうるために、思考の基準となる方法や形式などを研究する学問）の沿革について述べた中に、カントやヘーゲル（俾歌兒）の名がみられる。

然レトモ 古来伝ハル所ノ論理法スラ 韓図俾歌兒等 多少ノ論説モ有リ……

（十九頁）

植村正久（一八五八～一九二五、明治・大正期のキリスト教の指導者、のち『六合雑誌』を創刊）の『真理一斑』（警醒社、明治17・10）は、新移入の思想——唯物論・進化論・不可知論と対決したこととで有名だが、同書にヘーゲルの不可知論のことが出てくる。

蓋 不可識論ハ 知識ニ関シタル一種ノ解説ナリ ヘーゲル曰ク 人若シ之ヲ超越スルニ非レバ 欠点若クハ制限ヲモ覚エザルナリト

明治十七年（一八八四）十一月、有賀長雄（一八六〇～一九二一、明治・大正期の国際法学者、東大でフェノロサの講義をきいた）は、フランシス・ボウエンの哲学書（底本は *Modern Philosophy from Descartes to Schopenhauer and Hartmann*, 1877か）を訳し、刊行した。

哲学教授 ぼうえん 原著

哲学専修 有賀長雄 訳解

解説 近世哲学 一巻

有賀氏 蔵版

弘道書院発兌

同書の「序」によると、余の師フェロノサ氏は、ボウエンの高弟であったという。講義のとき、ボウエンにふれることが多く、その講話を聞く、あたかも国をへだてて暮らす父祖のことを思うような気がしたという。訳者は追慕の念から訳業をとるに至ったようだ。

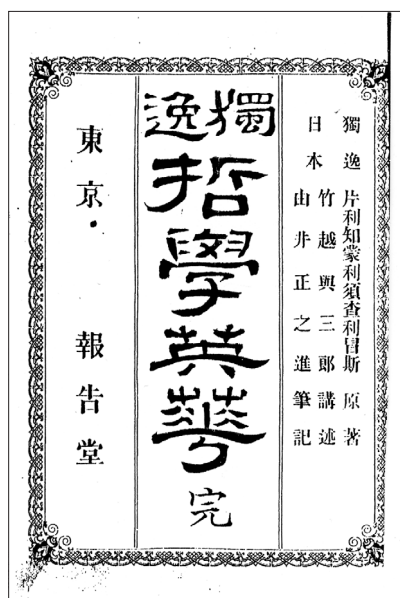
同書は二十四章までであるが、十九章と二十章が「へいげる」の哲学（第一部、第二部）となっている。未見。

明治十七年（一八八四）の晩秋——ドイツ哲学の一般の関心を高めた好著——竹越与三郎著『哲学英華 完』（報告堂、明治17・11）が刊行された。同書において、ドイツ観念論哲学（外界は実在するものではなく、認識主体がそう見ているにすぎないという説）の体系を説いた文章のなかに、ヘーゲル（歇傑兌）が登場する。

観念学家タル非低子^{レツテ} 哲学進行ノ主観的ノ道ヲ求メ 天地上帝説ヲ保持セル勢麗子^{セリンヒ} 其客観的ノ路ヲ執リ^ト 風雲大ニ哲学界ニ起ツテ 英雄頻リニ講理
境ニ際会シ^{さいかい} 邪呼尾^{ジャコビ} 包瀑円^{ハルバクト} 須意虞礼兌ノ徒^{シュエツレ} 其ノ間ニ馳驅シ^{チキ}（走りまわる）、遂に万有靈智ノ賢（知者）歇傑兌ニ至リ^{ヘーゲル} 一個広延ノ方式中ニ^{こうえん} 天下
各派ノ哲学ヲ包容スルノ法ヲ樹ツルニ及ビ^{ほうよう} 此ノ哲学其ノ大成ノ功ヲ竣ルヲ告ゲシナリ……

著者の竹越与三郎（二八六五—一九五〇）、同人社、慶応義塾にまなぶ。『基督教新聞』『国民新聞』『世界之日本』などの記者をへて、衆院議員、枢密顧問官となる）は、在野の学者であったようである。「凡例」によると、つぎの四書を参考にして執筆した。

・ドイツ国キール大学校哲学博士ナヤールボース氏著『思考哲学相伝史』（不詳）



竹越与三郎著『逸獨 哲学英華 完』
(明治17・11)

- ・ヘッジ氏著『日耳曼芸文誌』(不詳)
- ・テン子マン子著『哲学史総要』(不詳)
- ・レウ井ス氏著『哲学紀伝史』

注・ジョージ・ヘンリー・ルイスの『列伝哲学史』のこと。

東京大
学編纂『学芸志林』(第一六卷、明治18・5)に、東京大学総理加藤弘之の講演筆記「何ヲカ学問ト云フ」がのっている。このなかでヨーロッパにおける「道徳学」の研究方法にふれているが、ヘーゲルの名が出てくる。

先ツ索蹟(かくれた事実をさがし出す)ノ方法に就テ 道徳学ノ一例ヲ挙クレハ 欧州ニ於テハ 古来希臘ノ大学士アリストートル、プラト、ソクラテス等ノ説キタル道徳学ノ理(学理)ヲ首メトシテ 羅馬諸学者ノ論シタルモノヨリ 中古近世ニ降テベーコン、デカード、カント、ヘーゲル等ノ道徳学理ニ至ルマテ能ク穿鑿シテ 其沿革ヲ知り……

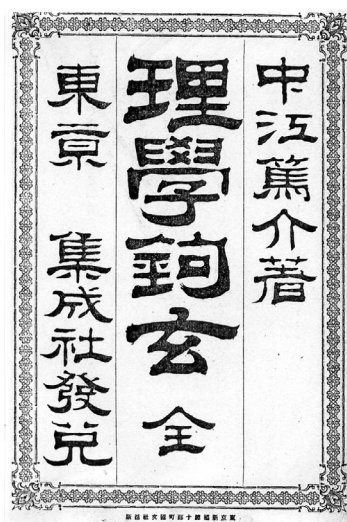
末広鉄腸(一八四九〜九六、本名・重恭、明治期の政治家・小説家。)が著わした『二十三年未来記』(発兌人 高橋平三郎、明治19・6)の下篇にヘーゲルの名がみられる。著者によると、明治二十三年(一八九〇)の帝国議会に立たんとする者は、しごとを放棄し、いたずらに高尚なる学問にむかい、心理学、社会の原理、天賦人權説、最大幸福、優勝劣敗などがどうのこうだといっている、という。

此ノ人ヤ ヘーゲル、カントノ門人トナリ ダウイン、スベンサアノ徒弟トナランヲ希望シ 而シテ天晴レ 哲学上ノ議論ニ因リテ 政治上ノ改良を成就スベシト確信セラル。(五十二頁)

中江兆民(一八四七〜一九〇一、明治期の自由民権思想家)の『理学鉤玄』全(集成社、明治19・6)は、一種の哲学概論であるが、第一卷



明治26年[1893]ごろの加藤弘之



中江篤介著『理学鉤玄 全』
(集成社、明19・6)。「筆者蔵」

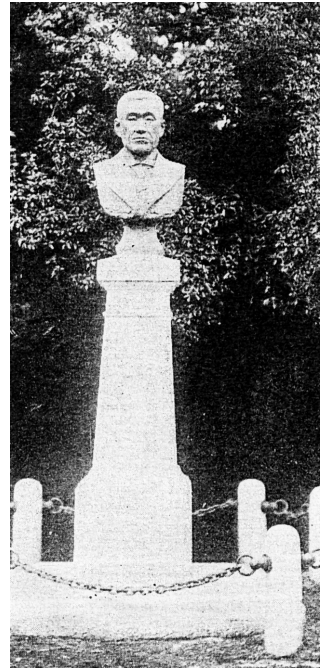
第九章の「論理」のなかにヘーゲルの名がみられる。

論理ノ学ハ終ニ之ヲ理学（哲学の意。引用者）科中ニ列セサルヲ得スシテ
（アリストットルノ垂示セシ（おしえしめす）所 確乎トシテ易フ可ラス
是ヲ以テ後世日耳曼ノカント、ヘーゲルノ徒モ亦皆之ヲ論道セリ（七〇頁）
（アリストテレス）

『中央学術雑誌』（第三二巻・第三三号、明治19・7）の「翻訳」（「哲学の定義」
（ハルバート・スペンサー原著 英学科得業生 佐竹時之助訳）に、ヘーゲルの名が出てくる。

近代ニ行ハル、哲学ノ概念ヲ相比較スルモ 其ノ依ツテ得ル所ノ結果 敢テ上ニ異ナル所ナキヲ看ル 彼ノシエリング、フ井ヒテ等ノ徒ハ
ノ徒ト与ニ 英国学者ノ所謂哲学ナルモノヲ見 卑浅ナルヲ（考えがさはか）譏笑ス（そしりあざけり笑う）

井上円了（一八五八〜一九一九、明治期の仏教哲学者。哲学館「現・東洋大学」の創立者。ヨーロッパの観念論哲学を利用して、仏教に哲学的
基礎をあたえようとした）の『哲学要領 前編』（哲学書院、明治19・9）は、著者が東京大学在学ちゅうに、『令知会雑誌』に毎回寄稿したものを
訂正増補して本にしたものである。



井上円了の胸像

巻頭の「哲学者年表」(一九頁)に、ヘーゲルの略伝が出ている。

ヘーゲル氏 (Hegel) ハ一千七百七十年ニ生レ 一千八百三十一年ニ死
ス 氏ハチュビゲン井エナ大学ニ学ヒ 一千八百六年エナ大学ノ教授トナ
リ 一千八百十八年柏林大学ノ教授トナル 氏ノ哲学全集ハ十八冊ヨリ成
リ 一千八百三十二年以後続々世ニ著ハル

同書は、緒論・東洋哲学総論・中国哲学・インド哲学・西洋哲学総論・ギリシャ哲学(第一、第二)・近世哲学(第一、第二、第三)・結論などから成るのだが、「近世哲学」(第三)において、ヘーゲルの哲学について説いている。

第五十八節 ヘーゲル氏ノ哲学ハ 実ニ独国哲学ヲ一統ス(二つにまとめる——引用者) ト云フカ如キ勢アリト雖モ 其論猶ホ一点ノ間然スル(欠点を指摘して非難する) 所ナキニアラス(一一〇～一一一頁)

ヘーゲル氏ハ カント氏ノ哲学ヲ承ケテ(迎えて) 之ヲ智力ノ上ニ大成シ ショッペンハウエル氏ハ之ヲ意志ノ上ニ大成スルノ別アリ(ちがいがあ
る)(一一〇～一一一頁)

井上円了著『哲学要領 前編』(四聖堂蔵版、明治19・9)は、哲学入門書である。「要領」とは、かんじんな所の意である。本書の特色は、西洋の近世哲学と東洋哲学にもふれていることである。著者は古今東西の哲学を論ずることによって、哲学ぜんたいの大要をつたえようとしている。本書の「第五段(章) 西洋哲学」に、ヘーゲルのことが出てくる。

歇傑爾氏ノ哲学ハ 非布底、舍倫両氏ヲ統合シテ起リ……(七五頁)

次ニ歌傑爾氏ハ 舍倫両氏ノ説ノ短所ヲ補フテ 一層ノ完全ヲ与ヘタルモノナリ (九九頁)

此論法 (三段論法——引用者) ハ 韓図氏ニ始マリ 非布底 舍倫両諸氏相伝ヘテ 歌傑爾氏ニ至リテ大成ス 歌傑爾氏ノ哲学ハ 終始皆此論法ヲ以テ組成セリ (一〇〇頁)

『中央學術雜誌』(第四一號、明治19・11)の「近世哲学(接前号)」において、三宅雄二郎はヘーゲルの名をひいている。

第十七世紀の英國に於ては、淺薄の論説も時ありては 學問上に非常の影響を及ぼすを得たるなるへし ヘーゲルの言へらく ベーコンは英人のいわゆる哲学なる物を大に隆盛ならしめたる功あり (二八頁)

浮田和民(一八五九—一九四五、明治・大正期の政治学者。雑誌『太陽』の主幹、のち東京高師教授をへて早大教授)の「英雄崇拜論」(『国民之友』第六号、明治20・7)に、悪党論があり、このなかでヘーゲルの説をひいている。

独逸ノ哲学家ヘーゲルノ説ヲ聞クニ、世ニ惡人ノ存スルハ 其ノ惡ナルガ故ニ非ズ、惡人ト雖モ幾分カ善ナル所アルニ因レリ……

『哲学汎論』(哲学書房、明治20・10)は、帝国大学文科長・外山正一、前大学総理・加藤弘之、および大学卒業生——井上円了、坪井九馬三、三宅雄次郎、嘉納治五郎、徳永満之、日高貫二らが、それぞれ分担執筆したものである。

同書は、総論・心理哲学・倫理哲学・宗教哲学・教育哲学・西洋哲学小史・哲学道中記などについて説かれており、一種の哲学入門書である。「序」によると、英語の *philosophy* は「理学」または「経学」と訳すべきものという。哲学とはなにか。それは一般の原理を考究するもの、宇宙万物の成立する原理を思想する学問という。

「哲学定義」を執筆した徳永満之は、ヘーゲル哲学をつぎのように要約している。

(第十九) ヘーゲル氏 哲学は均同きんどう及不同おおよの均同なり

又 哲学は絶対の弁証かじゅん的化醇かじゅん(雑多なものを整理して組織的にする意か——引用者)を研究する学なり

又 哲学は自己容包ようほう的理性の学なり

『哲学会雑誌』(第一三号、明治21・2)の「雑録——西洋哲学小史(接前)」に、三学派(メガラ学派、シリン学派、シニク学派)のかたよった説を非難したヘーゲルのことが出てくる。

三学派ノ偏弁へんべんヲ咎ムヘーゲル氏スラ 猶ホ且怨言かつえんげん(うらみのことば) 譏語きご(そしることば) ナキヲ免レズ……(四七頁)

『日本大家論集』(第九編、明治21・2)に、西周が執筆した「論理新説」がのっており、そこにヘーゲルの名がみられる。

然レトモ 古来伝ハル所ノ論理法スラ 韓図俾へい歇けつ兒に等多少の論説モ有リ
(ヘーゲル)

嵯峨さかのやおむろ(一八六三―一九四七、本名・矢崎鎮四郎しんしろう、小説家・詩人。転変辛酸しんさんの人生をあゆんだ)の『無味気 全』(駁々堂本店、明治21・4)に、ヘーゲルのことが出てくる。

在校中余の最も好んで読みし書籍は 遠きは「ソクラテス」より 近きは「ヘーゲル」に至る古今の哲学なり……(二〇四頁)

『日本人』(第七号、明治21・7)に、志賀重昂しげたかは「大和民族の潜勢力」の一文をよせた。このなかで寄稿者は、ヨーロッパ、アジア、アメリカ

の諸国がローマの威勢に圧倒され、自国を輕視し、その国粹をすて、開化を輸入し、ローマにならおうとしている、とのべている。このときにあたり、かつて野猪（いのしし）を追った、

彼の北狄（北方の蛮族）日耳曼民族中に苟んに他日のギュエテ、カント、ヘーゲル、ビスマルク等を産出するを所期せし（きたいする）者おらんや、

という。

『日本人』（第八号、明治21・8）の「雜報」に、「理學宗の駁撃」（おもな哲学者の意見を非難する意）といった文章があり、このなかにヘーゲルが出てくる。

●理學宗の駁撃

頃日（ちかごろ）独逸人ドクトル、ヘーリング氏なる者は、社友杉浦重剛氏并びに社員菊池が唱道する處の所謂「理學宗」なる者の哲理を駁撃したり、氏は末段に到りて曰く「蓋し新に一派の教系を造り出すはカント、フィヒテ、ヘーゲルの如き大家にして初めて彼のスピノザ、プラトの糟糠を嘗めず、一派の論を唱へ得ると雖も、他の尋常一様の学者に在ては、世人は之れに自己の意見を述ぶるを許さず」と、咄々（いやはや）奇怪なる言辭なる哉、

『日本大家論集』（第一五編、明治21・8）のなかに、独逸国大学博士・リヨースレル述の「独逸学方針」といった小論がある。執筆者によると、ちかごろ日本においてはようやくドイツ学が盛んになり、よろこびとするところである、という。しかし、学問の道にすすむとき、読まねばならぬ書物があり、それを選択する必要があるという。ついでその著書がこの学派に属するものなのか、識別せねばならぬと説いている。

哲学の分野で必読のものは、カントの「法学の形而上の原礎」（一七九六）、フィヒテの自然法（一七九六）などのほか、ヘーゲルのつぎの書であるという。

ヘーゲルゲルンドリニ、イン、デル、ヒロソヒ、デス、レヒマ、ヨードル、ナトゥル、ウンド、
法 理 学 ノ 基 礎 一 名
スターク、ウ井、センヤフト、イム、クルントリツセ
天 理 学 術 原 論 (千八百四十年)

注・カタカナ表記のドイツ文は *Grundlinien in der Philosophie des rechts oder natur und Staatswissenschaft in Grundriss* (一八四〇年) であろう。
雑誌『学』(江藤義塾学会、第一号、明治21・8)の「論説——吾輩ノ安楽国」に、ヘーゲルのことが出てくる。

太道たいどう(正しい道——引用者) ハ古ニアリ 黄金世界ハ唯後ニアリト云ヘバ 三王丘且ノ聖せい(孔子)モ 陶朱倚頓とうしゆいどんノ富とみ(大金持であった陶朱と倚頓
——ともに春秋時代のひと)モ カント、ヘーゲルノ学モ 弄疾良平ろうしつりやうへい(漢の高祖の謀臣、知略に長じていた)ノ知モ 端嬰隨酈たんえいずいりノ弁モ 賁育五子ほんいくごし(大力
の勇士——孟賁もうはんと夏育かいくら五人の臣)ノ勇モ 快樂ノ勇モ 快樂ノ快樂タルヲ得ス……(未完)

つづいて『学』(第五号、明治21・11)の「雑評——東京輿論新誌ようろんしんし」に、ヘーゲルの名がみられる。

今日に至っては ペイン スベンサー氏等のあるありて 共に皆唯物論を唱へ 大に彼のデカール流の反対に立てり 而して日耳曼ドイツの如きは カント
フヒフター——ヘーゲル等の碩学せきがく起りて 唯物論にも非ず 云はとて又従来ノ唯心論にも非ずして 一派の哲理を □不明起するに至りたり……

『日本人 第十六号』(政教社、明治21・11)に、杉江輔人すけひとの「同志社大学設立旨意書を読んで所感を記す」(全国のおもな新聞雑誌に発表——
11・7)といった記事があり、このなかで執筆者は設立者新島襄(一八四三〜九〇、明治期のキリスト教の代表的教育者)の考えに異議を唱えて
いる。——政治、経済、法学、文学、哲学について学びながら、一方でキリスト教を尊信せねばならぬ、というのは理にかなったものでない。
学問上の原理や理論をまなぶとき、“推理の自由”(正しい判断をみちびく思考の自由)がなければならぬ。学問研究に自由をみとめないとすれ
ば、



『東洋 大家論説 合本第2集』
(明治21・11)。「筆者蔵」

カント、ヘーゲルは必ずしも則^{きく}とるに足^たらず（手本とするに値しない——引用者）……

『ESSAYS BY EMINENT WRITERS IN JAPAN 東洋 大家論説 合本第二集』（大阪曉鐘館、明治21・11）は、政治・経済・法学・文学・哲学・理学・医学・宗教・教育など、各分野の著名人の評論（小論）をあつめ、本にしたものである。

井上哲次郎の「維納府^{ワイナ}に於て鳥尾中将と共にスタイン氏を訪ひ東西哲学の異同を論ず」のなかに、ヘーゲルの名がみられる。井上は第七回目の「東洋学会総会」（明治三十年「一八九七」九月か）に出席した折、ロレンツ・フォン・シュタイン（一八一五〜九〇、ドイツの法学者・社会学者。明治十五年「一八八二」旧憲法起草調査にきた伊藤博文に憲法・行政法をおしえた）を訪れた。このときヘーゲル学派に属するシュタインは、ただやみくもに空想して、種々雑多の説を構築するので、井上と論争になった。

シュタインは、いった。東洋哲学には論法（論を展開するしかた）なく、西洋哲学はみな論理的に発達したもののばかりである。これは誤^{あや}びゆうはなはだしいものとして、井上は中国やインドの弁証哲学の例をひいて反駁^{はんぱく}した。

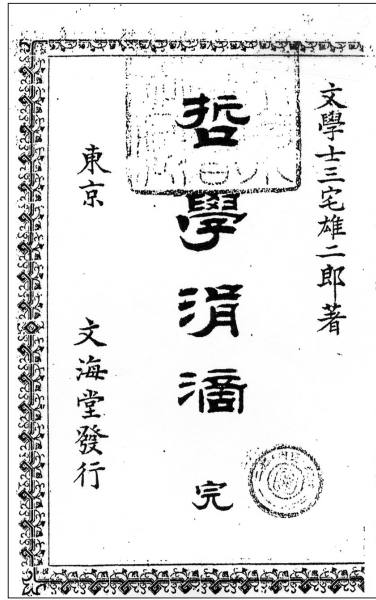
西洋哲学として皆^{みな}が皆^{みな}まで論理にて推論したるに決して之^{これ}なく 君の奉ぜらる、ヘーゲル氏にさへ 論理の合はざるものあり……（一二二頁）

『哲学会雑誌』（第二三号、明治21・12）の「雑報」は、ミュンヘンの『アルゲマ イネ・ツァイトウング』紙に載ったカルル・フォン・プラントル Karl von Prantl（一八二〇〜一八八八、ドイツの哲学者、ミュンヘン大学教授）の訃報を紹介したものである。プラントルの哲学思想はすくなくならずヘーゲルから来ているが、「全くヘーゲル派の一人と見倣^{みな}すべきにもあらず」（六九八頁）という。

『哲学会雑誌』（第二七号、明治22・3）の「雑報」に、「日本哲学ノ現況」についての記事がある。それによると、ちかごろドイツの学風が大いに輸入伝来したが、政治や法律が多いという。いま文科大学の哲学の専任教授としてブッセ氏がいるが、



三宅雄次郎



三宅雄二郎著『哲学涓滴 完』(文海堂、明治22・11)。^{〔国立国会図書館蔵〕}

同氏はロツツェ（一八一七～八一、ドイツの哲学者、のちベルリン大学教授）学派のひとつという。

前大学教授米人フェノロサ氏は ヘーゲル派の学風を帯べり（一六四頁）

『学林』（一卷・一号、明治22・10）は、独逸学協会の機関誌として創刊された雑誌であるが、同誌の第一号にルードヴィヒ・ブッセ（一八六二～一九〇七、ドイツの哲学者、東大のお雇い教師として明治二十年「一八八七」来日。のちハレ大学教授）の論説「道德哲学論」の邦訳がのっており、そこにヘーゲルの名がみられる。

三宅雄二郎（ペンネームは『雪嶺』^{せつりやう}。一八六〇～一九四五、明治から昭和期の評論家、東大でフェノロサの講義をうけた）は、北陸・金沢のひとつである。かれは『哲学涓滴 完』^{けんてき}（文海堂、明治22・11）を著したが、この書は哲学史書風にかかれた哲学入門書⁽¹⁰⁾（二六〇頁ほど）という。

「凡例」によると、「本書は多くの材料を

シュヴェグレル
クノー、フキシエル

「二氏ノ著書に取れり」というから、シュヴェグラーSchwegler（一八一九～五七、ドイツの哲学者、ヘーゲル学派の中央派に属し、哲学史に業績

をのこした)の『概略哲学史——概要への手引』*Geschichte der Philosophie im Umriss, Ein Leitfaden zur Übersicht* やクノー・フィッシャー-Kuno Fischer (一八二四―一九〇七、ドイツの哲学者。イエーナ、ハイデルベルク大学で教鞭をとる。ヘーゲル哲学の研究を通じてカントにもどった)の『近世哲学史』十巻)を利用したということか。

『哲学涓滴 全』は、第一部 緒論・第二部 独断法の哲学・第三部 懷疑法の哲学・第四部 批判法の哲学から成る。第四部 第三篇は、純全的とあり、さらに四章にわかれている。

第一章 ヘーゲル

第二章 理法学 (論理学のこと)

第三章 万有哲学 (自然哲学のこと)

第四章 精神哲学 附 結論

三宅は「ヘーゲル」において、その略伝を叙したのち、その哲学についてしるしている。

カントは主観、各観の関係を明瞭にせざりしが、フキヒテ主観的に考究して万事を自己に基かしめ、シエリング客観的に尋繹して(ひきだす——引用者)、物体の地位を回復し、ヘーゲル純全(純然の誤りか。まじりけのない意)の観察を為して思想と宇宙とを合同し得たり。(二〇八頁)

つぎに論理学でいうところの三段論法 (syllogism——A「すべての人は動物である」、B「Aは人間である」、C「ゆえにAは動物である」をみちびいたもの。このばあい、Aは大前提。Bは小前提。Cは結論。大前提・小前提から結論をみちびきだす推理法)について、三宅はつぎのようという。

三断法 (三段論法のこと——引用者) とは、カントに始まり、フキヒテ、シエリングに及て啓発し、ヘーゲルに至て大成せる者なり。

彼ノヘーゲルガ試ミタル如ク、論理的ノ法則ニ依リ、事実ヲ引き出サウトスルハ到底出来ベカラザル事デアリマシテ、事実ハ経験ニ因テ知ルノ外、路ナキモノデアル

『学林』（第一号、明治22・10）に、谷本 富（二八六七〜一九四六、明治・大正期の教育学者）は、「独逸哲学ノ状景」を寄稿した。かれによると、ドイツの哲学には大きな流れが二つあるという。すなわち――、

大学派の哲学……大学教授が両手でささげもち、講演するところの流派。

非大学派の哲学……在野の哲学者が、説いて広める流派。

シヨーペンハオア（一七八八〜一八六〇、ドイツの哲学者。ベルリン大学の私講師となるが、在家のまま一生をおえる）は、非大学派哲学のかしらであった。非大学派は、哲学教授が哲学をじぶんの職業とするような路をえらばず、哲学をもって身を立てようとする人びとである。どこにそんな価値があるのか、かれらはカントを信仰するだけでなく、その学説を非のうちどころのないものと評している。もちろん、フィヒテ、ヘーゲル、ハーバードもそうである。

彼輩ハ、哲学ノ為メ、ニ務ムルニアラス、哲学ニ頼リテ立タントスル者ナリ。何ノ価値カア、ラント、カントヲ尊信スル「頗ル篤キガ、尚且ツ其教授タリシヲ白玉ノ微（白い美しい玉に欠点がある）瑕ナリト評セリ、況ンヤフィヒテ、ヘーゲル、ハーバード等ヤ……（六〇頁）

また『学林』第二号、明治22・11）に、リヨースレル述の「独逸学方針」といった小論があり、この中でよむべき書名をあげている。カント、フヒテにつづいてヘーゲルの名とその著書名が出てくる。

ヘーゲル 法理学ノ基礎 一名 天文学術言論「一八四十年」（二四頁）

また同一号には、谷本 富の「独逸哲学ノ状景」と題する論文があり、このなかに何度かヘーゲルの名前が登場する。谷本はこんど大学派の哲学にふれ、つぎのように記している。

大学派ノ哲学ノ中ニモ 亦幾多ノ門派アリテ立テリ、カント、ヘーゲル、ヘルバルト、ハ勿論 シライエルマツヘル、クラウゼベ子ケ、等モ亦幾多ノ弟子ヲ有セリ……（四五頁）

ヘーゲルハ 経験ニ基キテ思弁スルヲ為サス（経験のたすけを借りずに、純粹思惟だけで構成する認識）、却テ推想ヲ先ニシテ 経験ヲ後ニスルヲ以テ、知ラス識ラス、人智ノ限界ヲ超越シテ奔馳（かけまわる）スルヲアリ、（四六頁）

『女学雑誌』（第一六六号、明治22・6）に掲載された「森林太郎君に横鎗を呈す」（丸山通一）は、鷗外が『国民之友』（第五〇号）に発表した美術論に文句をつけたものである。このなかにヘーゲルのことが出てくる。

三位一体（父Ⅱ天の神、子Ⅱキリスト、聖霊の総称）論にも取り処あり ヘーゲルの如きは特に之れを珍重す 余も森君の美術論よりは明かにして而かも面白しと信ず。

『国民之友』（第六〇号、明治22・8）に、「多学の弊乎、無学の弊」といった小論がのっている。書き手によると、こんにちの人は学問に酔い、たべあきているという。人は学問をもてあそんでいるという。しかも、学問にたいしてまじめでなく、忠誠をつくしているわけでもない。人は哲学者のように、――

カント、ヘーゲルの如く、一生を哲学の為に犠牲とせんと欲する者にあらず、……

という。

村上専精（一八五一～一九二九、明治・大正期の真宗大谷派の学僧。のち東大の印度哲学の教授となる）の『日本仏教一貫論』（哲学書院、明治23・1）に、ヘーゲルの名が出てくる。

柳も泰西の哲学士アリストートルを始めとし、カント、ヘーゲル、ミル、スペンセル等、彼れ何者ぞ、彼等は姑く之を知れる者と謂へし、然れども、彼等は之を行ふ者にあらず、……

注・「第八音」一〇九頁。

『哲学会雑誌』（第三五号、明治23・2）にのった「雑録——独逸哲学と英国哲学」は、ドイツ崇拜病に感染したとみられる三宅雄二郎の著書『哲学涓滴完』（文海堂、明治22・11）が好評であったことを異とし、英独の哲学の特徴を指摘したものである。記者によると、三宅はドイツ哲学を鑽仰するあまり、英仏の哲学を排斥しすぎた、といった書評（高橋五郎筆——『国民之友』第六八号所収）を紹介している。そしてつぎのようにヘーゲルにふれた。

三宅氏は其著書の中に 西洋近世の哲学の学脈を叙し来りて 筆をヘーゲルに絶たれたり 是れ蓋しヘーゲル派の学者が云ふ如く 哲学はヘーゲルに終わるとの意か……

『福音週報』（第四号、明治23・4）の「教理——神の性質を論ず」は、神の性質とはなにかについてのべたものである。神の性質とは、人間の性質を移し、神に帰したものだという。われわれ人類の性質を反映したものだという。いいかえると――、

只人間主観的の観念に外ならざるなりと、如此き説はシユレイメーカー——ヘーゲル等より 近世に至りてスペンサー等の唱ふる処なり

同号に載った谷本富の「鉄拳居士に答ふ」は、『哲学会雑誌』（第三七号、明治23・3）に発表した三宅雄二郎の「哲学涓滴を読む」の続編の

ようなものである。谷本は三宅を評して「ヘーゲル派を好むの学士なり」（二三頁）といっている。

『哲学会雑誌』（第三八号、明治23・4）の「雑報」に、「ロシア哲学の概況」をつたえる小文が載っている。ロシアにおける哲学のはじまりは、十八世紀末から十九世紀初頭にかけてのことという。フランスの百科全書家（十八世紀フランスにおける『百科全書』の編纂者および執筆者）にならって、思想運動を開始したのがその発端という。しかし、ナポレオンとの戦争により反動が生じ、政府は哲学を危険視した。

しかし、一八三〇年ごろから哲学がふたたび芽をだしはじめ、「ヘーゲル先づ魯国学者社会の偶像と仰がれたり」という（二一七頁）。

『日本之文華』（第八号、明治23・4）の論説に、「文学者の技倆」と題するものがあり、修行によって奥深い道理さえきわめることができれば、文学者といえるのか、と疑問を呈している。

然らば即ち^{しか}釈迦^{すなわ}、クリスト、ヘーゲル、カント（中略）是れ^こ絶佳^{ぜつ}（ひじょうにすぐれた——引用者）の文学者なりとはいはざる可^べらず、……

『少年園』（第四〇号、明治23・6）に、「流行に解脱す」の小文がのっている。記者によると、多くの学者が消化できない図書館を飲みつくし、胸のなかでは、スペンサーはスペンサーと争い、カントはカントと争っているという。そして――、

ヘーゲルはヘーゲルと争ふこと、宛も^{あた}背に^せ置かれし弁慶の七道具が使手^{つか}なしに互に刃傷するが如く……

という。

『文学評論』 志からみ草紙』（第一〇号、明治23・7）に、「アリストオテレスと忍月居士⁽¹¹⁾と」の小文がのっている。同記事によると、近世哲学者は、

むかしの哲学者が使ったむずかしい用語を説明する必要があるという。

スピノザは用語にいちいち注をつけたが、カントほどではないという。そして――、

ヘーゲルは文章を難澁^{なんじふ}にて（すらすら読めない）用語を明にせざる為^{ため}に今に至るまで解^{かい}す可^べからざる所^{ところ}あり



森鷗外

という。

『文学評論』 志からみ草紙』(第一四号、明治23・11)に、鷗外は「答忍月論幽玄書」の一文を寄せているが、このなかにヘーゲルの名がみられる。

日蓮、西行、老子、莊子、カント、ヘーゲルは、曾て何の彫刻をなし、何の絵画を作り、何の詩賦を著しやと。彼等は実に美術的価値あるものをば作らざりしなり。

『学林』(第十二号、明治23・12)の「独逸の審美学」は、ドイツの文学者や哲学者にしても、美術や美について論じなかった者はいない、という。

カントよりしてフヒテ、ヘルバルト、シェリング、ゾルグル、ヘーゲル、(中略) ショッペンハウエル、キルヒマン、ハルトマン及びロッチエに至るまで皆な美を論せざるはなし

『国民之友』(第一〇四号、明治23・12)の『雑録』に、「ヘルバルト、スペンセル」の小記事がみられる。ハーバート・スペンサー(一八二〇〜一九〇三、イギリスの哲学者)は、ドイツやフランスにおいてもその名声に及ぶものはないという。その著作は世界各国で訳され、数多の学徒を生んだという。

或は種々の結社(団体)を設けて之を研究する者あるは事実にしてヘーゲル、コムト以来斯かる勢力ある感化を及せる者は嘗てあらざるなり

大西祝の「倫理攷究ノ方法并に目的」(『哲学会雑誌』(第四七号、明治24・1)に、ヘーゲル哲学のことが出てくる。



中島力造

一方ニ於テハ 諸般ノ科学ノ進ムニ連レ 又一方ニ於テハヘーゲル風ノ哲学ガ ソノ声価(世間の評判)ヲ損スルニ連レテ 近來マス、勢力ヲ増加シ來タルハ 彼ノ經驗主義ト稱スルモノナリ

中島力造(一八五七—一九一八、明治・大正期の倫理学者、東大教授)は、『哲学会雑誌』(第四八号、明治24・2)の「論説」に、『ヘーゲル氏』弁証法(七一二—七二二頁)を発表した。中島によると、ヘーゲルの論理哲学をじゅうぶんに理解するには、かれの論理学を熟読し、弁証法とはいかなるものかを知る必要があるという。弁証法はまことの哲学研究の方法だという。ヘーゲルは他に真正の哲学研究の方法はないとしばしばいっていたという。

清沢満之(一八六三—一九〇三、明治期の真宗大谷派の僧)の「宗教哲学」(真宗大学寮 明治24・9述)に、ヘーゲルの三段論法のことが出てくる。

(三段法) ヘーゲルノ三段法テハ 少シ説明力付ク、即先一ノ正ト云モノアリ、夫ニ反ト云モノ又生スル、其正反カヨリテ合ヲ起スト云、……

○「ヘーゲル」氏辨證法

ドクトル、オフ、 ヒロツヒー 中島 力造

「スペインサー」氏ノ進化的哲學ヲ充分ニ會得スルニハ全氏ノ First Principles ヲ熟讀シ進化(Evolution)トハ如何ナル事ナルヤヲ明知スル事必要ナリ之レト等シク「ヘーゲル」氏ノ論理的哲學ヲ充分ニ會得スルニハ全氏ノ Logicヲ熟讀シ辨證(Dialectic)トハ如何ナル事ナルヤヲ明知スル事必要ナリ

「ヘーゲル」氏ノ辨證法ノ眞理タルヤ否ヤハ「ヘーゲル」氏哲學ノ眞理タルヤ否ヤヲ判決スルニ重大ナル問題ナリ辨證法ハ眞正ナル哲學研究ノ方法ナリ他ニ眞正ノ哲學研究ノ方法ナシトハ「ヘーゲル」氏ノ屢々斷言スル所ナリ

○「ヘーゲル」氏辨證法大意

中島力造の論文「『ヘーゲル』氏弁証法」。
(『哲学会雑誌』第48号、明治24・2)より。

金井延のぶる（二八六五～一九三三、明治・大正期の社会政策学者、東大教授）は、明治二十四年（一八九二）十一月二十八日——「日本郷会堂」において、ローレンツ・フォン・シュタイン Lorenz von Stein（「一八一五～一八九〇」ドイツの政治学者、ウィーン大学教授）の一周忌にあたって講演した。その講演筆記を「スタイン先生の一週忌」と題して『六合雑誌』（第三三二号、明治24・12）に発表した。金井はシュタインがザクセンワイマール（ヴァイマル）のエナ大学に入学し、哲学と法律をまなんだといっている。

——殊に哲学に於ては 有名なるドイツの哲学者ヘーゲルの学説に感心いたして大いに影響を蒙こもった、スタイン氏の著書に依よって見まするに ヘーゲル氏の学風を顕あらわして居る所が大変見へるのです。

と語っている。

『教育時論』（第二四七号、明治25・1）の「理科 哲学——実験心理学派学説二班」に、ヘーゲルの名がみられる。

以テ一方ニ於テハ、フィヒテ、セリンク、ヘーゲル等ノ唯心派…

『城南評論』（第一号、明治25・3）の「はつうん「げんり「はつうん「げんり「はつうん「げんり」のなかに、ヘーゲルの名が出てくる。記者によるとヨーロッパ哲学の工夫（方法）をみると、おもに宇宙万物の玄理（奥深い道理）をまず研究したという。

テガルト、ライプニッツ、フヒテ、セーリング、カント、ヘーゲル、シヨツペンハウエル、ロック、ヒューム、スピノサ、ミル、スペンサー等多くは形而上（精神的なもの）の理学（哲学）を唱道して、其他を軽忽（ふかく考えない）にす

『文学評論』 志からみ草紙』(第三〇号、明治25・3)の「山房論文 其十一 早稲田文学の没却理想」に、ヘーゲルの名が引かれている。

ヘーゲルもまた衆哲学派の立脚点に比較的の権利を与へたり。これ等も逍遙子(坪内)(氏)が□不明に似通ひたるところあらむ。

『早稲田文学』(第一四号所収、明治25・4)の「雑録——美とは何ぞや」(尾原亮太郎)は、ソクラテス・プラトール・アリストートル・セント、オーガスチン・パウムガルテン・カント・シェリング・ヘーゲルなどの「美」の解釈について述べたものである。

氏(ヘーゲル)は美を以て知覚なかだちの媒(音若くは色)に依りて宇宙精霊の表現するものとし、(中略)美は自然に於て見るへしと雖いえとも殊ことに美術に於て表はる。(中略)美術は形と体との調和せるものなり。……

星野天知(てんち)(一八六二—一九五〇、本名慎之助。明治から昭和期にかけての評論家・小説家)は、『女学雑誌』(第三一二号、明25・4)の「雑録」に、「老子を読む(上)」(天地子)を発表した。このなかでヘーゲルを引きあいに出し、老子(周代の思想家、道家の祖)と比較している。

老子は太哲ロウゼンヘーゲルに最も似たり、而して又ヘーゲルに最も異なるの点多し、彼れヘーゲルが大哲理だいりを発見したるの大刺戟に 実に宗教界にてありし、而して此の老子が生涯の大激励たりしものは 実に政治界にてありしなり。

『教育時論』(第二五四号、明治25・5)の「理科 哲学——一元論ト二元論」に、ヘーゲルが何度か顔をだす。宇宙には理想がある、という人と、それを否定するひとがあるという。理想があるという人は、一元論者(ただ一つの原理で、宇宙の問題のすべてを説明しようとする考えのひとつ)である。しかし、――

宇宙ヲ理想ノ変相(へんそう)(顔やすがたをかえる)ナルガ如クニ説明スレバ、ヘーゲルニモ似通ヒタランカ。

『哲学雑誌』（第七巻・第六四号、明治25・6）に、大西祝は「形式的論理学ノ三段論法 因明ノ三支作法 并彌兒ノ歸納則ヲ論ス（第一）」を寄稿したが、このなかにヘーゲルの名が出てくる。

彼ノ一時最大最後ノ哲学者トマデ云ハレルルヘーゲル出デ、西洋ノ論理学ニ大激動ヲ与ヘシハ隠レモナキ事実ナリ（二六頁）。

『亜細亜』（第五八号、明治25・9）の「綱—三宅君の我観を読む」（得能文）に、ヘーゲルのことが引きあいに出されている。

君のメタフィジックは、全くハルトマンなりと云ふ可し。（中略）又た、此世界が必ず遂に無意識の境に至るべきや、否、を説明せず。又た、観念とは、ベルケレー（バークレー、アイルランドの哲学者）の如き一箇人的観念なるか。或は、ヘーゲルの如き普遍的観念なるかを明示せず。

明治二十年代——日本においては、美学の研究の歴史はあさく、訳述にしても、中江兆民が訳した『維氏美学』（上下Ⅱ明治16・11、同17・3文部省編輯局）のほか、『文学評論』志からみ草紙の論文があるだけであった。

東京府下の書店をめぐる、まれに「原本のハルトマン又ロツチエ、ヘーゲルが美学の英訳」があったという（『文界彙報 美学講義』『早稲田文学』第二六号、明治25・10）。

『哲学雑誌』（第六八号、明治25・10）の「雑録——文壇に於ける平等主義の代表者『ウォルト、ホイットマン』 Walt Whitman の詩について」（夏目漱石）に、ヘーゲルのことが引きあいに出されている。

余は只「バイロン」の厭世主義を悲しんで「ホイットマン」の楽天教を壮（勇ましいこと）とするのみ 又其「ヘーゲル」を読んで（……英文が四行ある）か咏じ出せるを嘉みする（たのしむ）者なり

『哲学雑誌』（第六九号、明治25・11）に、中島力造は講演筆記を発表した。題して「英国新カント学派に就いて」（これは別名・英国ヘーゲル学派）という。イギリスにおいて、読書界にヘーゲルを紹介したのはジェームズ・ハチソン・スターリング（一八二〇～一九〇九、スコットランドの哲学者）であった。それ以前にも多少ヘーゲルを研究した者がいないでもなかったが、スターリングの『ヘーゲルの秘密』（*The Secret of Hegel*, 1865）こそ、英語でヘーゲルの哲学を講じた最初の書であった。

ヘーゲル哲学の特殊なる点は、弁証法であるが、イギリスのヘーゲル学派は、この論法についてあまり研究しなかった。由来イギリス人は、じっさいの精神に富み、無形のことを考えるの得意ではない。だからかれらの哲学は、経験学派に流れる傾向があった。だから「ヘーゲル杯は頭から詰らぬものと看做して研究をしなかつた」という。

前掲誌（第六九号、明治25・11）の「雑録」に、「ヘーゲルの弁証法（*Dialektik*）ト東洋哲学」（園田宗恵）の小論がのっている。ヘーゲルとその弁証法、老子・莊子・淮南子（古今の逸話などについて、老子思想を中心にまとめた書——二十一卷）とヘーゲルの弁証法とのかかりについて論じている。

「ヘーゲル」ノ頭脳ハ 論理器械ナリ 宇宙ノ万有（すべて）ヲ執テ 以テ 之ヲ論理上に推究シ（推しきわめる）出セリ

有名なヘーゲルの弁証法は、かれの発明によるものでなく、古代ギリシャのエレア学派に由来するものという。

『城南評論』（第九号、明治25・11）にのった「不知庵主人の文学範囲及び定義を異む」に、ヘーゲルの名がみられる。不知庵こと内田魯庵（一八六八～一九二九、明治期の評論家・小説家）が、さいごにたよったのは、目的理想だという。そのためかれは古今の詩巻や哲学書をおなじ箱の底に入れて葬ろうとしたという。

かれの言にいはく カントの純理論、ヘーゲルのロジック、沙翁の戯曲、カアライルの論文皆文学世界の生産物となすを得べしと……

『文学評論 志からみ草紙』（第三八号、明治25・11）に、「審美論（其二）」が掲載されたが、このなかにヘーゲルの名がみられる。

審美学（美や芸術の本質、原理、形式などを究める学問。こんにちの美学——引用者）にて 実（内容、中味）に対していふときは、単に象（すがた、かたち）といいむよりは、或は主想象などいひ、或は仮象（かりのすがた、形）といふべし。ヘーゲルも既に仮象の語を用いしが、別にこれを用いる所（えん）以（わけ）をば弁ずるに至らざりしなり。（三八頁）

『国民之友』（第一八二号、明治26・2）に、井上啓次郎は「詩歌改良の方針（承前）」を寄稿している。このなかで詩作を試みた哲学者にふれているが、ヘーゲルを例にひいている。

ライプニッツは少壮の時（わかいとき）詩を作りしも、其後は探求的學術に従事せり、ヘーゲルも詩を作れるとあるも、其詩甚だ拙悪（つたない）にして 一首も人に示すに足るものなし……

『国民之友』（第一八五号、明治26・3）にのった「偽哲学者の大僻論（かたよって、公正でない議論）」は、高橋五郎（一八五六―一九三五、明治・大正期の評論家・英語学者）が、井上哲次郎の論文「日本の学者に告ぐ」（『国民之友』第一一号に発表、明治24・3）に反論したものである。このなかにヘーゲルのことが出てくる。

独逸の大哲学者ヘーゲル曰はずや——「宗教は霊神と霊神との関係を以て基礎と為す、……

『国民之友』（第一八八号、明治26・4）の「特別寄書——現今の哲学問題（中島力造）」に、ヘーゲルへの言及がみられる。中島によると、いま哲学者が力をつくして考究せねばならぬのは、われわれに直接関係がある哲学問題だという。十九世紀のはじめごろ、フィヒテ、セリング、ヘーゲルなどの勢力がさかんであった時代には、重要な哲学問題といえは「絶対」（宇宙の究極原理）についての問題であった。

ヘーゲルの死後、其学派分離せし以来、非経験学派漸次其勢力を失ひ、経験を重んずるの傾向年を経て勢力を得、大に超絶的学派を排くるの姿を呈せり

『青山評論』（第三五号、明治26・4）の「論説——近代厭世哲学（承前）——」——シヨツペンハウエルの厭世哲学」に、ヘーゲルのことが出てくる。

シヨツペンハウエル 彼れ自身の生涯は 誠に憐むべし 彼れ當時の大哲学者ヘーゲルと争て勝つ能はず 當時の大神学者シユラエルマツヘルと争て勝利能はず……

北村透谷（一八六八〜九四、明治期の評論家・詩人）は、小文「人生の意義」を『文学界』（第五号、明治26・5）に発表した。同人によると、人間のほかに人間を研究する者はいないという。ライフ（命）ある者のほかに、ライフを研究する者はいないという。北村のこの小論のなかに、ヘーゲルが出てくる。キリスト教からすると、唯心論（世界の本体、現象の本質は精神にあるという論）は悪とすれば、――

カントでもヘーゲルでも、スピノザでも御相手に成されて、主観的アイデアリズムでも 客観的アイデアリズムでも、絶対的アイデアリズムでも 何でも彼でも撃ち平げられたが宣からふと存するなり。

『文学界』（第七号、明治26・7）の「彙報——純美文学」に、ヘーゲルのことが出てくる。

ロツツエ、ヘーゲルの徒をも驚かし、沙翁ギョーテのともがらも之を聴きては地下にうろたへやせむと不知庵の主人に罵られける……

西村茂樹著『読書次第』（博文館、明治26・7）は、読書論である。著者によると、読者はまず正心修身の道——道德学をまなんだのち、専門の勉強をすべきという。はじめに和漢の書から入り、西洋の書にいたったらいが、西洋書がよめるようになるには多少の歳月が必要なので、訳

書によって講究するもよし、といっている。フランスやドイツには心性学や道徳学の良書があるので――。「独逸ノ学士ニテ坎徳、黒傑爾ノ一家（ふたりの学者）」をよむべきという（四八頁）。

『教育時論』（第三〇〇号、明治26・8）の「理科 哲学——哲学とは何ぞや」は、中島力造の講演筆記である。中島によると、哲学は原理を研究する学問だという。哲学者のなかでも、哲学の定義がまだはっきりしていないという。

例えばカント、ヘーゲル、ヘルバルトあたりの哲学を考へた事は、スペンサー、ヴント杯哲学といふ事とは多少異つて居ります、……

戸川秋骨（一八七〇―一九三九、明治期の評論家・英文学者、のち山口高校教授）が、『文学界』（第一一号、明治26・8）に寄せた小文「ゲーテの小河の歌を読む」に、ヘーゲルの名がみられる。

一疋の犬、霊の如く又獣の如しとはファウストの想なり、一個の茶碗すら猶宇宙万有を包めりとはヘーゲルの哲理なりとかや……

『教育時論』（第三〇七号、明治26・10）の「理科 哲学 哲学の必用（承前）」に、ヘーゲルへの言及がある。

理学（哲学）は克く真如（真理）の骨を露はさしめたるか、神の本体を託き得たるか、ヘーゲルの絶対は、理学の為に破られたるか……

『早稲田文学』（第四九号、明治26・10）に、金子馬治は「希臘美学——プラトンの美論」の小文を寄せた。このなかにヘーゲルその他の哲学者の美論が紹介されている。

凡そ美は製作品其物には存ぜずして 製作品の人心中に引起こす幻象其の物に存せりとは 近世シルレル、ヘーゲル、ハルトマン等の最も明に唱道せ

し所なり

『教育時論』（第三〇八号、明治26・11）に、「理科 哲学——哲学の必要（承前）」の小文がのっている。記者によると、哲学は一起一伏、確定するところがないという。したがって一つの哲学体系をもって、その学問の終局（結末）とみることができないという。

ソクラテスは詭弁派を打破し、プラトニーはアリストートルに、デカルトは、ロックに、ウヨルフはカントに、セルリングはヘーゲルに、ヘーゲルはシヨペンハワーに、シヨペンハワーはハルトマンに敗れる

『教育時論』（第三一〇号、明治26・11）の「理科 哲学——ヘーゲル後ノ哲学」は、十九世紀初頭から哲学界に君臨したヘーゲル哲学の凋落した理由やその後哲学者が建てた学説を略述したものである。ヘーゲルの哲学が落ちぶれた第一の原因は、「其ノカントノ一面相ノ叙説タリシガ故ナリ」という。第二の原因は、ヘーゲルが建てた知識論は、「世ノ思想ト相容ル、コト能ハズ」点にあった。

『文学界』（第二二号、明治26・12）の「おも影 其一（風潭）」に、ヘーゲルの名がみえる。井上哲二郎は、東西比較哲学を講じることができるのは、世界でじぶんだけだと大言壮語し、ベルリンやパリの哲学者をおどろかしたという。日本においてはぐくまれた新しい思想があるわけなく、また哲学の大家もいない。

カント、ヘーゲル、シヨウペンハウエルなど、おのがじ、（自恃——じぶんをたよる）其宗（学派）を立てて其学派の講釈こそきかるれ……

『早稲田文学』（第五〇号、明治26・12）に、「シヨオペンハウエル」（すみづのや）の小論がのったが、このなかにヘーゲルが引きあいに出されている。記者によると、シヨウペンハウエルは厭世思想をヨーロッパにひろめた仏教的な隠士（隠者）だという。かれは——

時の大家フィヒテ、シェリング、ヘーゲル等を甚しく冷笑し甚しく罵倒して 我が哲学は人生の中心より迸出せる（ほとばしる）哲学なり

といった。

『日本評論』（第五八号、明治26・12）の「雜誌」に、「シヨウペンハウエル」の小記事がのっている。このなかにヘーゲルの名がみられる。すなわち――、

ヘーゲルに次ぎて世人の持て囃す所となりしものはシヨウペンハウエルにして、その大名（高名）の初めて公けに知られたるは、彼が廿六歳の時なりき。

『教育時論』（第三一五号、明治27・1）の「理科 哲学——哲学攻究の方法」（松本文三郎）において、ヘーゲルその他の大物哲学者を例にひいている。記者によると、哲学者になるには、いくつかの条件をみたさねばならない。——その見識が高まいであること。着眼点がすぐれていること。それらを養うには、古今のすぐれた人物の著作をじゅうぶんに読み味う必要があるという。

古代にありては、「プラトー」、「アリストートル」、近代にありては「カント」、「ヘーゲル」如き輩の大著を取り、之を熟読玩味するに如くはなし、……

同誌同号には、このあと「ヘーゲル後ノ哲学」（久津見息忠）として、ショーペンハオアの倫理学、ハルトマン（一八四二―一九〇六、ドイツの哲学者）についての小論がのっている。ヘーゲルの名がみえるのはハルトマンの章句であるが、大学生のときヘーゲルやショーペンハオアを学び、大いにうるところがあったという。

ハルトマンノ哲学ハ広大ナリ、深邃ナリ（学問がふかい） 知見ト超凡ナル（凡人の域をでている） 思考トニ富ミ、巧ミニシヨペンハワート |ヘーゲルトヲ調和シテ、一ツノ大ヒナル思弁的教系ヲ成シタルコト、実ニ欽迎スベキモノナリ……

『文学界』（第三号、明治27・1）にのった戸川秋骨の「変調論」に、ヘーゲルのことが出てくる。戸川によると、人間の歴史は、建設と破壊との歴史だという。一系統が起ると、他の系統をやぶる。やぶられると建て、建ててはやぶられる。プラトンの哲学は、アリストテレスの哲学にやぶられた。

カントの哲学は　ヘーゲルの取らざる処ところにして　ヘーゲルの哲学は　又またシヨッペンハウエルの好まざる処ところなり、……

『六合雑誌』（第一五七号、明治27・1）に、「露国思想界の近況」（露国神学士　小西増太郎）がのっており、このなかでロシアにおけるヘーゲルの移入史にふれている。一八三〇年代にヘーゲルの思想（汎心論——パンテイズムス）万物は神のあらわれであり、万物に神が宿っている。万物は神そのものであるとの説）がロシアに入るや、にわかに社会の現象が一変した。文学や史学にその主義がひろまったという。

彼かの有名な文学評論家ウ、ペリシスキー（ペリーンスキイ）「一八一―一四八」ロシアの評論家。一時ヘーゲル哲学に心酔）一派の如きは、ヘーゲリリ氏の主義を文学に応用したり……

『早稲田文学』（明治27・1・2）に、「シヨオペンハウエル」（すみゝのや）の小論が二回にわたって連載された。これらの記事は、シヨープンハオアの人と思想について略述したような印象をあたえる。シヨープンハオアは、一八二〇年の夏期から一週六時間ベルリン大学の講師ドツェントとなり、教授ヘーゲルを超えて不変の成功をおさめたと思っていたが、出席の生徒がだんだんへって、ついに講座から身をひくにいった。当時、ヘーゲルの名声は世間にとどろいており、学生もしぜんかれの講筵こうえん（講義の席）に出るのはむりからぬことであった。

彼かれすなわち思おもへらく、ヘーゲルとベツッケー（フリードリヒ・エデュアルト・ベネッケ）「一七九八―一八五四、ドイツの哲学者、のちベルリン大学教授」とは　必ひつ定てい我われが失敗の原因ならんと……



澁江保編著『哲学大意』
(博文館、明治27・2)。[筆者蔵]

『教育時論』(第三一八号、明治27・2)の「理科 哲学——ヘーゲル後ノ哲学「完」」は、同誌(三一五号)のつづきであり、この号をもって完結している。この稿は「ベンジャミン・イー、スミス」(不詳)の摘録のほか、諸書を参考にしながら卑見をのべたものという。

『同志社文学』(第七四号、明治27・2)の「論説」に、「哲学の勧め」(森田久万人)がのっている。執筆者によると、世間には「哲学」の名をきいただけで、それがどんなものか調べもせず、一言をもって拒否する人がいるが、これはうけ入れがたいという。願わくは古今の思想のあとをたどり、細かく

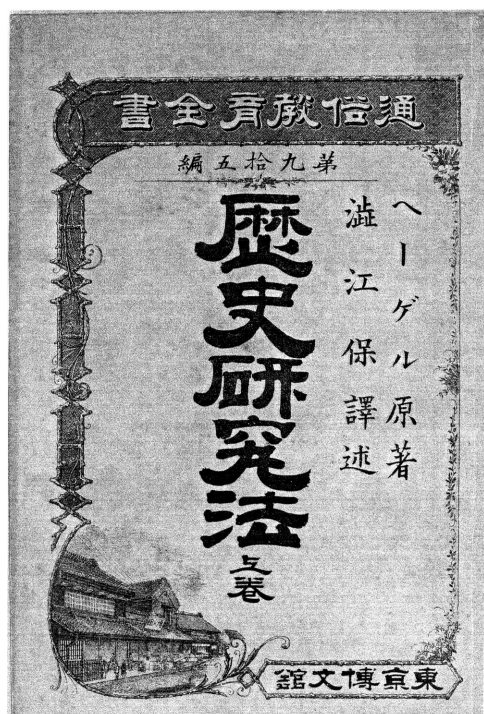
考察してほしいと。試みに哲学の歴史をみると、古代より下って――

ベーコンの帰納法、デカルトの自吾論、ロックの智識論、ライプニッツの実物論、カントの純理論、ヘーゲルの絶体論、ロツチエノ實在論、是れ皆哲学進歩の段階を成し居るにあらすや……(六三頁)

澁江保(一八五七―一九三〇)、江戸後期の儒医・澁江抽斎の七男。明治から昭和期にかけての英学者。尺振八の共立学舎、東京師範学校、慶応義塾にまなぶ。著述家)の述作『哲学大意 全』(博文館、明治27・2)は、初学者のために哲学の概要をまなばせるために編んだもので、難解の議論はつとめて、これをさけたという(「小引」)。

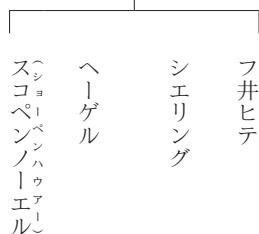
本書は、――総論 第一卷 哲学の論拠 第二卷 哲学小史 第三卷 論理学 第四卷 心理学 第五卷 倫理学 第六卷 社会学 第七卷 法理学 附録 東西哲学諸派系譜(略系)から成る。

さいこの「東西哲学諸派系譜」のなかに、ヘーゲルが出てくる。



『歴史研究法 上巻』
(本邦初のヘーゲルの翻訳)。(筆者蔵)

(六) カント派



フ井ヒテ 一七六二年生、一八一四年死。
シエリング 一七七五年生、一八五四年死。
初メフ井ヒテノ門^{もん}ニ入りシガ、後分離^{のちぶんり}シテ更ニ自然哲学^{しぜんてい}ト名クル一新派ヲ立テリ
一七七〇年生、一八三一年死。
カントノ派ニ属ス。其の派、保守、進取ノ二ツニ分カル。
カントノ門弟ト称ス

明治二十七年（一八九四）二月、澁江保はヘーゲルの「歴史哲学」を英訳から重訳した。定本は「レクチュアス、オン、ゼ、フ井ロソフ井、オフ、ヒストリ」(Lectures on the philosophy of history)である、と「例言」にあるが、訳者・版元・刊行年については明らかにしていない。題して——、『ヘーゲル原著 澁江保訳述』歴史研究法 上・下巻』(博文館、上巻は明治27・2、下巻は明治27・3刊行)という。同書はおそらく明治期に刊行されたヘーゲルの翻訳としては本邦初のものであろう。

上巻（一八〇頁ある）の内容は——

総論 歴史の地理学的論拠 歴史的論拠の分類 第一編 東洋世界
総論 原著者ヘーゲルの伝（訳者によると、ゴスウ井ツク氏の独逸文学史によって著者ヘーゲル氏の伝記をのせた、という。「読者この伝記を参照して 著者の人となりを明かにせられんことを乞ふ」とある。一六九―一八〇頁まで）。

下巻（二〇〇頁ある）の内容は——、

第一編 東洋世界 第一章 支那 第二章 印度 第三章 埃及
第二編 希臘 総論 第一章 希臘精霊の元素 第二章 雅典（アテネ）
ネ——引用者） 第三章 土巴爾遠 第四章 馬基頓王国 第五章

希臘精靈の滅亡 第三編 ローマ 羅馬世界 総論 第一章 上古（古代）より第二ビユニツク戦（ポエニ戦争）に至る 第一節 羅馬の精靈の元素 第二節 上古より第二ビユニツク戦に至る迄の羅馬史 第二章 第二ビユニツク戦より帝政時代に至る 第三章 帝政時代より衰亡の時代に至る 第一節 帝政時代 第四編 独逸世界 総論 第一章 中古（上古と近古とのあいだ） 緒言 第一節 封建制度及び宗門政治 第二章 近世 第一節 宗教改革か政治的進歩の上に及ぼしたる影響 第二節 仏国革命

ヘーゲルによると、本書の目的は、世界の哲学的歴史を講ずるにあるという。世界の哲学的歴史とは、世界についての一般的觀察を編んだものの意でなく、全般的歴史そのものの意味だという。

『心海』（第七号、明治27・3）の「論説——有神哲学上の三大観念」（石川喜三郎）に、ヘーゲルのことが出てくる。近世哲学における、――

セルリング、ヘーゲルの絶体実在、ハートマンの無意識実体、スペンセルの不可思議実体等は皆これ神の観念に附せる称名（しょうめいねんぶつ）にして同物異名たつに過ぎず。

『国民之友』（第二二三号、明治27・4）の「批評」に、中江兆民の重訳のことが出ている。その訳本は――

道徳学大原論前編

独乙 スコペノーエル氏著
仏蘭西 ビュールドー氏訳
中江篤介氏重訳
一二二三 館蔵版

という。同書の講評者によると、中江篤助（とくすけ兆民のこと）氏はまことにフランス学者だという。しかもフランス風の発音法を知っているだけだという。われわれはドイツにショーペンハオア（Schopenhaur）という哲学者がいることを知っているが、“スコペノーエル”という人名があるのを知らないという。最近ではショーペンハオアの名は、日本でも聞かれるから、彼を知っていることはけっして博学のあかしにならぬという。ショーペンハオアは、一種奇説をもって、

当時盛んに持囃もてはやされたるカント、ヘーゲル、フ井ヒテ、シエルリング等を疾視し（にくんで見る）すること蛇蝎だかつ（へびとさそり）のごとし、

という。かれはとくにヘーゲルとフィヒテをひじょうにきらい、「売哲学者ばい」（哲学を売りものにしてゐる哲学者の意）Philosophie-Professorenと呼んで、罵倒した。

『教育時論』（第二二五号、明治27・4）の「理科 哲学——哲学に関する謬見びやうけん（まちがった見解）（松本文三郎）に、ヘーゲルのことが出てくる。論者いわく——哲学は人生において無用なものか。哲学の根本についての解釈は一定していないから、とうてい一つの科学として成立しないという。

看みよ古来こらいの哲学系統、甲起こうたちて乙おつたおける、「アリストートル」や「カント」や、「ヘーゲル」や、彼かれ豈あに蓋かえ世せいの英傑えいけつに非あらずや（かれらは一世を圧倒するひじょうにすぐれた人物ではないか）

『早稲田文学』（明治27・4）に、「カント前の美論の大勢」（U・K）がのつたが、このなかでヘーゲルの美学観にふれている。

近代の美学は 実じつに此この問題をもて中心点とせり、例たとへはヘーゲルが心理の感覚界に現れたるを美と説ける、シヨオペンハウエルが自然の美及び美術は、差別さべつの中に平等を宿さぐらせるものなりと説ける……

『六合雑誌』（第一六一号、明治27・5）の「雑記——歴史の価値と厭世思想」に、ヘーゲルのことが出てくる。記者によると、近世のヨーロッパにおいて、史学が隆盛におもむいたのは、ドイツの大哲学者らが歴史哲学（歴史過程および歴史認識をあつかう哲学の部門）を説いたことに大原因があるという。

フィヒテ、シェリング又特またとくにヘーゲルは 其その哲学上の根本思想よりして 此世の歴史の進行に一定の趣向する（ある方向にむかう）所ありと認

めたり 彼等に取りては歴史上の変遷は 意味なき事実の連続にあらず 一趣意の実現されつゝある者なり……

中沢臨川（一八七八―一九二〇、明治・大正期の評論家）の「信仰の廓清」〔『明星』第五号、明治27・5〕に、ヘーゲルの弁証法にふれたくだりがある。

懷疑は信仰の別名である。ヘーゲルが弁証法の法式（一定のきまり）を籍りて曰はゞ、神に対する総念の進化である。

『六合雜誌』（第一六二号、明治27・6）に、高橋五郎の小論（「フ井ヒテ（Ficht）Ⅱ学者の天職」）がのったが、このなかにヘーゲルが出てくる。ショーペンハオアは、性格がひじょうに悪かったという。

り、……
当時の大哲学者（ヘーゲル、シエルリング等）を罵りて之を金銭の奴隸となせり、而して己れは無神説を唱へて一に（ひたすら）破壊を是れ事とした

『心海』（第一〇号、明治27・6）の「論説——有神哲学上の三大観念」（石川喜三郎）は、汎神論（一切の存在は神——神と世界は一体といった哲学論）の性質について論評したものである。論者はこれを『客観的万有神教』とよんでいる。この小論のなかに、ヘーゲルが出てくる。

万有哲学は 即ち『客観的万有神教』にして、これが主唱者はセルリング、ヘーゲルの両氏なり。

『早稲田文学』（第六六号、明治27・6）にのった「美の道德的価値を論じて文学者の責任に及ぶ」に、ドイツの重要な美学者としてヘーゲルの名が出てくる。

近世独^{ドイツ}乙^{おも}美学者の重なる者、カントを初めとして、ヘーゲル、シヨオペンハウエル、ハルトマン等に至るまで、或は善なる理想、或は抽象的普遍真理、或は絶対意、或は宇宙想等の感覺的再現をもて美なりと論ぜる、……

『青山評論』（第四八号、明治27・6）の「学海——東洋哲学研究の必要を論ず（承前）」（浅井豊久）において、論者は東西の哲学を比較対照して、その異同を研究する必要をといっている。中国の学者が説くところのものに、西洋の哲学者の所説との類似点があるという。

仏教、陸象山（一二三九〜九二、南宋の学者）、王陽明（一四七二〜一五二九、明の学者）等の所説は、往々フイヒテ、シエリング、ヘーゲル、ベルギューリ諸氏の唯心論（世界の本質・現象の本質は、精神にあるという論）に類似するが如き……

『早稲田文学』（第六七号、明治27・7）の「米国の新文豪ラルト、ホイットマン」は、小学校教育をうけたのち、植字工・小学校教師・新聞や雑誌の編集者となったウォルト・ホイットマン（一八一九〜九二、アメリカの詩人）の人とその作風などについて論じたものである。かれはまた古今の哲学書に親しみ、その思想をやしなったという。

殊^{（フラトン）}にプラトーン、ソクラテス、フイヒテ等の道德論、ヘーゲルの發達論のごとき、最も彼れが思想を養へるものなりき、……

井上哲次郎の「我^{わが}世界観の一塵^{いちじん}」〔哲学会講演、『哲学雑誌』第九卷・第八九号、明治27・7〕に、カント、ヘーゲル、シエリング、シヨープンハオアラの唯心論のことが出てくる。

カントに依つて喚起されて其觀念は、ヘーゲルに至つて極度に達して居ります（中略）夫故に古来セリングの哲学を客觀的唯心論と云ふのであります、ヘーゲル、シヨッペンハウエル等の哲学は、余程^{よほど}立て方^{かた}が違つて居りますけれ共^{ども}、矢張り^{やは}何れも唯心論であります……

『青山評論』（第四九号、明治27・8）に、小論「唯物論に就いて」（高杉栄次郎）がみられる。論者によると、唯物論は時勢の変せんとともに多少浮き沈みがあったが、近年ドイツの哲学者のなかに、唯心論を祖述するものが多いという。

カントの明哲（めいてつ）（物ごとによく通じていること） シエリングの壮麗（さうれい）（ヘーゲルの通達（つうたつ）（その道に深く達している） ロッツエの精微（せいび）（精細） 高尚なる概（おほ）ね唯心論を開発（かいはつ）せり（ひらきはじめた）

『女学雑誌』（第三九一号、明治27・8）の「論説——美海（びかい）の藻屑（もくず）」のなかに、ヘーゲルが出てくる。論者によると、哲学は科学（そんがく）を総括（そうかつ）してあますところがないように、戯曲（かきく）（演劇の台本）は叙事詩や叙情詩を包含（ほうがん）し、劇場において演じられるときは、百芸（もくぎ）を網羅（もうら）しているという。

ヘーゲルは、戯曲を以て、叙事詩と叙情詩との、互（たがひ）に偏重（へんちゆう）したるもの（一方だけを重んじる）を、一致（いっち）せしめたるものなりと云ひぬ。

『早稲田文学』（第七一号、明治27・9）にのった「文学の解釈（真正の読書法）」は、エドワード・ダウデン（一八四三―一九一三、アイルランドの文芸評論家・シェイクスピア学者）の所説の翻訳である。かれによると、もし百冊ほどの本があって、そのなかのどの本を選ぶかというより、そのなかの一書をどのように読むかが重要であるという。この読書論のなかにヘーゲルが出てくる。

吾人（ごじん）（われわれ）はヘーゲルの哲学（いんぴ）に隠微（いんび）（よくみえぬもの、奥深く微妙なところ）あるを聞く、然れども隠微（いんび）、豈（あに）ひとりヘーゲルの有（ある）のみあらんや。大作家には常に隠微あり、……

『文学界』（第二二号、明治27・10）に、戸川秋骨は「罔影録（もうえいりく）」（一種の宇宙論のようなもの）を寄せた。このなかにヘーゲルのことが出てくる。

思ふにヘーゲルの所謂（いふ）スピリット（れい）（霊気）なるものは、常に六合（りくくわう）（全世界）に亘（わた）りて活動（かくどう）す、然れども其（そ）の活動（かくどう）するや之（これ）を人間の心裡（しんり）（心のうち）に於（お）て

す……

『教育時論』（第三四六号、明治27・11）の「時事寓感——木村氏の倫理学論」は、本月の『哲学雑誌』において、さらに続稿「倫理学ハ実践学ニ非ザルヲ論ジ 併セテ中学校 師範学校等ニ該学科ノ必要ナルヲ説ク」について批評したものである。木村氏とは木村鷹太郎（一八七〇—一九三一、明治・大正期の評論家、のち『日本主義』を発刊）のことである。

評者によると、木村はじぶんの推理力、論理をすすめて目的地に猛進するところがあるという。

カントも、ヘーゲルも、其学説を浅薄と罵られ、孟子も程朱（北宋の大学者・程顥や南宋の大学者・朱喜をいう）も、鹵莽（粗略）と嘲られ、釈伽の教理は支離滅裂と笑はれたり。

『心海』（第一五号、明治27・11）の「論説——老子哲学一斑（前号の続き）」に、ヘーゲルのことが出てくる。論者によると、学術社会に名をとどろかせたプラトンやヘーゲルは、非凡なる思想をもって世間のひとびとをおどろかしたが、その所説と名声は、自国のわく内にとどまっているという。

プラトー、ヘーゲルの如きは 容易に凡人の及ばざる思想を抱き 天下の諸士を驚かし、其名は四方に輝かせしかど、其の述べるところ決して自国の思想界を脱する能はさりしか プラトーはギリシヤ国の 賢哲ヘーゲルはゼルマニヤ（ドイツ）の哲人として止まりしのみ、……

『六合雑誌』（第一六八号、明治27・12）の「欧米神学思想の現況」（小崎弘道）に、ドイツのプロテスタント神学者アルブレヒト・リッチェル（一八二二—八九）のことがのべられている。かれはボン大学でニーチェにつき神学を学んだのち、ハーレ大学に転じ、そこで「エルドマンの膝下」にありてヘーゲルの哲学を学ぶ」とある。

『心海』（第一七号、明治28・1）の「雑誌——露国思想界の顛末（承前）」に、ヘーゲルのことが出てくる。今世紀において、ロシアでとくに

礼遇優待されたのは、「シェリングと、ヘーゲルに若くはなかりし（のようである）」という。

『九州評論』（第二号、明治28・2）にのった論文「シヨオペンハウエルの厭世観」（鎌田亥四郎）の「中 厭世観の梗概——一 観念としての世界」に、ヘーゲルの名がみられる。

シ氏（シェリング）の哲学の起点は フ井ヒテ、セーリング、ヘーゲル等と同じく、カントの主観的唯心論に在り。……

『心海』（第一八号、明治28・2）の「雑記——露国思想界の顛末一班（承前）」に、かつてシェリングやヘーゲルの教義を大いに批評したロシア人としてケドロフ氏（不詳）のことが出てくる。

『心海』（第一九号、明治28・3）の「雑記——露国思想界顛末一班」に、ヘーゲルの哲学思想が、ロシア思想界の一面を、かごの中に入れたことはじつに意外だという。ロシアにおいては、スタンケウ井チユ、グラノフスキー、ペリンスキー、ヲガレフ、バクーニム、ゲルツエンなどの思想家が、「ヘーゲルを崇尚 仰慕（あがめとうとぶ）せること神のごとし」という。

『八紘』（第一号、明治28・3）は、立教学校文学会の機関誌である。創刊号の「論説——新年の新思想」に、ヘーゲルのことが出てくる。

哲学とは何ぞ、古人の之を釈する（説明する）もの 比々（しばしば）皆誤らざるはなし、上にしては「プラトン」「アリストテレス」、中には、「ヘーゲル」より「ヘルバルト」に至り、下にしては「スペンサー」……の如き皆然るなり

津田真道（一八二九—一九〇三、明治期の啓蒙的官僚学者）は、『東京学士会院雑誌』（第一七編之四、明治28・4）に、論説「唯物論」を發表した。これはじっさい講演筆記であったが、このなかにヘーゲルが出てくる。

津田によると、唯物論というのは、宇宙は本来ものから成っている、という意である。また唯心論（世界の本体、現象の本質は、精神にあるという意見）は、かれによると、宇宙の現象はすべてひとのところに帰するものという。

『宇宙神教』（第四卷・第一一号、明治28・5）の「ハイ子（こ）が事を記す（其壹）」に、ヘーゲルのことが出てくる。「ハイ子」とは、ギリシヤ的か



坪内逍遙

つ近代的思想を有するハインリヒ・ハイネ（一七九七～一八五六、ドイツの詩人。ボン、ゲッチェンゲン、ベルリンの各大学において法律をまんだ）のことである。かれはとくにベルリンでは、ヘーゲル哲学の感化のもとにあったという。

ヘーゲルが愛せし人の神性あること、この思想は 彼が心裡に躍如たりき（生き生きとしている）。

『太陽』（第一三号、明治28・6）の「島国習気（習慣）」において、論者はこんなことをのべている。いまの思想界には、ときどき自分がよいと認めたものを否定するやからが多いという。流行のドレイとなっているのがこれである。スペンサー、ベンサムらが神興にかつがれすでに十年になる。

次でヘーゲル唱へられ、シヨーペンハワー学ばれ、やがて詩的哲学尊崇（あがめる）せられ、世を挙げて殆ど神秘説の幽玄に心酔せむとせしことありき。

『心海』（第二二号、明治28・6）の「雑記——露国思想界の顛末一班（承前）」によると、ロシアの有名な法律家兼社会事業家であるペ、ゲ、レードキン（一八〇八～？、一八七八年ペテルスブルク大学法理哲学教授、のち元老院議員）

も亦ヘーゲルの影響を蒙ること甚多し。

という。

『国学院雑誌』（第八号、明治28・6）の小論「国文学の将来」において、坪内逍遙（一八五九～一九三五、明治・大正期の評論家・小説家・劇作家）は、ローマン主義の思潮にひたったドイツの哲学者としてヘーゲルの名を引いている。

フィヒテ、シエリング、ヘーゲル、シヨオペンハウエル、ハルトマンの如き、多少此の流に俗したもの也。

『国民之友』（第二五七号、明治28・7）の「特別寄書」に、ヘーゲルのことが出てくる。論者によると、いまイギリスにおいて惟心（唯心）論が大きな勢力をもつ学説だという。この学説は、自然論とおなじくイギリス固有のものでなく、ドイツから輸入したものである。

カント――ヘーゲル等の哲学に基づくものなり。

という。イギリスの新カント学派（＝新ヘーゲル学派）は、ヘーゲル哲学にちかい故にこの呼称があるという。

『文学界』（第三一号、明治28・7）の「氣焰何処にある」（戸川秋骨）に、ヘーゲルの名がみられる。論者によると、十九世紀の科学的研究は、すくなくならざる功績を学術のうえに印したが、事物の研究は、小刀やのみでなるものでないという。

必らずやヘーゲルの斧　シヨーペンハウエルの剃刀を要する事あるべし……

『心海』（第二三号、明治28・7）の「論説――独乙に於ける将来の哲学」（ペテルスブルクの大学教授ア、イ、ウエデンスキイが、同地の『神学雑誌』に掲載したものの抄訳）に、ヘーゲルが出てくる。

今世紀の終りに至りて、和すへからざる二つの反対主義、「構成的唯心論」（ヘーゲル派、シエリング派）と唯物論は　互に睥睨するを息め（にらめ）つけることをしない、唯物論は　益実在の分子を帯ひんことを努め、唯物論は可成其極端を避けんと力めたり。

『八紘』（第四号、明治28・7）の「雑録——哲学と神学の将来」に、ヘーゲルの名が引かれている。論者によると、古代の幼稚な哲学では、万物の根本は水と火と風とされ、中世にいたっては神智的哲学や哲学的神学となった。そして近世になると、ユニヴァーサル普遍救済説（けっきよく人類は救われるという説）となった。

一方の極端に奔りては フ井ヒテ、ヘーゲルの主観的——絶対的唯心説となり、……

西洋のいちじるしい歴史の見方として、——歴史は世を経るごとに善く進みゆくという考えがあるという。『教育時論』（第三七二号、明治28・8）の「時事寓感——歴史の見方」に、ヘーゲルが唱道（先に立っている）した歴史哲学のことが出ている。キリスト教は、天国を目標とするだけでなく——、

フィヒテ、シェリング、ヘーゲル相次ぎて、これを哲学的に解釈し、所謂歴史哲学なる者を唱へたり。

『宇宙神教』（第一二号、明治28・8）の「雑録——ハイネがことを記す（其の二）」（てんらいし天籟子¹²）に、ヘーゲルの思想的影響を受けたハインリヒ・ハイネのことが出てくる。

予（ハイネ）はヘーゲル派の人々と共に豕を牧ひき（豚とみなして交わる）

『心海』（第二六号、明治28・10）の「論説——聖書学者||言語学者及びシライエルマヘル」（関 竹三郎）は、シュライエルマハー（一七六八—一八三四、ドイツのプロテスタント神学者。カントやローマン主義の影響を受けた。のちベルリン大学教授）の哲学について論じたものであるが、ヘーゲルのことが出てくる。

哲学を以て宗教を撲滅せんとしたるヘーゲルに反対して、シライエルマヘルは 宗教を独立に存すべきものとし、哲学と権を問ふして（力で圧倒する）一歩も譲らずと論じ、……

『青山評論』（第六〇号、明治28・10）の「論叢——宗教の意義」において、ドイツの著名な哲学者の宗教観が紹介されている。論者によると、古来、宗教とはなにか、といった間に、宗教家・哲学者・文学者らは、各人各様の解釈をあたえてきたが、中でもいちばん価値があるものは、哲学者のものでないかという。

ヘーゲルが宗教を以て 完全なる自由なりと云ふに止まらず。宗教とは神霊が有限の霊を通じて 自らを覚知する（よく理解すること）の外ならずと論ぜしも亦謬論ならんか。

『八紘』（第七号、明治28・11）の「シヨッペンハワー氏意志発頭（あらわれ）論」に、ヘーゲルの名がみられる。ハルトマンは、――

ヘーゲル哲学の薫習を受けたるに相違なけれど、主としてシヨッペンハワーの心裏（心のうち）に漠然として存在したる思想を二層明白にしたるに過ぎざるなり。

『教育時論』（第三九三号、第三九四号、明治29・3）に、「国家と教育との関係（一）（二）」という社説があり、そこにヘーゲルのことが出てくる。

ヘーゲルは、プラトンの説の如く、国家の目的は、道義（道德の筋みち）なり、道義規則（道德律）の実現なりとし、曰はく、「国家は客観的道義なり」と。（第三九三号）

……
国家が国人（国民）の教育に対して権理（権利）あり、又義務ある所以なり。プラトン、アリストテレス、及びヘーゲルが、所謂各個人は国家の爲めに教育せらるべく、而して其の教育の主義（一定の方針）は道徳ならざるべからずとは則ち是れなり。（第三九四号）

『六合雜誌』（第一八四号、明治29・4）の「経験論者と『カント』との関係」（中島徳蔵）に、ヘーゲルが出てくる。

「ヘーゲル」の極端論は勢又其の反動なからざるを得ざりしなり……

『太陽』（第九号、明治29・5）の「文学者の勢力」に、ヘーゲルの名が引いてある。論者によると、形而上学の研究や発達のようすを考えると、思想や学説がいかにつぎつぎに感化をあたえているかがわかるという。プラトンからベーコン、ロック、カントをへて、――

シエーリング、ヘーゲル等を経て、下はサア、ウイリアム。ハミルトンに至り……

『六合雜誌』（第一八五号、明治29・5）の「コントの所謂人類教」（高柳松一郎）に、ヘーゲルの没後、その哲学がちりじりばらになったことを記している。新たに「批評哲学」の立脚地をみつけ、ヨーロッパ哲学の傾向を一変させたのはカントだという。

カントよりヘーゲルに至り、ヘーゲル死後の哲学は、復も四分五裂の有様となり、大度傾倒（大きないえがかたむいて倒れる）の後、木石金鉄粉錯（入りみだれてまじる）せるの状（すがた）に異ならざりき、……

『八紘』（第一三号、明治29・5）に「実験哲学の元祖コント——宗教の将来」がのったが、社会学の四大冊（『実証政治大系』一八五一―五四）を執筆したオーギュスト・コント（一七九八―一八五七、フランスの哲学者・数学者・社会学の創始者）にくらべると、ヘーゲルも分量において、かたなしという。

著作等身を以て名高き独逸哲学者ヘーゲルも、或は為に後へに瞠若たらん歟（あきれて見つめる）

『めさまし草』は、森鷗外が中心となって明治二十九年（一八九六）一月から同三十五年（一九〇二）二月まで、『文学評論』志からみ草紙』の後身として発刊された文芸雑誌である。『めさまし草』（まきの五、明治29・5）の『鵲翻搔』——自然主義と『ロマンチック』と——に、ヘーゲルのことが出てくる。

明治評論の時分（文化）記者はヘーゲルを引きてはいく。美術は三変せり。曰「象徴時代」、曰「クラシック」時代、曰「ロマンチック」時代是なり。（中略）ヘーゲルの三時代をば、われ姑く承認せむ。

『太陽』（第一六号、明治29・7）の「文学——理想主義の歴史家」に、ヘーゲルのことが出ている。論者によると、われわれはあえてヘーゲルとその垂流（その流派をつぐ人）の歴史の純理哲学的説明をよいとみとめるものでないという。

独乙にありてはヘーゲルの偉大なる勢力は今尚熄まず（おとろえない）

という。一部のすぐれた学者は、この大思想家の遺型にできるだけ改善刷新をほどこし、ますます理想主義の歴史的研究をひろめる傾向があるという。

『八紘』（第一五号、明治29・7）の「清野勉氏訳述 韓図純理批判解説を読む」に、ヘーゲルのことが出てくる。論者によると、従来大家の著書は、評判だけが高いいだけで、じっさいこれをよむ者はわりあい少ないという。ヘーゲルの哲学書はまさにこれだという。

ベーコンの大著は拉甸語にて書けり、ヘーゲルの大著二十卷に達せり

という。

『太陽』（第一八号、明治29・8）の「文学 第六——進化学の哲学に及せる影響」に、ヘーゲルのことが出てくる。論者によると、偉大な哲学者といえども、人類と動物の比較に意をもちいず、研究材料をもっぱら文明人だけから得ている。だから卓見ある碩学といえども、こんなにちからみると誤りを犯している。

ホッブス、スピノザ、ライブニッツ、ヘーゲル等其他の諸大家に至りても多少此の如き迷見を免れざりき……

西田幾太郎（一八七〇—一九四五、明治から昭和期の哲学者、京大教授）は、『教育時論』（第四一二号、明治29・9）に、小論「希臘倫理学（秋）」をのせ、プラトンやアリストテレスの哲学について論じた。「アリストートル」（アリストテレス）の箇条のなかに、ヘーゲルの名が出てくる。

ヘーゲルハ、氏（アリストテレス）ヲ 宇宙ノ各方面ニ注目スル思弁的觀察者ト云ヘリ。

世間には原書によらず、訳書によって外国の文物を研究する者がいるが、西田幾太郎は原文主義者であった。ドイツの哲学者の文章を味いたければ、まず原典をよめ、といっている。『教育時論』（第四一六号、明治29・11）の「時事寓感」——『翻訳の困難』にそのことが出ている。



西田幾多郎

ベンタム、ミル、カント、ヘーゲルなどの哲学者が、ものせる書の真味を咀嚼せんと思はば、又其の原著に就きて、読み明らめさるべからず。

『六合雑誌』（第一九〇号、明治29・10）の「雑録——露国現今の哲学界（其一）」（こ、ま、）において、論者はロシアに入ってきた西欧諸国からの哲学の潮流についてのべているが、まず移入されたのはフランスのボルテール、ついでドイツのカント、フィヒテ、セイリ

ング、ヘーゲルだという。後者については、――

ヘーゲルの哲学は如何なる原因ありてか 頗る勢力を得、その影響今に滅却（消えはろびる）せざるもので如し。

『八紘』（第一六号、明治29・10）の「余材片々――哲学教授法と哲学教科書」に、ヘーゲルが出てくる。論者によると、みな歴史があるという。哲学にもまた歴史があるといい、哲学の歴史を研究することは、哲学そのものを講究することだという。学校で哲学をまなぶ学生は、古代の哲学史に精根を尽くし、中世にいたるまゝに卒業し、学んだことといえば哲学者の奇談逸話だけという。このような事情は、欧米や日本でもおなじだろうという。

哲学の普及というが、これは怪しい、という。フランスの哲学書の中には、形而上学をすてて問題にしないものがあるが、さすがにドイツは哲学の国だけあって、純粹の哲学を哲学として記述したものが多いという。

例へばヘーゲルがEnzyklopaedia云々と其好著に名を命ぜし如く 所謂エンツ井クロペーデーの類 該国（ドイツ）には多からんとす、……

片山潜（一八五九―一九三三、明治から昭和期にかけての社会運動家、国際共産主義運動家。のちモスクワで死去）は、『六合雜誌』（第一九二号、明治29・10）に、「独逸社会共和党の創立者フェルチナンド、ラサル（其一）」を寄稿した。片山によると、ドイツの社会主義は、ラサル（一八二五―六四、ドイツの労働運動・社会主義運動の指導者）の創見によるといっても過言ではないという。ヘーゲルの一派は、社会主義をもつてその哲学的信条のひとつとなしたという。またヘーゲルについては、つぎのように記している。

ラサルはヘーゲル哲学に心酔して ヘーゲル其人はヘラクライトス（前六―五世紀、ギリシャの哲学者）の哲学より得たる者多しとして 遂に自らヘラクライトスの哲学を研究し初め、それがために巴里に遊び 当時の大詩人ハインリヒ、ハイ子を訪ひ 一見して親友となれり。

『六合雜誌』（第一九三号、明治30・1）の「宗教とは何ぞや」（横井時雄）に、ヘーゲルの宗教観のことが出てくる。

ヘーゲルは左の如く宗教を説明せり

宗教は有限の霊が（人心を指す）そのエッセンス 其本質は こすなわ 是れ即ち絶対の霊なりと云ふことを認識することはなり

蟹江義丸（かにえよしまる）（一八七二～一九〇四、明治期の哲学者。新宗大学講師をへて東京高師教授）は、富山県のひとである。『帝国文学』（第三巻・第一号、

明治30・1）の「カリエールが美学の立脚地」において、ヘーゲルにふれている。カントの唯心論は、フィヒテ、シェリングへと伝わり、やがて「ヘーゲルの絶対的唯心論」となったという。また近世における美学者はあまたおれど、「尤も卓絶せるものを挙げれば、ヘーゲル（その他）是なり」という。

『太陽』（明治30・4）の「文学——独逸哲学」に、ヘーゲルの名がみられる。論者によると、ドイツ思想は、その説くところは幽玄奥妙（ゆうげんおうみょう）奥深くすくれている）であるが、神秘と混乱とあいまいさに満ち、学んでみても益がないという。

『帝国文学』（第三巻・第七号、明治30・4）の「希臘文学と哲学思潮」に、ヘーゲルの名が言及されている。いわく「ヘーゲルは美は現象を以て生命とすと云へり」と。



蟹江義丸

文科大學哲学教師ドクトル フォン、コエーベル講 『哲学要領 全』（南江堂書店、明治30・6）は、ラ
文学士 下田次郎訳

ファエル・ケーベル（一八四八～一九二三、ロシアの哲学者）が、明治二十六年（一八九三）の秋から冬にかけて東大において講じた「哲学入門」（哲学概論、哲学史）の前半部分を、その原稿（原文は英語）から翻訳したものである（「序言」）。ケーベルの講義は、哲学をはじめてまなぶ者のためにおこなわれたものである。本書は、一 哲学の概念 二 哲学の分類 三 哲学の方法 四 哲学の系統などから成っている。後者の第四講において、ヘーゲルの弁証法・正論・反論・アウフゲヘーベンス（ヘーゲル）モメント（ヘーゲルの命名）・ロゴスの道・弁証法の発明者などが数ページにわたって論じられている。

ケーベルによると、ヘーゲルをよむことはドイツ人にとってもひじょうにむずかしいという。ヘーゲルが論証において用いることばや形は、あらゆる哲学者のなかでも最もむずかしく、あいまいだという。

ヘーゲルの総ての哲学的教理を教へ及び叙説する方法は 有名なる弁証的方法なり、この語は誤解されたり、又屢々誤解さるゝなり。

しかし、ヘーゲルの教義やその弁証法の意義を理解することはむずかしいことでないという。

『新撰百種』哲学問答 全編第一 (普及舎、明治30・7) は、一種の哲学入門書である。同書は問答形式をとっている。目次には、つぎのようにある。第

一章 哲学の定義 区別 及 範圍 第二章 哲学の諸部門の解説 第三章 哲学の起源及必要 第四章 哲学の学派 第五章 古代の哲学 第

六章 ソクラテス プラトーン アリストートル 第七章 近代の哲学 第八章 カント并にカント後の哲学 第九章 ヘーゲル并にその他の哲学

第十章 結論

問 ヘーゲルの哲学は 如何なるものなりしか、

答 ヘーゲルは千七百七十年に生れ、千八百三十一年に死す、絶対的唯心主義 (世界の本体・現象の本質は、精神にあるという説——引用者) の哲学を唱へたりし人なり

(中略)

問 ヘーゲルに反したる哲学ありしや、

答 ショッペンハワーの哲学は、即ちこれなり、

(九七—一〇〇頁)

『女学雑誌』(第四五〇号、明治30・9) にみられる一箇条に、「天才に就いて」と題する小文がある。天才と身長、天才の出自について論じたものであるが、このなかにスピノザやヘーゲルの名が出てくる。この両人の生まれは——下等の上級という。(二二頁)

ドイツにおいては、フリードリヒ二世（大王、一七二二～八六）のおわりの時期に、文事のいきおいが盛んとなった。哲学者もたくさん出たが、その中にはヘーゲルも含まれる。「膨張的日本経国論「其二」」（蔵原惟郭）（『教育時論』（第四三〇号、明治30・9）に、つぎのようにある。

大王の晩年に至りては文雅（文芸）燦然として（キラキラと）輝き 哲学者にはライプニッツ、ウォルフ、レッシング、カント、フィヒテ、セリング、ヘーゲル、シライエルマーヘル等の偉大高遠なる百世の師表（のちのちの世まで、人の師となる人）を輩出し、……

『新著月刊』（第一巻・第八号、明治30・11）の「浮世鏡」に、こっけいな、哲学教師の人生の笑的場面が描かれている。

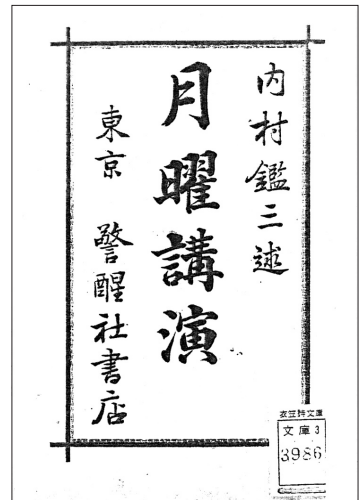
カント、ヘーゲル丸呑の大学者が、教場に出て「ノート、ブック」忘れて来た時の顔の青さ……

この一文は、よく理解しないで、その哲学を生そのままとり入れ、売りものになっているペテン学者を皮肉ったものである。

鈴木大拙（一八七〇～一九六六、明治から昭和期の宗教家）は、『日本人』（第五八号、明治31・1）に、「独逸哲学を論じて禅学に及ぶ」を発表したが、このなかでヘーゲルの因果説には仏教の説との近似性がみとめられるという。

ヘーゲルは仏説に似たるものを唱へ候、例せば彼の因果説（因果律——自然界である現象が発生するには、かならずその原因があるという法則）に「因（物事のおこり）は果（因縁によって生じるもの）の果なり、果は因の因なり」と曰ひて森羅万象の連環の如きを説明致候

『太陽』（第四巻・第四号、明治31・2）の「時事論評——所謂宗教教育問題」において、論者は幼稚蒙昧の思想をもって宗教を論じるものがあることを指摘し、――



内村鑑三『月曜講演』
(警醒社書店、明治31・3)。
[早稲田大学中央図書館蔵]

いという。

スピノザの物質　ヘーゲルの理体（万有の本体、実体）

シヨッペンハウエルの意志、ハルトマンの無意識……

これらはみな唯一神を立てた者という。

内村鑑三（一八六一—一九三〇、明治・大正期のキリスト教の指導者）の『月曜講演』（警醒社、明治31・3）は、著者が月曜日の夕方——「キリスト教青年会館」（神田美土代町）で、五回にわたっておこなった講演をまとめた一書としたものである。同書は第一章から四章までであるが、「第二章　ダンテとゲーテ」に、ヘーゲルのことが出てくる。

哲学の要は観察に在り。ヘーゲルの哲学の如き、之によりて人生の真相を窺ふ事を得るが故に、貴きに非ずや。ダンテとゲーテまた然り。（五七頁）

『帝国文学』（第四卷・第五号、明治31・5）の「シエリングが文学美術に対する見地」（真岡湛海）は、詩人的哲学者の審美観を略述したものだが、論者によると、さいきんの美学の歴史的継承をたずねるものは、きまって筆をカントに起し、シルレルをへて、——

古代の世界観取るに足らずとて、宗教と神話を混同し　ヘーゲル以前の論点を反復するあり、

という。

『帝国文学』（第四卷・第二号、明治31・2）の「論説——湖上詩人を憶ふ」（藤井健治郎）に、ヘーゲルの名がみられる。論者は万有神論（万有ことごとく神、もしくは神の化現）にふれ、神の性格に関しては、哲学者のあいだでも意見が一致していな

シエリング、ヘーゲルに及ぼすを常とす、

という。

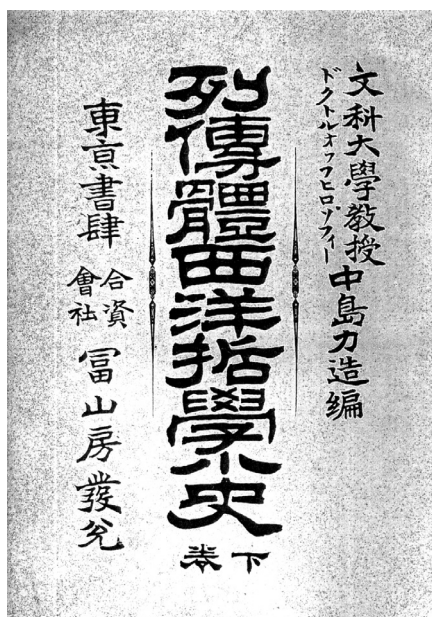
三宅雄二郎によると、『哲学者』の名称で呼ばれる人は、ギリシャの時代からこんにちまで絶えず西洋に存在したが、東洋における道教者・仏教者・儒学者も哲学者の部類に入れられる、という。同人の「哲学者とは何ぞや」（『日本人』第六六号、明治31・5）に、ヘーゲルのことが出てくる。

彼（ヘーゲル）は法律美術等 社会の問題に関して断案（前提からひきだした結論）を下し、世人の疑問に答へ、之に安心を与へしが為、哲学の原理は大に攻撃せられ、殆んど粉砕したる観ありと雖も……

中島力造著『列伝西洋哲学小史 下』（富山房、明治31・6）は、六六六頁もある大著である。同書の「第五編 独逸哲学者」の章節において、ヘーゲルとその学説のことが論じられている。まず伝記と著述リストがつづられ（四七九～四八六頁）、そのあと学説——論理学の概要（性質、分量、定量） 本質論（本体、原因など） 天然哲学（無機界、化学界など）が説かれている。

ヘーゲルの哲学系統は、絶対的唯心論であり、ヘーゲルの死後、その哲学は三学派にわかれた。

『帝国文学』（第四卷・第九号、明治31・9）の「^{カント}韓図の美学（承前）」（蟹江義丸）に、ヘーゲルのことが出てくる。



中島力造編『列伝西洋哲学小史 下巻』
（富山房、明治31・6）

ヘーゲル以下の具体的観念論は 韓図が此等の論より胚胎せる所多し。

『太陽』（第四巻・第一八号、明治31・9）の「海外彙報―風景と文学」は、近刊の『スペクテートル』（ティタス）誌に掲載された記事を紹介したものである。論者によると、風景や自然界が知的生産物に影響をあたえることは真理だという。

ヘーゲルが言ひけん如く、或種の景色は却て著作上に障礙を与ふること又疑ふべからず。

渡辺国武（一八四六―一九一九、明治期の官僚・政治家。租税寮六等出仕から、高知県県令、大蔵次官をへて伊藤内閣の蔵相となる）の『禅機ト哲学』（鴻盟社、明治31・12）は、講演筆記を本にしたものである。「禅機」とは、禅の修行によってえた無我の境地から出る心のはたらきの意である。この小冊子（二―四二頁）に、ヘーゲルの名がみられる。

「（セルリング）ヲ压倒シテ起リ 思想的盜賊ノ名アル夫ノ「ヘーゲル」ノ哲学ハ 「フィヒテ」「セルリング」ノミ断論法ヲ完成シ 哲学上実ニ一大系統ヲ為シタリト云……（二六頁）

松本文三郎講述『最近哲学史』（哲学館講義録 合綴第五号、明治31・？）の「第二章 復古的学派」に、ヘーゲル哲学（ヘーゲル学派）に関する小文がみられる。著者によると、「最近哲学史」というのは、ヘーゲル没後の哲学を指すという。現世紀の前半において、ヘーゲル哲学は、じつに旭日（朝日）の勢いがあり、一世を風びしたという。

ヘーゲル学派は往時の力はないにしても、――
之を維持せんとするも至りては 豈にまた乏しとなさんや……

「審美新説」(『めざまし草』(まきの三十五、明治32・2)において、執筆者(鷗外?)はヘーゲル一派の芸術論を説いて、つぎのようにいっている。

例之^{たとえ}ば Schelling, Hegel^{シエリング ヘーゲル}の派の如きは、芸術を以て絶対、理想、神聖を描出するものとなす。(八頁)

井上田了の『通俗講談 哲学早わかり』(開発社、明治32・2)は、談話筆記である。著者が哲学館拡張のため、府県を巡回し、一夕^{いっせき}の茶話^{ちやばなし}(一夜のたわいない話)を口述したものを一書に編んだものである。いふなれば本書は、一般むけの哲学入門書である。

井上は大陸哲学について語っているが、カントは道徳に、フィヒテは人權に、シエリングは美術に、ヘーゲルは論理学にそれぞれ大きな影響があったという。なお、同書の附録に「西洋哲学者年表」が付いているが、そこにみられるヘーゲルの略伝は、『哲学要領^{編前}』(哲学書院、明治19・9)に収められている「哲学者年表」にあるものと同じである。

津田真道の「唯心論の十三」(『東京学士会院雑誌』第二一卷・編之三、明治32・3)は、講演筆記である。このなかにカントとヘーゲルが出てくるが、両者はいまヨーロッパでいちばん有名である、という。

今^{いま}欧州^{おおい}に於て、有名なる哲学者、カント、ヘーゲル等の諸大家、専之^{もっぱらこれ}を唱導し、現に欧米兩州の学者大抵^{たいてい}、之^{これ}を信じ、或は之^{あるいはこれ}に付和雷同^{ふわらいうどう}す(じぶん^いにしっかりと考えた考えなく、他人の意見に同調する)、実に不可思議^{ふかしぎ}千万なる次第^{しだい}なり。

「児童研究史に於けるフレーベルの位置(上)」(『教育時論』(第五〇四号、明治32・4)は、ドイツの教育家フレーベル(一七八二―一八五二)にあたえた哲学者の影響について述べたものであるが、この小記事のなかにヘーゲルの名が何度か出てくる。

フレーベルはカント、フィヒテ、及びシエリングの哲学思想によりて影響を受けたるの痕跡あるは、その著述の上にはあらはれたるところによりて推知

し得べきのみならず 殊にその名著「人間の教育」の根本原理に就きて攻究すれば ヘーゲルの思想によりて感化せられたるの形跡あるは瞭々として
(あきらかの意―引用者) 明らかなるところにして何人も否定し 能はざるところならむ。

森林太郎
大村西崖

編述『審美綱領 上巻』(春陽堂、明治32・6)は、エードゥアルト・フォン・ハルトマン(一八四二―一九〇六、ドイツの哲学者)が著わした『美の哲学 *Philosophie des Schoenen* の大綱(大要)』を編述したものという(凡例)。同書の「一 美の現象 D 美の現象の異称」に、ヘーゲルのことが出てくる。すなわち――、

ヘーゲル Hegel 以来、仮象 *Seeming* (Schein) といふ語を用いるはこの義なり。

「独逸大学制度 (二)」(『世界之日本』第四卷・第二四号、明治32・7)に、教師として影響力のあった哲学者としてヘーゲルの名がみられる。

彼のフ井ヒテ、シエリング、ヘーゲル、シユライエルマツヘル、等か、其当時到大影響を与へたりしは、特に専門学教員たれ^{不明}なり、著者としては、之等の人々の勢力は余り大なるにあらず、その著書の大半は、其死後講義の草稿、又は学生等の記し置きたる講義筆記等より採集して出版せられたるものなり。

『めさまし草』(まきの三十九、明治32・9)の「審美新説」において、評者(おそらく森鷗外か)は、いまこれより審美学(美学)の現況について論じたいとのべたのち、ヘーゲルにふれている。

審美学は今に至るまで Schelling 及 Hegel の足跡を踏めり、此に従事するものは美の理想を形而上学の深处より探り出さんと欲し、……

高山林次郎編述『近世美学』(帝国百科全书・第三四編、博文館、明治32・9)は、よく売れた本である。明治四十五年七月の時点で、十版を



高山林次郎編述『近世美学』（博文館、明治32・9）。〔早稲田大学中央図書館蔵〕

かさねた。この小著（全一〇一頁）は、こんにちの美学になんら新知識をあたえるものでないという。本書を著わす目的は、現今の美学がどのような状態にあるかを明らかにするにあった。本書ちゅうに叙述した学説は、ヨーロッパの諸学者のものを参酌したという。

本書は大きくわけて、「上編 美学史一斑」と「下編 近世美学」から成る。「上編 美学史一斑」の「第二章 美学史の概見」に、「ヘーゲル氏が絶対観念論の美学」と題する章節がある（九一―一〇一頁）。

ヘーゲル氏 Hegel, 1770-1831は、独逸の哲学者中、美学に就いて最も精透なる研究を遂げたる一人なり。氏の説によれば、美は理想が感覚に續りて現はれる者なり。

哲学者・井上哲次郎は、号を『異軒』といった。同人の講演筆記を編んで一書としたものが、『異軒論文初集 全』（富山房、明治32・12）である。同書の「第二 日本民族思潮の傾向（一）序論」に、ヘーゲルの名がみられる。

ドイツにおいてはじめて哲学を唱道したのはライプニッツ（二六四六―一七一六、ドイツの哲学者、数学者・政治家）であるといい、ついでクリスティアン・ヴォルフ（一六七九―一七五四、ハル大学教授）、イマニエル・カント（一七二四―一八〇四、ケーニヒスベルク大学教授）が起って、一種のあたらしい哲学を建設した。カント以後のドイツ哲学は、直接もしくは間接にその影響をうけて発展し、同一の性質をもっているという。

すなわち
即ちフィヒテ セリング ヘーゲル ショッペンハウエル ハルトマン諸
氏の如き、其立脚地は種々異同（ちがった点）あれども、其思想的 形而上
的なるの一点に於ては 皆一なり、……（二九頁）

江藤桂華著『美学大要』（新声社、明治33・2）は、美の概念について諸家の説を参考にし、じぶんの意見をも加え、やさしく審美学について説いた

ものである「序」。本書はいわば、一般むきの美学入門書といえる。

本書は、——第一 美学の定義 第二 美の分類 第三 自然美 第四 人間美 第五 芸術美——から成っている。

著者によると、美学 (Aesthetics) とは、すなわち美を研究する学問だという。しかし、その研究方法は哲学的であり、科学的でないことを注意せねばならぬという。同書にはヘーゲルの美学について論じた箇所がみられ、それにはつぎのようにある。

ヘーゲルは又独逸は哲学者中の一巨頭也。其美を論ずる又注目値すべきものあり、即ち美とは世界進程の大理想が感覚に依りて、具象的に発現せるもの。(現れでる)に外ならず。之を其抽象的発現にして、知性の所縁(ゆかり)により、了会せらるゝもの即真と対照して、説明を与へ、且つ其理想を重んぜし結果、物質界に埋没せられたる自然と劣等視し、自然美を下位に貶黜(へんちゅつ——下げる意)せりき、随て(したがって)芸術美に就きては自然の醇化(純粋なものにする)を須要(しゅよう——もっとも大事なこと)の原則となしたり。(八〇九頁)

森林太郎著『審美新説』(春陽堂、明治33・2)は、ヨハネス・フォルケルト(一八四八―一九三〇、ドイツの哲学者・美学者。のちライプチヒ大学教授)が著わした『審美上時事問題 Aesthetische Zeitfragen』の梗概をのべたものという(「凡例」)。本書のさいこの章節「審美学の現況」に、ヘーゲルのことが出てくる。

審美学は今に至るまで Schelling 及 Hegel の足跡を踏めり……

高山林次郎の「美学上の理想説に就いて」(『哲学会講演』、『哲学雑誌』第一五卷・第一五七号、明治33・3)に、ヘーゲルのことが出てくる。

所詮はヘーゲル氏が其の歴史論即ちヒストリズムの上に、具象理想説の根柢を立てるまでは、独逸に於ける美学上の理想説は、抽象派であったと見て、も差支無からやうに思はれる。

『教育時論』（第五四〇号、明治33・4）の「内外雜纂——問答」に、ヘーゲルの進化説が出てくる。

問 運命に付 哲学諸家の説承りたし

答（前略）宇宙の本体を指して 日々進漸して止まざる活理なりとし、其活理は無機（生活機能のないもの）、有機の天然界を経過して、終に人間に達し 自覺的に進化するものなりとするものをヘーゲルの進化説と云ふ、……

高山林次郎（一八七一—一九〇二）、^{「樗牛」}はベンネーム。明治期の評論家、ニーチェの哲学思想を讚美）は、『太陽』（第六卷・第四号、明治33・4）の「時事評論——文芸界」に、「外山博士を憶ふ」を発表した。この小論は、戸山正一（一八四八—一九〇〇、明治期の教育家、のち東大総長）の所説を批判したものである。評者の高山はのべている。戸山先生は、歴史そのものに美をみとめようとはあえてしない。しかし、芸術における史蹟の威厳をとなえておられるが、これは矛盾しないか。

ヘーゲルの哲学なくして ヘーゲルの美学を奉し給へるに非ずや。予は先生が説の破綻、或は是の点に本けるあらんを恐る也。

『太陽』（第六卷・第八号、明治33・6）の「第四部 學術史」は、自然科学・哲学・政治学・法律学について論じている。論者によると、十九世紀の学界においていちじるしい進歩をとげたものは、自然科学であるという。その影響は、すぐ精神科学——心理学や哲学におよんだ。

ドイツの学者は概して、哲学的倫理学の古いとりでを固守し、さいきんでは経験学派の本国イギリスにおいて、グリーン一派が——、カント、ヘーゲルの所説に依傍して（たよって）観念論的倫理学を主張せるは 大に吾人の注意すべき現象なり。

しかし、ヘーゲルが亡くなってから、ドイツの観念論は、ついに瓦解し、むかしの盛運をみることができないという。

『哲学雑誌』（第一卷・第一六三号、明治33・9）の「雜録 応問」に、ヘーゲルのことが出てくる。

ヘーゲルの自然哲学の如き 是の矛盾に陥りたる者、フオイエルバッハの非理性主義がヘーゲルより発生したる 決して偶然に非なるなり。

『教育時論』（第五五九号、明治33・10）の「内外雜纂——問答」に、ふたたびヘーゲルの名がみられる。

スピノザの無限実体 | ヘーゲルの絶対、| スペンセルの不可知的勢力等は 皆この実物を指して命名したるものなり、と吾人（われわれ）は信ずるなり、

……

『哲学叢書』（第一巻・第一集、集文閣、明治33・10）の巻頭に、「哲学定義」がかかげられており、そこにアリストテレス、カント、ヘーゲルのものが提示されている。ヘーゲルの定義は——

哲学は先づ一般に対象に関する思惟的考察と確定するを得べし、
ヘーゲル

哲学は絶対（宇宙の究極原理——引用者）を研究する組織的の学なり、
同上

哲学は概念的思想としての思惟的発達なり、
同上

同誌の編者・井上哲次郎によると、維新以来三十数年たち、これまで制度や文物、社会的事相などが改造されたが、精神界の革新はおくれたという。哲学の専門雑誌としては、『哲学雑誌』があるが、それに大論文をのせることができない。ゆえに「哲学叢書」を発行し、そこに大論文を掲載し、本邦における哲学の進歩と後進の教育に従事したい、といった主旨が「緒言」にある。

『哲学叢書』（第一巻・第二集、明治33・11）の「ロッチェ氏の哲学」に、ヘーゲルのことが出てくる。論者によると、ヘーゲルの哲学分派したのち、ドイツにおいて独立なる哲学の新系統を建てようとした者があり、ロツツェやハルトマンらがその代表格であった。とくに——、

ロッチエ氏の時に当り 自然科学の發達著しく、其哲学に及べる影響は頗る大にして、思想界を震撼したるヘーゲル哲学 漸く其勢力を失ひ 唯物論勃興せり……

中島力造著『現今の哲学問題 全』（普及社、明治33・11）は、これから哲学の研究をはじめる初学者、哲学の現状を知ろうとする人びとのために、平易に著わした『哲学入門書』である。同書の「第七回 認識の本質に関する問題」に、ヘーゲルへの言及がみられる。

ヘーゲルの絶対說的觀念が万有（万物）の根源であると説くのである、故に万有は絶対的觀念の顯現（あらわれ）である、……

『教育時論』（第五六四号、明治33・12）の「海外雜纂——問答」の問に、西洋人の「神」とはどんなものをいうのか。科学および哲学とはなにか、というのがある。

前者の問にたいして、——

絶対的唯心論者ヘーゲルの説に云く、神とは自覺的道理なり、此自覺的道理は、一方においては吾人の理性となり、他方においては万物の本質となる、……

また後者の問——とくに哲学の定義としては、

フィヒテは哲学を以て 智識の学なりと云ひ、ヘーゲルは理念（理性の判断によって得られる最高の考え）の学となりと云ひ、……

三宅雪嶺述『近世哲学史』（哲学館第十二学年度 高等教育学科講義録、明治33・？）に、ヘーゲルの章節（一一一―一五五頁）がある。このなかでヘーゲル小伝、論理学の三断法、理法学（存在、本素、総念）などが論じられている。

ヘーゲル其哲学を構成するや 先づ純全孤独の原理を求めて 乃ち思想といへる一大旨義（かんがえ）を工夫し来り 宇宙万象を挙げて皆此中に包含せしめ……（一五二頁）

『教育時論』（第五六六号、明治34・1）の「学説政務——カントの教育説（上）」に、カントの名が出てくる。カントの教育思想を研究するばあい、カント哲学の門をくぐらねばならぬし、カント以後のつぎの哲学者についても学ばねばならぬとしている。

例へばフイヒテ、セルリング、ヘーゲル、シヨツウペンハウエル、乃至シライエルマツヘル……

『太陽』（第七巻・第五号、明治34・5）の「宗教時報——ニーチェの宗教論」に、ヘーゲルの名がみられる。論者によると、二十世紀の初頭において、日本の文壇をにぎわしたのはドイツの一畸人ニーチェ（一八四四―一九〇〇、ドイツの哲学者、シヨールペンハウアーの意志哲学の影響をうけ、のちワイマールにおいて狂気のなかで亡くなった）の評論だという。かれは徹頭徹尾時代精神に反抗した。

かれの眼中、ヘーゲルなく、基督なく、神なく人なく、傍若無人独り壮大の言を弄し 殆んど壮大狂に類せんとせり……

戸張信一郎（一八七三―一九五五、ペンネームは「竹風」。明治から昭和期にかけてのドイツ文学者。ニーチェを日本に紹介した）の「フリードリヒ、ニーチェを論す（承前）」（『帝国文学』第七巻・第六号、明治34・6）に、ヘーゲルのことが出てくる。

ヘーゲルの歴史哲学に 所謂「世界史は神の自現（じげん）なり」といへる語は、今日の史家をして往々事実行為の結果によりて 人を判断せしむるの幣を惹起せり。

浮田和民の『帝国主義と教育』（民友社、明治34・8）は、『国民新聞』に発表した記事をまとめて一書としたようである。本書は、「日本の帝国主義」と「帝国主義の教育」の二篇から成るのだが、これを総称して『帝国主義と教育』とした。

「帝国主義の教育」の「五 公共的と自由」において、著者は、ヘーゲルの国家観の一端を引きながら、国家にたいする服従や、社会福祉にたいする一致団結のあり方について疑問を提起している。

著者によると、良心の声が命ずる服従、道理にあわぬ団結でないかぎり、それはまことの服従や団結ではないという。しかも、“良心”や“道理”は、自由なる精神のなかに在るものであって、隷属状態のなかにはないという。

是れヘーゲルが国家を称して自由の実現、又は現実存に存する実成せられたる道德的生活なりと言ひたる所以ならん。吾人は固より国家の意志に服従せざる可からず。社会の福祉に一致結合せざる可からず。然れども国家の意志、及び社会の福祉は、自由討究の上に非ざれば、之を知ることを得ざるなり。良心より出でざる服従道理に基かざる一致は、真正の服従に非ず、真正の一致に非ざるなり。而して良心と云ひ 道理と云ひ、自由の精神中に存して奴隷的人民の中に発見す可からざるものなり。

吉田熊次（一八七四～一九六四、明治から昭和期の教育学者）は、『東洋哲学』（第八編・第九号、明治34・9）の「論説」に、「所謂新教育学とは何ぞや」を寄稿した。この小論のなかに、ヘーゲルが出てくる。“新教育学”とは社会的教育学の別名という。また哲学的教育学派といえ、ナトルプ（一八五四～一九二四、ドイツの哲学者・教育学者）をその代表とする、新カント学派を指すものという。

彼等は同時にヘーゲル氏の感化を受け、重に此方面よりして社会を重んずるに至りしもの、如し……

『太陽』（第八巻・第二号、明治35・1）の「無神無靈魂説の是非如何」（井上哲次郎）に、ヘーゲルの名が出てくる。論者によると、唯物論は近世にはじまったものでなく、ギリシャ時代からあるという。しかし、哲学として重要な位置をしめなかった。プラトン、スピノザ、ライプニッツ、カント、セルリング、ヘーゲルにしても、みな唯物論ではなかったという。

『太陽』（第八巻・第四号、明治35・4）の「論説——ロマンチックを論じて我邦文芸の現況に及ぶ」は、大塚保治（一八六八—一九三一、明治・大正期の美学者、東大教授）が東京専門学校でおこなった講演を掲載したものである。このなかでヘーゲルに言及した。

ヘーゲルは事物発展の順序を、正、反、合、と三に分けたが、其反は抜きにして、正から一足飛びに合に進む工夫をするのが、社会万事を所置する至当（きわめて適當）の方便である。

『東洋哲学』（第九編・第五号、明治35・5）の「プロテスタントの哲学者カント」（波多野精一）は、翻訳である。ベルリン大学の哲学教授として有名なパウルゼンの近作の論文を抄訳したものである。訳者によると、ギリシャの哲学は根本において主理的であるという。

近時に於ける是の傾向の最も著しき代表者は、ヘーゲルなり。

正岡芸陽著『英雄主義』（新声社、明治35・5）に、ヘーゲルが引かれている。著者によると、いかなる哲学者といえど、かれらがうかがい知ったところのものは、真理の一端にすぎないのである。

カント然らざらんや、ヘーゲル然らざらんや、ショーペンハウエル然らざらんや……（一四頁）

中江兆民遺稿『警世放言』（松邑三松堂、明治35・5）の「理論は邦家（日本）に必要な」に、ヘーゲルのことが出てくる。

彼れ理論を排斥する者は、日耳曼ヘーゲル理学（哲学）より脱胎し来れる露国の虚無党と旨趣（いみ）を同じくする者なり（一〇〇頁）



元良勇次郎

『東洋哲学』（第九編・第七号、明治35・7）の「論説」に、元良勇次郎（一八五八～一九二二、同志社にまなびのちボストン大学とジョンズ・ホプキンス大学で心理学、哲学をおさめる。後年、東大教授）の「哲学の変遷と新系統」（五月十八日におこなわれた「哲学館同窓会」における講演筆記）が掲載された。このなかで講演者は、たびたびヘーゲルにふれた。

ギリシャや近世における哲学者にしても、みな立脚地を『概念』にとり、概念といったメガネを通して人生や社会をみたもので、じっさい生活と遊離したものであった。

……
希臘の古賢にも、又スピノザ、ヘーゲル、カント等にてても、實際的方面を疎^{うとん}せるにあらずといへども、實際的方面に遠^{とお}かる傾向を免^{まぬ}か、能^{あた}はざりき

……
ヘーゲルはカントに次いで起り、カントの哲学の不完全なりし点を補ひて、完全なる哲学系統をたてたりと称す、……

『東洋哲学』（第九編・第八号、明治35・8）の「論説——グリーン^{グリーン}の倫理説を論評す」（中島力造）は、講演筆記である。トマス・ヒル・グリーン（一八三六～八二、イギリスの新理想主義哲学の代表者、オクスフォード大学教授）の著書は、字句といい思想といい、ひじょうに難解だという。論者によると、こんにち英米においてもっとも普及し、もっとも勢力があるのは、グリーン^{グリーン}の論理説だという。

新カント派又はヘーゲル派と称せらるゝものなり。

という。

朝永^{ともなが}三十郎編『哲学綱要』（宝文館、明治35・11）は、初学者むきに著わした哲学入門書である。哲学上の一般概念とその歴史的発展を概観し、読者をして将来、哲学史の研究にむかわせることを意図している。本書の骨格の多くは、欧米の諸家の哲学概論を参考にしたという（「序言」）。

同書の「第一編 緒論 哲学の本質及び旨趣（意味）」に、ヘーゲルのことが出てくる。あくまでも経験や経験科学をはなれ、純粹なる概念的思考の新方式によって、宇宙間にある絶対的認識の体系をつくろうとしたのは、

フィヒテ、シェリング、ヘーゲル三家の哲学

であったという（四二頁）。

朝永三十郎篇「学究漫録」は、『精神界』（第二卷一一―一二号に連載された。明治35・11―12）。このなかにヘーゲルのことが出てくる。

大そうヘーゲル流になりますが、悪或は罪に対する我々の態度も亦、上に述べた処と同様、三種の類型がある様に思はれます。

『太陽』（第九巻・第一号、明治36・1）の「評論の評論」に、ヘーゲルへの言及がみられる。ひとの作品を正しく評価すること―すなわち、真正の評論をおこなうにはどうすべきか。それにはヘーゲルのやり方にならうのがよいという。

吾人の採るべき方針は、たゞヘーゲルの方法あるのみ。即ち反対なる者より 調和に行きつ、真理に接近する路あるのみ。

『太陽』（第九巻・第三号、明治36・3）の「論説——文学者としての高山君」（（林次郎））（桑木厳翼の追悼演説）に、ヘーゲル派の言及がある。

パウルゼン、グリーンンの立場から道徳論を草し、ヘーゲル派の美学を基準として裸体画を論ずるなどは 皆此思想を示して居ます。

『独立評論』（第三号、明治36・3）の「論説——目的と手段（（再びミューアヘッド））」（（氏倫理学書に就て））（桑木厳翼）に、ヘーゲルの弁証法についての言及がある。

ヘーゲルの弁証法は、単に概念の演繹を説きて経験を蔑視せる点に於て、後の学者の軽ずる所となれりと雖も、若し之に加ふるに適當なる經驗的補助を似てみれば、紛糾乱雑せる諸事実を統一するに於て、欠くべからざるの方法となすべし。

高橋五郎著『最新 一元哲学』（前川文栄閣、明治36・9）の「第七章 一元哲学の現在未来——ヘーゲルとシュopenハウエルの関係」に、御用哲学者ヘーゲルのことが出てくる。

按ずるに（おもうに）ヘーゲルの所謂普遍的、神觀念若くは普遍的、大道理なる者は、万象（宇宙に存在するすべてのもの）の根本としてや、正に是れ一元的觀念を表はせる者なり、故にヘーゲルの哲学は善く申せば一元論（ただひとつの原理で、宇宙のすべての問題を説明しようとする考え方）にして、悪く言へば凡神論なり、而して僅かに一步を誤れば無神論に陥いらんとす。

『東洋哲学』（第一〇編・第二号、明治36・12）の「彙報 時評——独断主義」に、ヘーゲルの名が何度か出てくる。論者によると、知識とは経験の統一せられたるものという。また一個人の知識体系は、そのひとの人格より自然に生じるものという。

スピノウザーの哲学は、スピノウザーの人格を離れて何等の意義なく、ライプニッツの哲学は、ライプニッツを去りて何等の根底にあらず、カント然り（カントもそうである）、ヘーゲル然り、吾人に於けるも亦然り。

大西 祝（一八六四—一九〇〇、明治後期の哲学者。東京専門学校「早大」や東京高師で教鞭をとったり、『六号雑誌』の編纂にたずさわった）の遺稿をあつめて編纂したものは、『大西博士全集』である。『西洋哲学史』（上下）は、大西の口述を筆写した門下生のノートに、さらに大西が加筆したものである。『西洋哲学史（下巻）』（警醒社書店、明治37・1）の第四十九章は、カント以後の哲学であるが、そこにヘーゲルの簡条がある（六二七—六三二頁）。



大西 祝

〔三〕フィヒテの哲学は主観を以て始めたり、故に哲学史家或は彼れの哲学を称して主観の主心論といふ。シェリングは客観を以て其の哲学を始めたり、故に哲学史家或は之れを客観的主心論といふ。而してヘーゲルはフィヒテとシェリングとを合し、主観及び客観をしてしかあらしむる所以の絶対的理想を以て出立せり。故に史家（殊に彼れの学派に属する史家）之れを絶対的主心論と名づく。

.....

フィヒテ、シェリング、ヘーゲルの三人相繼いで代表したる哲学思想は 是れカント以後の独逸哲学界に於ける中央の流れとも云ふべきものなり。

ど見解があるという。倫理（道德の判断、善悪の区別）の基礎は哲学にあるといい、倫理は哲学的根拠から演繹したものでなければならぬ、という。

スピノーザ、ヘーゲル、シュopenハウエル、グリーンみな其れ

である。

『時代思潮』（第三号、明治37・4）の「時評——文明の趨勢を論じて新時代の芸術に及ぶ（中）」（□牛生^{不明}）に、ヘーゲルの名が散見する。

ヘーゲル自（みずから）も驚嘆したるが如く、理性の哲学はかれによりて完美せられたり。

上杉慎吉（一八七八—一九二九、明治・大正期の憲法学者。東大教授、天皇制絶対主義勢力の理論的・実践的指導者）は、『法学協会雑誌』（第



穂積陳重

二三巻・第七号、明治37・7)の「雑録」に、「国家学史上に於けるヘーゲルの地位」(九九九〜一〇一五頁)を投稿した。穂積陳重教授が「法理学演習会」に提出した十二の課題のなかに、「ヘーゲルの法律哲学の基礎及び評論」というのがあり、それに触発されて、本稿を執筆しようとした。論者は折から国家学の学説の歴史を研究ちゅうであつたからである。

論者によると、国家学説発展の門戸をひらいたヘーゲルの地位は、国家学史上ひじょうに重要だという。そして――

ヘーゲルは国家を有機体とし 人格とし 主権の本体とせると云ふことだけを叙せるのみ 其の説の全体を述ふるは暫く要なし……

と結論をくだした。

『法学協会雑誌』(第二二巻・第九号、明治37・9)の「雑録」に、「ヘーゲルの法律哲学の基礎」(三月、法理学演習報告)〔吉野作造〕が掲載された。論者は本稿を三章にわかし、――ヘーゲルの哲学の基礎観念――その哲学体系における法律哲学の地位――および法律哲学の基礎を論じようとしたという。いったん研究に手をつけてみると、難解不明の点が、予想外に多かったという。いまにして容易ならざるしごとであると思った。ヘーゲルの用語はひじょうにむずかしく、哲学を専攻する学生すら、これを理解するのに苦しむことを知つたという。

吉野作造(一八七八〜一九三三、明治から昭和期にかけての政治学者、東大教授)が著わした小冊子『ヘーゲルの法律哲学の基礎』(法理研究会出版、明治38・1、全九六頁)は、法理論叢第一二編にあたる。本書は、著者が東京法科大学に在学ちゅう(明治36・9〜同37・3)穂積陳重(一八八三〜一九五一、明治から昭和期にかけての民法学者、東大教授)の法理学演習に出席したとき、提出した論文の概要を、印刷にふしたものである(「例言」)。

著者によると、ヘーゲル研究は、用語がむずかしいのと思いが深遠なので、多大の労苦を感じるという。ヘーゲルの法理学説を研究しようとする者は、かれの法哲学を理解するのに必要な知識をあらかじめ得ておく必要があるという。著者が本書においてしめそうとしたのは、この前提的知識であるという。

本書は――第一章 ヘーゲルの哲学の基礎観念 第二章 ヘーゲルの哲学体系及び法律哲学

法學博士 吉野作造 著

ヘーゲルの法律哲學の基礎

法理研究會出版

吉野作造著『ヘーゲルの法律哲學の基礎』
(法理研究会出版、明治38・1)。「早稲
田大学中央図書館蔵」

の地位 第三章 法律哲學 第一節 法律哲學の前提 第二節 法律哲學の特質——
から成っている。

明治期には、諸家がヘーゲルについてさまざまな論文を諸雑誌に発表しているが、
小冊子のかたちによ、ヘーゲルについて単行本を著したのは吉野作造が第一号で
ある。ヘーゲルの法哲學は、かれの哲學体系の他の部分とはなれ、独立して研究でき
るものではないから、法哲學の前提となる哲學の他の部分を理解することが必要だと
いう。

朝永三十郎著『哲學辭典 全』（宝文館、明治38・1）は、「哲學上の學語を説明せ

る辭典」がいまだ無かったために、主としてアイスレル、ボールドキン、キルヒネル等の哲學辭典を参考にして編んだものという（「凡例」）。

ヘーゲルの項には、つぎのようにある（三四九頁）。



ヘーゲル、ゲオルグ・キルヘルム・フリード
リッヒ。Hegel, Georg Wilhelm Friedrich.

獨逸の哲學者。ストットガールトに生る。七歳より
十八歳までは其地の「ギムナジウム」に學び、一七八
八年よりチュービンゲンの「セミナリー」の神學生と
なり、一七九〇年哲學博士の學位を受く。チュービ
ンゲン在學中シリングと交を結びたり。一七九三
—一八〇〇年瑞西及フランクフルト等に於て家庭
教師となり、一八〇一年初めて「遊星の軌道に就て」
てふ處女作を出せしも其所説は價値あるものに非ざ
りき。又之と同時に「フィヒテ哲學とシリング哲學と
の差異」てふ一書を著はせり。一八〇二—一八〇三年シ
リングと共に「批評的哲學雜誌」てふ雜誌を刊行せ
り。此頃よりして彼は哲學上の一家のを見を立て世も
亦多少之を認むるに至れり。一八〇五年イエナの員
外教授となりしも一八〇七年家計の困難のために之

を辭せざる可らざるに至り、ハイデルベルヒに移り
て新聞記者となる。彼の主著は皆此頃以後の著作
に係る。尋て一八〇八年ニュールンベルヒの中學校
長となる。一八一六年ハイデルベルヒの哲學教授と
なり、尋てベルリンに轉じてフィヒテの後を承けて
其教授となり、以後一八三一年虎列拉病に罹りて歿
するまで其職を奉ぜり。彼のベルリン時代、殊に一
八二三年頃より二七年頃まで、は其勢力の絶頂に達
したりし時期にして、其哲學は普魯西官民一般より
して非常の歡迎を受け、殆んど普魯西の官學たるが
如き觀ありき。（一七七〇—一八三二）

『教育時論』（第七一三号、明治38・2）の「文芸史伝——時代文学の変遷（二）」に、ヘーゲルの名がみられる。社会学者・建部遯吾（一八七一～一九四六、文科大学教授、社会学講座担当）がかいた小論「陸象山」（陸九淵のこと——南宋の学者。朱子と論争し、心即理——心のはたらきがそのまゝ、自然の道理を主張した）の「はしがき」が引用されている。このなかにヘーゲルが出てくる。

読書を職業とせば、群書（多くの書物）を渉猟せざる能はざるべきを、胸中理論を練らんと欲せば、先づカント、余暇あらばヘーゲル、須らく其の大体を了（おえる）すべし。

『東洋哲学』（第二編・第二号、明治38・2）の「莊子論（続）——第二節 終局の道に就て」に、ヘーゲルの名が散見する。

ヘーゲル、曰く 有は無なりと（中略） 有に対するの無なり ヘーゲル又曰く 此の如き無の最高形式は自由なり否定なりと……

『哲学雑誌』（第二二六号、明治38・2）の「附録」に、翻訳「ヘーゲル氏哲学体系」（紀平正美 小田切遼太郎 共訳）が掲載された。

訳者のひとり紀平正美（一八七四～一九四九、明治から昭和期にかけての哲学者）は、ドイツ観念論哲学——ヘーゲル哲学の弁証法の研究の先駆者として名をなした。昭和期に入ると、国家主義的傾向をつよめ、皇道哲学をうちたてたり、国民精神総動員運動の一翼をになったりした。大正八年（一九一九）学習院教授となり、かたわら東大や東京商大（一ツ橋大）などに出講した。

“哲学体系”とは、ヘーゲルの *Encyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse*（「哲学的諸科学体系梗概」）を簡単にしたものという。訳者らは多年、同書の研究にきたが、今回邦語に訳すことにしたのは、一つは知人から勧められたこと。二つは日本語によって哲学をまなぼうとする者に、ヘーゲル哲学とはどのようなものか示すにあった（「翻訳序言」）。

ヘーゲルの書は、ふつう難物ちゅうの難物という。寝ころんで読む本ではないのである。翻訳の第一回目は、第一節から第五節まで（同号の一

く八頁）に掲載され、以後も『哲学雑誌』（第二一七号、第二一八号く第二二二号、第二二五号く第二二六号、第二三〇号、第二三五く第二三七号「昭和二年」まで）に断続的にのった。

『哲学雑誌』（第二一八号、明治38・4）の「論説」に、「ヘーゲル哲学と其の翻訳とに就て」（紀平正美）がのっている。これは同誌（第二一六号）に発表した「翻訳序言」の付言でもある。論者によると、ヘーゲルのものをよむとき、その用語についてよく考えねばならぬという。

Das Wahre ー die Wahrheit
ディヴァールハイト

Das Freie ー die Freiheit
ディフライハイト

これらの語は、ふつう「真理」とか「自由」と訳せばよいのだが、ヘーゲルのばあいには、真あるいは自由という規定でもってすむときとすまぬときがあるという。「真であり」「自由である」こととは大きな違いがあるという。

だから訳文においては、「真なるもの」「真理態（性）」「自由なるもの」「自由態（性）」と区別して訳したという。またヘーゲルのばあい、文章の語句の配列が、そのまま Logische Folge（ロギッシュェフォルゲ（理法的順序）になっているという。だから少しでも位置をひっくり返すと、大切な意味をうしなうとさがある。また関係代名詞のない日本語に正しく訳すことができないので、ときに文章を二つにも三つにも切断して訳したという。

『国家学会雑誌』（第一九巻・第六号、明治38・6）の「雑報——『ハイデルベルヒ』大学百年間の国法学教授」（これは一世紀にわたる教授の事蹟を叙述したもの）に、ヘーゲルのことが出てくる。

一八一七年の冬学期にヘーゲルは沛山（ハイデルベルクのこと）で『自然法及び国家学』といふ毎週六時間の講義をして居る。「ヘーゲル」の「法律哲学」は 此の沛山の講義を基礎としたものである。

『Der Mensch 人性』という雑誌は、自然科学上の知識によって、人類の社会的な生活および精神的生活を研究する日本唯一の学術雑誌という（第一巻・第3号）。村上専精（一八五一く一九二九、明治・大正期の真宗大谷派の学僧。のち東大印度哲学教授）の口述筆記——「宗教ト哲学及ビ倫理ノ異同」（『人性』第一巻・第三号、明治38・6）のなかに、ヘーゲルの名がみられる。

哲学ハ個人ノ思想ニ依リテ成立ス

宗教ハ偉人ノ感化ニ依リテ成立ス

哲学ハカント、ソクラチース、ヘーゲル、等ノ賢哲一人アレバ 其人ソレゾレノ哲学ハ成立スルモノナレドモ、
（く）セラレシノミニテハ 仏教ト云フ宗教ハ成立セザルナリ 其ノ尊ガ三十歳ニシテ成道（悟りをひら

『時代思潮』（第二〇号、明治38・9）の「時評」にある小文「空虚なる日本」は、日本の哲学者といわれる者をあたかも揶揄したような文章である。記者は、わが国には、まだヨーロッパの大哲学者に匹敵するものはいないといっている。

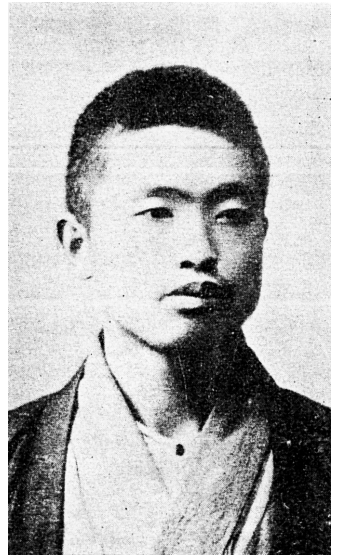
日本に哲学ありや、弘法（空海の大師名あり 伝教（伝教大師）あり、（荻生）徂徠あり（伊藤）仁斎あり（山本）中斎（江戸後期の儒者）あり、鳳潭（江戸中期の僧）あり、篤胤あり、さては異軒（井上哲次郎）と雪嶺博士（三宅雄二郎）あり。されど乾坤（天地）を羅（ら）し（綱）を張ってとらえる 万象を織理せる大思索家は未だ出でず。ア氏とカントとヘーゲルとショーペンハウエルとヴントとハートマンとオイケンと唯だ天の彼方に遙望するのみ。

『東洋哲学』（第一三編・第一号、明治39・1）の「人類と動物との分界線としての言語」（藤波一如）に、ヘーゲルの名がみられる。鳥やけものは精神をもつかどうか、なんら結論はないという。

精神なる此言葉は アリストートルの古代よりヘーゲルの近世に至るまで屢々使用せられ

という。この語は全体の事物を意味し、またあるときは虚霊無一物（心はなにも持っていない）を意味するときもある。

『東洋哲学』（第一三編・第二号、明治39・2）の「論説——哲学史の概念」（北沢定吉）に、ヘーゲルが引かれている。



哲学館教授・北沢定吉

定立^{ていりつはんていりつ}反定立^{はんていりつ}（論理を展開するための最初の命題と、ある主張論題に対立する主張）総合の形式に由りて思想の発展を論ずるものは、ヘーゲルの弁証法なり。

北沢定吉著『哲学史綱』（弘道館、明治39・5）には、ヘーゲルについての記述が散見する。記述の一部は諸雑誌にすでに発表したものであり、今回本書のなかに入れた。

本書は第一章 序論 第二章 希臘哲学 第三章 中世哲学 第四章 過渡時代の哲学 第五章 カント以前の近世哲学 第六章 カント以後の近世哲学 第七章 哲学現今

の進歩 附録——から成っている。

ヘーゲルが主に姿をみせるのは、「第一章 序論」と「第六章 カント以後の近世哲学」である。著者によると、シェリングやヘーゲルの特色は、哲学を有機的（多くの部分があつまって一つの全体をつくる）発展の過程とみたことであり、思想はじつとどこかぬものでなく、片ときも休むことなく進化発展するものという。またヘーゲル学派は、三つに分裂したのであるが、かれらは——

主として靈魂の不滅、神人^{しんじん}（キリストの称）の信条、神と世界との関係といふがごとき神学上の問題に就いて相争ひし

という。

加藤弘之は口述筆記「新哲学」（『人性』第二巻・第六号、明治39・6）において、ちかごろ新しい哲学派が生まれたとし、カント、ヘーゲルばかりか、コント、ヘルバルト、スペンサーなどの名を掲げている。

近頃^{ちかごろ}カント、及びヘーゲルノ哲学派ニ 新派ヲ生ジ 多少ノ改良ヲナセルモ 未タ其ノ根本ニ於テ 改革セラレタルヲ認メズ、而シテアウグスト、コント、ヘルバルト、スペンサー出デ哲学主義ノ革進又唱ヘ……

岩野泡鳴（一八七三～一九二〇、明治期の小説家・評論家・詩人）の『神秘的半獣主義』（佐久良書房、明治39・6）に、ヘーゲルのことが出てくる。

ヘーゲルの哲学の様に、論理その物が殆ど宇宙の生命であるかの域に達して居ても、尚伝へ難いところがあるので、ショーペンハウエルは別な方向を取り、ハルトマンの如きもヘーゲルを利用したに過ぎない。（三頁）

『早稲田文学』（第八号、明治39・8）の「彙報（分類してあつめた報告）——文芸消息」は、『大阪朝日』（7・20付）が報じたハルトマンの死を伝えている。六月六日にハルトマンがベルリン近郊で六十五歳で逝去したという。このなかにヘーゲルが出てくる。

千八百七十七年よりは 伯林に居住し 専ら哲学の研鑽に心を潜め ヘーゲル、シエリング、ショーペンハウアの哲学を総括するに 氏の有名なる「無意識」哲学を以てせむと試みた。

『警世新報』（第一〇一号、明治39・9）の「講壇——宗教学概論」に、宗教学研究の略史がのべられている。宗教学とは、仏教とかキリスト教などの特殊な宗教だけを研究し、その教理教義について論議するいわゆる宗教学とは異なるという。ドイツにおいて哲学が勃興するや、その影響として宗教の研究がはじまった。哲学者は哲学の立脚点から宗教の研究をはじめたという。そういった哲学者は、

ライプニッツ、カント、ヘーゲル、レッシング、ヘルデル、シュライエルマッヘル、シヨッペンハウエル、ハルトマン等が其の重なるものでありますとある。

金子馬治（一八七〇～一九三七、ペンネームは「筑水」。明治から昭和期の哲学者・文芸評論家、早大教授）が執筆した「キヤーケゴールドの人生観」（『早稲田文学』第九号、明治39・9）に、ヘーゲルのことが出てくる。

シェリングやヘーゲルは、智識と信仰と芸術との調和を図らんと苦心して居るが、畢竟其れは架空な理論に過ぎない。

『警世新報』（第一〇三号、明治39・10）の「講壇——宗教学概論」に、ヘーゲルの宗教について書かれている。著者・芝田徹心によると、ヘーゲルにとって宗教は、智識の極点（到達できるさいこの点）であった。

ヘーゲル氏——宗教とは個人の有限なる精神が、其の本質に於ては畢竟無限絶対なることを了得せる智識に外ならず。此智識を得て完全の自由に到達するは即ち宗教の極致なり。

岡島誘著『最近西洋哲学史』（博文堂、明治39・11）は、——第一編 ヘーゲル以後の独逸哲学 第一章 ヘーゲルの反对者 第二章 ヘーゲル派の分裂 第二編 十九世紀英国哲学 第三編 十九世紀仏国哲学——などから成る。ヘーゲルの名が多出るのは、一〇五四頁あたりまでである。著者によると、ヘーゲルはシェリングのように、精神と自然とを、絶対的理性の両方面とはみなさず、絶対的理性そのものと考えた。また——

定立——反定立——綜合 是れ實に宇宙思想の發展の形式なり（五頁）。

という。

『東洋哲学』（第一三卷・第一〇号、明治39・11）の「ハルトマン氏に就いて」（北沢定吉）に、ヘーゲルの名がちらはらみられる。『無意識哲学』（三卷、一八六九年刊）、『哲学大系』（八卷、一九〇六〇九年刊）を公したハルトマンは、ヘーゲルの書を好んでよんだ。



ハルトマン

ヘーゲルの「哲学概論」及び十八世紀仏国哲学者の著書は、彼が愛読せる最初の哲学書なりしなり。

『哲学雑誌』（第二三五号、明治39、何月号にのったものか不明）の「彙報——ハルトマン逝く」（八〇九〜八一八頁）に、ヘーゲルの名が散見する。論者によると、近世の美学を攻究しようとする者は、ハルトマンの門をくぐらねばならぬという。ハルトマンの美学は、カントに緒を発し、

近くはヘーゲルの具象理想論に至りて 其発展の頂点に達したる美学見（美学上の考え方）を基礎とせり。

『警世新報』（第二一七号、明治40・5）の「他力信仰と見神」に、ふたたびヘーゲルのことがひきあいに出されている。明治のはじめ、日本人は欧米の物質文明におどろき、ただそれをまねるのに余念がなかったが、日清戦争後は国民に自覚ができ、外国のまねをあまりしなくなった。国民は物質的文明よりも、精神的文明に心をよせるようになった。その結果、――

独逸と云へば、カント、ヘーゲル、シュッペンハウエル、ハルトマンを追憶するのである。

北沢定吉 宮地猛男 共編『哲学汎論』（弘道館、明治40・5）は、初学者のための哲学入門書として編まれたものである。しかし、同書は編者が書きおろしたのではなく、西洋の哲学書を参考とし、それを節約し一書としたものようだ。参考にした著述は、――

ラポポルト（不詳）…………… *Primer of philosophy*

オスヴルト・キュルペ…………… Oswald Külpe（一八六二〜一九一五、ドイツの哲学者・心理学者。のちミュンヘン大学教授）の『哲学入門』

Einleitung in die Philosophie, 1895および同書の英訳一八九七年ロンドン刊。

ヴィルヘルム・ヴィンデルバント… Wilhelm Windelband (一八四八—一九一五、ドイツの哲学者、ハイデルベルク大学教授) の英訳 *A History of Philosophy*, transl. by J. H. Tufts, 1893

などである。前掲書の附録——(一)カント以後の近世哲学に、「楽観 (Optimism)」がある。このなかにヘーゲルが出てくる。哲学という楽天主義、楽観論とは——人生のくらい面を見ず、現実はずべて善で、人生はたのしいものであるとする立場をいう。

彼等に従へば、世界に実在する部分的の醜悪は、全体の完全の爲め 全体の善美も爲めに欠くべからざるものなり。ストア派、ライプニッツ、スピノザ、ヘーゲルの如きこの立脚地の代表者なり。(二七四頁)

紀平正美著『論理学綱要』(弘道館、明治40・10)の「附録」に、ヘーゲルの名が散見する。たとえば――

ヘーゲルは最も抽象的なる有 (Sein) から 其の哲学組織を始めまして、漸次具体的のものに進めました。

金子馬治は「理想派文芸と人生発展の観念」(『早稲田文学』第二四号、明治40・11)において、ヘーゲルを引きあいに出している。ヘーゲルのロマンチックな哲学は、一面からいえば、壮嚴な文芸と観ることができ、またかれの哲学は、“発達はつたの哲学”だという。

自然の進化——人生の発展——宇宙の進歩についての思想は、十九世紀の西洋の学問と芸術の産物であり、それらは進歩発展という歴史的思想をもって貫かれたものという。そのような歴史的観念を植えたのは、ドイツの理想派の文芸であった。

ヘーゲルは、独逸理想派文芸期に発達した此の根本観念を、最も精確に又最も巧妙に、理論の形式に言ひ現はした随一人である。

プラグマティズム(実用主義)は、一種の功利主義である。知識が真理かどうかは、生活上の實踐に利益があるかどうかで決定される(『岩波国語辞典』)。「早稲田文学」(第二五号、明治40・12)に、“南山”という寄稿者(金子馬治か)が、「プラグマティズムと新自由主義」という小

文を寄せている。このプラグマティズムの主張の多くは、ヘーゲル系の絶対論者を非難攻撃することによって展開してきた。

プラグマティズムは、主知説（経験的、感情的なものよりも、知性的、合理的、思维的なものを重視する学説）に対する主意説（理知——物ごとの道理を判断する能力——や感情よりも意志を重くみる立場）の運動の英米に於ける一発頭（一つの現われ）であって、独逸では前世紀の中期にヘーゲル哲学の反動は済んだのであるが、英米に於いては、輓近になってヘーゲル哲学が頭を擡げたために、近頃漸く其の反動を起しかけたのである……（一九頁）

岡村司（二八六〇—一九二二、明治・大正期の民法学者。のち京大教授）の『思想小史』（有斐閣書房、明治41・1）に、フェルディナント・ラサール（一八二五—一八六四、ドイツの労働運動・社会主義運動の指導者。ヘーゲル哲学に傾倒）についての一章があり、そこにヘーゲルの名がみられる。プレスラウすなわちヴロツワフ（ポーランド南西部の商工業都市）において、商人の子として生まれたラサールは、土地の中学校を卒業後、——

ライプチヒの商業学校に入学せり。然れともその課業を喜はず。転じて大学（プレスラウ大学——引用者）に入り、博言学（言語学の旧称）、哲学、及法律学を修め、ヒヒター（フィヒテ）、ヘーゲルの学風を慕ひ、政治に関しては、当時独逸青年の間に行はれたる激烈なる革命思想を懐けり。（一一七頁）

今福忍著『論理学要義』（宝文館、明治41・1）は、早稲田大学や浄土宗大学における講義を骨子として、それに手を加えてなった書である。同書は初心者に論理学（正しい判断や認識をうるため、思考の進め方を明らかにしようとする学問）の概要を理解させるために編まれたものであった（「自序」）。

同書の附録——「五 形而上学的論理学」に、「ヘーゲルの論理学」と題する章句がある。

ヘーゲルの論理学は之を約言すれば、カントが思考の形式と内容とを峻別（きびしい区別）したるに反して、形式と内容とは分離すべからざるものにして、認識の最も遍通なる（自由に変化適応する）内容は之も形式と共に考察せられざるべからずとなし……（四五八頁）

『早稲田文学』（第二七号、明治41・2）の本欄に、「文芸上の自然主義」と題する小文がのったが、このなかにヘーゲルの名がみられる。哲学用語としての「自然主義」は——自然を唯一の實在として、これを科学的に説明しようとする主義である。自然主義はまた写実主義（事物の実体を客観的にえがこうとする主義）の一部ともみられている。

外形の模写、自然の模写、之れ中心とする点に於いて、写実主義はクラシズム（古典主義——ギリシャ・ローマの古典を手本として、それにしたがう芸術的傾向——引用者）に分類した。（中略）写実主義はクラシズムと通ずる。ヘーゲル、シェリングの一致は、是れに外ならぬ。

『東洋哲学』（第一五編・第五号、明治41・5）の「論説——近世の唯物論に就て」（得能文）に、ヘーゲルのことが出てくる。論者によると、カントはひじょうに「経験」の要素を重視したが、真正の意義における哲学は、やはり先天（経験に先行し、経験の基礎となる意）の認識であるというふうに説いたという。しかし——、

ヘーゲルに至ては 理性偏重の極論に行た者と言はれて居るのである。

『太陽』（第一四卷・第八号、明治41・6）の「文芸界の趨勢——第二節 独逸の思潮」に、文芸や思想界に偉大な貢献をした超然的哲学者としてヘーゲルの名がかかげられている。

而して一方にはヘーゲルが出て、広大なる哲学組織を立て、（つくる）、其の中には独り哲学のみならず、文芸、宗教のすべてのものを包括した。

カントは批判哲学を立て、フヒヒテ、シエリング、ヘーゲルの大哲学を呼び起し……

島村抱月（一八七〇～一九一八、明治・大正期の評論家・劇作家、早大教授）の「文芸上の自然主義」（『早稲田文学』（第二十六号、明治41・7）に、ヘーゲルのことが出てくる。

シンボリズム、クラシシズム、ロマンチシズムの三名目（呼び方）が哲学者ヘーゲルの美術論に於いて、始めて最も名瞭に文芸彙類（同じたぐい）の対照語として用ひられたことは 人の知る所である。

戸水寛人（一八六一～一九三五、明治・大正期の法学者、東大教授）は、『法学協会雑誌』（第二十六卷・第八号、明治41・8）の「論説」に、『Hegelノ学説』（五二九～五六六頁）を寄稿した。これはヘーゲルに関する単独論文である。内容は——ヘーゲルの小伝——ヘーゲル哲学の大綱——ヘーゲルの論理学——ヘーゲルの自然哲学——ヘーゲルの精神哲学——ヘーゲルの学派である。論者いわく——、

Hegelノ哲学ニ於テハ 哲学ノ研究ニハ 思想ノ法（思想作為の過程の意か——引用者）ノ研究ヨリ始メザル可ラズ……

夏目漱石（一八六七～一九一六、明治・大正期の小説家）の「三四郎」（『東京朝日新聞』明治41・8から掲載）に、ヘーゲルにまつわるエピソードをユーモラスにしている。

ヘーゲルの柏林大学に哲学を講じたる時、ヘーゲルに毫も哲学を売るの意なし。彼の講義は真を説くの講義にあらず、真を体せる人の講義なり。舌の講義にあらず、心の講義なり。

……
ヘーゲルの講義を聞かんとして、四方より柏林に集まれる学生は、此講義を衣食の資に利用せんとの野心を以て集まれるにあらず。唯哲人ヘーゲルな

るものありて、講壇の上に、無上普遍の真を伝ふると聞いて、向上求道の念に切なるがため、壇下に、わが不穩底の疑義を解釈せんと欲したる清浄心の発現に外ならず。此故に彼等はヘーゲルを聞いて、彼等の未来を決定し得たり。自己の運命を改造し得たり。のつべらぼうに講義を聴いて、のつべらぼうに卒業し去る公等（きみたち）日本の大学生と同じ事と思ふは、天下の己惚なり。

『東洋哲学』（第一五編・第九号、明治41・9）に、戸水寛人は、小文「ヘーゲルの哲学大綱（おおもと）」を寄せた。ヘーゲルの哲学を研究するには、順序として、思想作為の過程により、左記のごとく三つにわけ、という。

- 一、吾人の意識は 主観と客観との結合により 生ず。例へば物を見て心の中に感覚を生じ 因て以て領會（了解）を生ず。
- 二、既に主観と客観と相結合したる以上は 更に又主観と客観とを分離せしむ、之れ吾人の悟性（物ごとを合理的に考える能力）に基く。
- 三、主観と客観と相分離したる上は 更に復其結合を生ず、之れ吾人の理性に基く。

論者によると、ヘーゲルの哲学においては、絶対（絶対者や真理・価値などの客観的な基準の存在をみとめる立場）の研究は、同時に認識論（認識の起源・性質・範囲・価値などについて研究する哲学の一部門）の研究となるという。

白柳 秀湖（一八八四―一九五〇、明治から昭和期にかけての小説家・評論家。反アカデミズムの民間の史家）の『黄昏』（如山堂、明治42・5）に、ヘーゲル派哲学の信奉者——誠一という人物が登場する。

誠一はもと倫理学上のヘーゲリアンで、彼の学説の出発点は何時でも社会に於ける習慣の破壊、建物といふやうな問題にある。彼の学説は頑固な団体主義ばかりが、蔓つて居る此国の学者の説の中で何時でも多少の異彩を放つて、常に一部の青年から少なからぬ興味をもつて見られて居た。

『太陽』（第一五巻・第八号、明治42・6）に、長谷川天溪（一八七六―一九四〇、明治から昭和期にかけての評論家・英文学者）は、「二葉亭四迷子逝く」の一文を寄稿した。このなかにヘーゲルの名がみられる。

同国の批評家ブエーリンスキーは、はじめシェリング、ヘーゲルのロマンチック哲学にかぶれたれど、後には写實的、自然主義的見地を取りて、左の如く立言するに至りぬ。

元良勇次郎は、『哲学雑誌』（第二四卷・第二七二号、明治42、何月号にのったものか不明）に、「論説——ヘーゲルの存在論に就て」を寄稿した。これはヘーゲルに関する単独論文である（九〇五〜九二九頁）。これは講演筆記のようである。論者によると、ヘーゲルの哲学は、すべてお互い相関係しているため、『存在論』だけを切り離して論ずることはできないという。ヘーゲルの、——

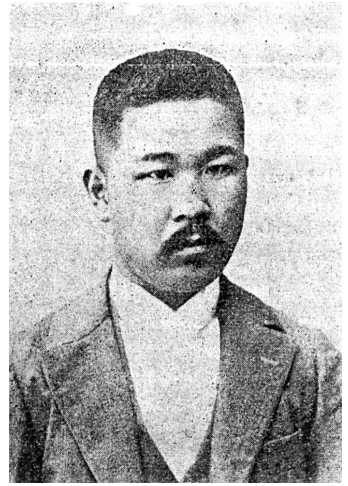
存在の説は 一方から言へば 段々と帰納的に研究して来たところの結果である

という。また他方から考えると、それはヘーゲルの論理学の出発点であったという。

綱島政治著『欧州倫理思想史』（杉本梁江堂、明治42・10）は、先に刊行した『春秋倫理思想史』（早稲田出版部、明治40・12）を装いをあらたにし、出版したものである。同書の「近代倫理——其二 独逸唯心派倫理」に、ヘーゲルの章節がある（二三九〜二四四頁）。著者によると、ヘーゲルの倫理は、要するに進化発展の倫理だという。

従来の抽象的な個人的倫理に対して 客観的倫理を樹立した一点は、欧州の思想史に不朽の位置を占めた所と言はざるを得ぬ。
という。

『東洋哲学』（第一七編・第九号、明治43・10）の「論説——哲学の進歩（講話の一節）」（得能文）に、ヘーゲルの名がみられる。論者によると、人間に進歩があるように、哲学にもそれに応じた進歩があるはずという。なぜなら、哲学は前人の繼承（地位、財産などうけつぐ）であるとともに、その時代の思想をあらわすものだからである。いまは混乱の時代、折衷の時代、論弁（意見をのべて論じる）の時代であるという。



桑木 厳翼

ヨーロッパの偉大な哲学者は、みなその時代の思想の代表者であった。が、いまは大哲学者の時代ではないという。

ヘーゲルやスペンサーの如く、時代を現はす人は無い。

という。

吉田静致の「人格的唯心論に就て」(『哲学雑誌』第二八五号、明治43・11)に、ヘーゲルの

ことが出てくる。

ヘーゲルの如きは、矢張人間の理性の働きから気が付いて、理性——ロゴス——観念を實在とする一種の絶対主義を唱へて居るのであるが、人的理性の境域を越へない間はそれで宜いけれども彼は既に人と云ふものを超絶して絶対と云ふことに這入つて来る。

桑木 厳翼(一八七四—一九四六、明治から昭和期にかけての哲学者。京大教授をへて東大教授)の「現代哲学」(『太陽』第一七卷・第一号、明治43・12)において、哲学の学説を文芸で表現することに言及している。桑木によると、イプセン(一八二八—一九〇六、ノルウェーの劇作家・詩人)は、哲学から何ももうとすることがない、といっているが、『皇帝とガリレア人』(世界史劇)には、ヘーゲル哲学の口吻(口ぶり)を示している、という。

たとえば、ユリアンとマキシモスとの問答に——

ユリアン

自由の途とは何ぞ?

道士マキシモス

必然の途である。

ユリアン

何の力にて?

道士マキシモス 意欲によりて。

ユリアン 何を意欲すべきか？

道士マキシモス おえねばならぬものを。

この問答は、矛盾の原理を無視したいい方であり、「有は無なり」というヘーゲル哲学を想いださせる、という。

是は正しくイブセンがヘーゲルの説を伝聞して（伝えきいて）偶然其思想を借りたものだらうといふ。（Emil Reich, H. Ibsens Dramen）

意識的に哲学を引用した文芸上の作品はたくさんあるが、哲学を排斥する者が、しまいには哲学と合体する趣意とおなじだという（桑木）。

森鷗外（一八六二～一九二二、明治・大正期の軍医、小説家・評論家）の「食堂」（明治43・12）に、ヘーゲルがらみでピエール・ジョゼフ・ブルードン（一八〇九～六五、フランスの社会主義者）のことが出てくる。

Proudhon は Besançon の貧乏人の子で、小さい時に活字拾ひまでしたことがあるさうだ。それでもとうとうパリで議員に挙げられるまで漕ぎ付けた。大した学者ではない。スチルネルと同じやうに、Hegel を本尊にしてはあるが、ヘーゲルの本を本当に読んだのではないと、後に自分で白状してゐる。

西田幾多郎の『善の研究』（弘道館、明治44・1）に、ヘーゲルの名が散見する。

遠き歴史の初から人類発達の跡をたどつて見ると、国家といふものは人類最終の目的ではない。人類の発展には一貫の意味目的があつて、国家は各其一部の使命を充す為に興亡盛衰する者であるらしい（万国史はヘーゲルの所謂世界的精神の発展である）。

ヘーゲルは何でも理性的なる者は実在であつて、実在は必ず理性的なる者であるといった。この語は種々の反対をうけたにも拘らず、見方に由つては動かすべからざる真理である。

朝永三十郎（一八七一―一九五一、明治から昭和期の哲学者。大谷大学教授をへて京大教授）の「シヨープンハウエルの哲学」（『倫理講演集』第一〇二号、明治44・2）に、ヘーゲルが引きあいに出されている。

シヨープンハウアーは、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル等の思弁的唯心論に反対し、一八二〇年（三十二歳）ベルリン大学の講師となつたとき、とくにヘーゲルに対抗して、その勢力をそごうとした。シヨープンハウアーは、これら三人の哲学者を、――

三大法螺吹きさんだいほらふ (die drei grossen windbeutel) と罵倒ばとうした……

山路愛山やまじあいざん（本名・弥吉、一八六四―一九一七、明治期の史論家・評論家）が、後年創刊したのが『国民雑誌』である。同誌の第二巻・第六号に掲載された「世界の心――トルストイ伯の哲学無能論」（明治44・6）に、ヘーゲルの名がみられる。論者によると、つぎに掲げる哲学者らの教えは、理性で解することができぬことに関して無益に弁論し、宗教上の教訓によってよくいわれていることを拙劣にくり返したものから成っている、という。

かれらの説は、空想的な矛盾にみちているという。

アリストテレース、プラトーン、ライプニッツ、ロック、ヘーゲル、スペンセルそのた其他無数の人生観すなわは即ちこれである。

『国民雑誌』（第三巻・第八号、明治45・4）の「民之声――たみのこえ新しければ真理なりと思ふ迷信あたらし」に、ヘーゲルの名が引いてある。論者によると、宗教や哲学の新説といつても、旧説のむし返しが多いという。シヨープンハウアーやハルトマンの哲学は、いつとき人心をさわがせたが、奇説ではないという。

哲学歴史の上より言へばカント。スピノザ。ヘーゲルより 人間思想の発展したる順序に於て 自然に達すべき一種の結論にして 実 は古典の中にも 其様な考の輪郭だけは存在したるものなり。

錦田義富の小文「ギューヨーの道德無義務論」(『倫理講演集』第一一七号、明治45・5)に、ヘーゲルのことが引用されている。カントは浅薄のそしりを免れず、ヘーゲルは深奥ではあるが、すらすらと進まない、という。しかし、――、

未だカント。ヘーゲルの壘(とりで)を摩する大哲学系統組織者は現はれぬにしても、深遂(ふかい)多方面の自由思想家は多く出て居る。

『倫理講演集』(第一一九号、明治45・7)の「哲学と現代」(桑木厳翼)は、講演筆記を掲載したものである。論者はベルグソン、コント、ニ―チェ、カント、オイケンなどを例にひいているが、ヘーゲルもすこし顔を出している。ルドルフ・オイケン(一八四六―一九二六、ドイツの哲学者、イエナ大学教授)と、アンリ・ベルグソン(一八五九―一九四一、フランスの哲学者、コレージュ・ドゥ・フランスの教授)の二人は、いま世界で名高い学者だという。

オイケンよりベルグソンのほうが変わったところがあり、人を魅了する力があるという。他方、オイケンはどうか――

オイツケンの方は、どうも所謂哲学者風の所があり過ぎて、プラト―、カント、などを昇いで――カントの槍を提げて、ヘーゲルの鎧でも着して、出て来ると云ふ遣方である。

「大正期」

ルドルフ・オイケン原著 『ルドルフ・オイケン 大思想家之人生観』(東亜堂、大正元・10)は、七五六頁もある大著である。本書は歴史書である。人生問題を提示

すると同時に、さまざまな思想家の人格的特質をあきらかにしようとしたという（オイケンの序文）。要するに、古今の大思想家の人生観を観察し、叙述し、批判したのがこの本であるという（波多野精一の序）。

同書の第三章「第二節 独逸観念論」に、ヘーゲルについての章節がある。

彼れの思想の世界には、始^{はじめ}からして怪物の様な力が働いていた。然^{しか}し或^{ある}間は、精神の力がそれを抑制した。そして此人の平和な、殆ど平俗な（平凡で俗っぽい）人格が之^{これ}を和^{やはら}げた。

桑木厳翼著『哲学綱要』（太陽堂書店、大正元・12）は、旧著『哲学概論』の補遺のような意味でかいたものという。同書にはヘーゲルの名が散見する。著者は詳説こそしていないが、ヘーゲルの弁証法にふれている。またベルリン大学附属図書館のようす、ヘーゲルの『歴史哲学』が、レクラム文庫に翻刻されていることやヘーゲルの胸像などについて語っている。

大学の裏通^{うらどおり}はドロテーン町、其の町端^{まちばすれ}にヘーゲルの胸像がある

という（「欧米哲学界の印象」）。

久保良英
宇井伯壽 共訳『哲学概論』（弘道館、大正2・1）は、ウィーン大学教授ヴィルヘルム・イエルザレム（一八五四～一九二三、ドイツの哲学者）が著わした『哲学入門』*Einleitung in die Philosophie*（一九〇九年、第四版）を訳したものという。同書には、ヘーゲルの言説について散見する。

実体一元論は、ヘーゲル（二七七〇～一八三二）に於て、猶^{なほ}一層^{いっそう}包括^{ほうかく}的統一^{とういつ}的に論述せられたり。（二八九頁）

『東洋哲学』（第二〇編・第三号、大正2・3）の「独逸現代の哲学思想」（ドクトル ヤコビ）は、東洋大学でおこなわれた講演の翻訳をのせたものである。このなかにヘーゲルの名が散見する。

吾々の教師が若かった頃は、独逸に於いてヘーゲルの唯心論が倒れ、又た独断的唯物論に反対して争って居た頃であった。

鹿子木員信かのこぎ けいのぶ（一八八四～一九四九、明治から昭和期の哲学者。海軍機関学校出身の元海軍中尉。のち哲学を専攻し、慶大・九大教授を歴任。ナチス・ドイツに招かれて『皇学』を講じた。太平洋戦争中ゅうは、「言論報国会」の事務理事。A級戦犯）の講演筆記（『哲学の使命』）が、『倫理講演集』（第一三七号、大正3・1）に掲載された。論者によると、いま世界でもっとも著しい傾向は、民主主義だという。その潮流は、日本社会の根柢に流れ、日本は世界でもっとも民主主義的な国であるといっても過言ではないという。

ヘーゲルの予言どおり、十九世紀のすえか二十世紀初頭において、民主主義が実現しつつあるといい、天下はまさに民衆のものになりつつあるという。

Die Massen avancierenディ マッセン アヴァンシールン（『民衆は前進する』意）とは、第十九世紀の初頭に当って 此民主主義運動が未だその頭を擡げぬ前 彼かの人類の深き洞察の明めい（物々）を見通す知力）を持って居たヘーゲルの言った言葉であります。

従来、哲学史の書を著わした者の多くはドイツ人であり、英米の学者の手になるものはひじょうに少なかった。

ロージャース原著
藤井健治郎合訳
北 吟吉
『西洋哲学史』（富山房、大正3・2）は、アメリカのロージャース教授（不詳）の *Student's History of Philosophy* を訳したものと
いう（『訳者序文』）。

同書の第三十八章は、ヘーゲルの章節である。このなかで著者はヘーゲルの小伝、ヘーゲル哲学の大体の性質、精神発展の諸階段、ヘーゲル哲学の欠点などについて論じている。著者は、――

ヘーゲル哲学の明瞭なる総念を伝ふるは 一大難事たり、

といい、以下の叙述は太要ならざるをえない、という。

『向上』（第八巻・第四号、大正3・4）に、「宇宙に彷徨ふ現代思潮（下）」（宮田 修）という小文が掲載されており、そこにヘーゲルの名が散見する。論者によると、西洋近世の哲学を知ろうとする者は、まず世界稀有の大学者をきわめねばならぬという。ヘーゲルは、一家の言をたてて、学界の一部を風靡していたという。フィヒテは宇宙の元理を道德的にみて、万有（あらゆるもの）の目的は、道德的活動にある、と説いたが――

ヘーゲルは同じ元理を理性として、此万有の目的は 知識的活動にあると論じて居たのである。

宮地猛男著『哲学とは何んぞや』（要領文庫・第一編・広来社書房、大正3・7）は、平易な言文一致で書かれた哲学入門書である。本書は――
一 総論 二 形而上学 三 自然哲学 四 心理学 五 論理学 六 美学 七 倫理学 八 社会学 九 哲学史の要領――から成る。
このなかにヘーゲルの名が散見する。近世美学の発達に貢献したドイツのヘーゲル――

近世哲学に一新紀元を開くに至った。此後フヒテ。シェリング。ヘーゲル等相次いで起り、以てカントの説を紹いだ（二二六頁）。

『東洋哲学』（第二二編・第八号、大正3・8）の小論「スピノーザよりヘーゲル」（紀平正美）において、論者は哲学的発展と系譜にふれ、

スピノーザよりヘーゲルに至る間には、ライプニッツを要し カントによって転回せしめられ（方向をかえられ）、フィヒテ及びセリングを経なければならなかった

という。

『倫理講演集』（第一四四号、大正3・8）の「近世に於ける『我』の自覚史」（朝永三十郎）に、ヘーゲルの名が散見する。フィヒテ、シェリ

ング、ヘーゲルらは、カント哲学の正当な継承者であるが、かれらはカントが発見した“三体系”（超個人または先天我または純我）の概念を発展させることをうながしたのは、カント哲学の物そのものの概念であるという。

征矢野 雄著『シヨウペンハウエルの研究』（東亜堂書房、大正3・8）は、事蹟（生涯と性格）・学説・評論の三部構成である。著者によると、とくに第三部において、シヨウペンハウアーの性格と哲学との関係——かれの哲学の歴史的地位——その学説の価値、内部的矛盾、かれの文明史的意義などをうかがおうとしたという（「自序」）。

とくにヘーゲルとの関係では、かれに論争をしかけ、個人的反感から攻撃したことはよく知られている。その攻撃は、“要塞戦”の観があった。かれがベルリン大学での講義が失敗したのは、ヘーゲルの妨害があったからと考え、また著作が世間からみとめられなかったのは、哲学教授たちがいっしょになって黙殺するからだと怒った。が、かれのとりこし苦勞は、ヘーゲルの大組織の自爆と崩壊によって、むくわれた。

伊藤源一郎編輯『現代叢書 オイケン』（民友社、大正3・9）に、ヘーゲルのことが出てくる。

ヘーゲルについては我々はヘーゲルの為^{ため}に牽^ひきつけらるゝと同時に拒^{きよ}斥^{せき}せらる。

大西 祝の遺稿をまとめて編纂したものは『大西博士 全集』であるが、その第三・四巻は『西洋哲学史』（警醒社書店、大正3・10）である。同書の「第四十九章 カント以後の哲学」に、ヘーゲル（二七七〇〜一八三二）の章節（七三三〜七三六頁）が入っている。このなかでフィヒテ、シェーリングの哲学とヘーゲルの哲学との関係、ヘーゲルの弁証法、自然哲学などについて語っている。これら三人が——

相^{あい}繼^ついで代表したる哲学思想は 是^{こゝ}れカント以後の独逸哲学界に於ける中央の流れとも云ふべきものなり。

という。

『倫理講演集』（第一四九号、大正4・1）の「思想上の国産奨励論に就て」（朝永三十郎）に、ヘーゲルの名がちらほらみられる。カント哲学とその発展の結果、フィヒテ、シェーリング、ヘーゲルの思想は、コールリッジ（二七七二〜一八三四、イギリスの詩人・批評家）やカーライル

(一七九五～一八八一、スコットランド生まれの評論家・思想家)を介してイギリスに輸入され、グリーン一派の理想主義的自我実現論の倫理となったという。

『倫理講演集』(第一五〇号、大正4・2)の「独逸思想と軍国主義」(朝永三十郎)に、ヘーゲルが引きあいにだされている。論者によると、超個人主義的国家主義・軍国主義をその哲学体系の内容としたのは、ヘーゲルだという。それは哲学的基礎——絶対的唯心論のうえに立ったものという。ヘーゲルは——、

国家对個人の主客(主人と客) 関係に関する従来の思想を根柢より破壊して 徹底した超個人的国家主義を説いた

のである。

『倫理講演集』(第一五〇号、大正4・3)の「英独思想の特徴を論ず」(藤井健治郎)は、ドイツの団体主義、国家主義などについて語ったものである。ヘーゲルによると、国家はその客観的道德の一体現(具体的なすがた)だという。国家の職能(職務上の能力)のうち、外的職能——一国家と他の国家との関係——に、ヘーゲルの国家論の特色がみられるという。

一国がその独立を維持してゆくために、ときに他国と戦争になるのは当然のことであり、戦争もまた国家にとって必要なものである。戦争はまた国家にとって道徳上必要なものであるから、国民は一身を犠牲にして護国の大任をはたさねばならない。

.....

ヘーゲルは此の精神を「政治的勇氣」と名つけてゐる。

という。

稲毛詛風著『オイケンと現代思潮』(近代思潮叢書・第八集、天弦堂、大正4・7)に、ヘーゲルの名が散見する。

ドイツに於てはロマンティズム・アイデアリズムの哲学は既にヘーゲルに於て其の絶頂に達した。否寧ろ一步を脱して新しい転向点を見出したといふ方が一層妥当である。

『東洋哲学』（第二編・第八号、大正4・8）に、富士川遊（一八六五―一九四〇、明治から昭和期にかけての医学者。『日本医学史』を著す）は、「加藤老先生の壽（長生き）を祝す」の小文を寄せた。生れつき、体力や意志のよわい者は長生きできぬようである。

ヘーゲルが、生命の予後（見通し）を論ずるに方り、一定の精神的動機が寿命を長くするの事実を示し、殊に精神の緊張と「エ子ルギー」とを以て、その主因となせるは、諸家の賛同する所……

という。

『東洋哲学』（第二編・第九号、大正4・9）の「倫理上の根本問題（二）」（稲垣末松）において、論者は「倫理」（*das Sittliche*）と「道德」（*das Moralsche*）の二つの語のあいだに何ら意義上の区別をしないという。しかし、ヘーゲルは――

道德といふ概念をば、個人の意志生活の範囲に限画し（かぎる）、さうして倫理といふものに対して、より高遠なる価値を附与し……

『倫理講演集』（第一六三号、大正5・3）の「西洋諸国の学風を論じ 我が国将来の学風に関して希望を述べ」（中島力造）に、ヘーゲルの名が引かれている。

カントの精神を承けてフィヒテ、シエルリング、ヘーゲル等の唯心論者が出て 各々自説を主張したのであります。

論者によると、いまから五十年ほどまえ、ヘーゲルは大きな勢力をもっていたが、その学派が瓦解し、二、三の有名な学者を残すだけになった

という。

ドイツの学者は、独特の術語を使って著述するという。しかし、その思想は精密ではあるが、理解することはむずかしいという。イギリスのロックやミルのものは、ふつうのじいさんや婆さんが読んでもだいたいわかるが、ヘーゲルの哲学書は、ドイツのふつうの老人らが読んでもわからぬしろものという。

また日本のこれからの学風についての注文は、左記のようなものである。日本の哲学思想は、論理的方面がよいという。その理由として儒教に倫理学がなかったからだとしている。日本の学者は人の説を引用しても、出典をあきらかにしないという。たとえば、「ヘーゲル曰く」と書いても、何の本のどこにあるのか明かにしていないという。引用書、参考書をいまずこし正確にするすようにいつている。要するに雑駁な論文がまかり通っているということであろう。

『東洋哲学』（第二三編・第五号、大正5・5）の「Romanticの思潮」（松下舜孝）に、ヘーゲルの名がみられる。論者によると、「自我」は、みずから創造発展する統一態であるという。ルネサンスにおいては、ロックによって、その曙光がしめされ、カントの大発見により――、

フィヒャ、シリング、ヘーゲルの所謂ローマンチックの流れとなって、現代に至り……

という。

朝永三十郎著『独逸思想と其背景』（宝文館、大正五・五）は、最近二年ほどのあいだに著者が公にした、ドイツ思想に関する論文をまとめて一書に編んだものである。本書は五本の論文から成るのだが、「三 独逸思想と軍国主義」には、ヘーゲルの社会観や国家観が説かれている。ヘーゲルとしての社会とはなにか。それは多数の個人が、じぶんの利害上、法律や規約をもうけて行政機関をもうけるところの団体という。一方、国家とはなにか。それは国民精神によって統一された有機的渾一体（ひとつにまとまったもの）である。

家族を支配するものは愛である。

社会を支配するものは利であり、国家を支配するものは国民的精神である。

ヘーゲルは個人对国家の關係に就いてはプラトーンと等しく明確たる超個人的國家主義を説いた。

フランク、シルリー氏原著『古代より現代まで 西洋哲学史』（目黒書店、大正5・9）は、コーネル大学の哲学教授フランク・シルリーの哲学史（Frank Thilly, *A History of Philosophy*）を訳述したものである。同書は八〇四頁もある大書である。「第七章 独逸の觀念論」の第四節は、「ヘーゲル」（六二七～六四八頁）である。

ヘーゲルに依れば、哲学の業（つとめ）は、自然及び全經驗界を如実に知り、其処に存する理性を会得するにあり、……

という。

『東洋哲学』（第二四編・第一号、大正6・1）の「材能（生れつきの能力）態度の類型差異を論じ 生命終息曲線に及ぶ（一）」（下沢瑞世）に、「哲学者の材能態度」といった分節があり、ヨーロッパと日本の思想家（伊藤に斎、荻生徂徠）らの身体―勢力―運動―知的反応―感情的反応―能動性反応などについて記されている。ヘーゲルについては左記のようにある。

ヘーゲル（一）短小（背がひくく、小さい）にして健康良好なり。（二）齡未だ弱冠を越えずして老人の綽名を冠せらる。（三）発音平板にして高き響なし。（四）思索力に勝る。（五）独断に富む。（六）結論的能力、定義能力に富む。（七）静穩沈鬱情調にして。（八）中年後より怒り易しき（やすい）傾向あり。（九）堅忍不拔なり（つらいことに負けず、がまん強い）。

『倫理講演集』（第一七三号、大6・1）の「独逸哲学と欧州大戦乱（二）」（中島力造）は、ドイツ哲学が第一次世界大戦「一九一四・七―一八・一一まで」と関係があるかどうか、諸家の意見の相違を紹介しながら、所感をのべている。

カント、フィヒテ、ヘーゲル等が唱道したる唯心論を指して独逸哲学といふならば、それは決して今回の戦乱の原因にはなつて居らぬ……

同論文のつづきは、(同誌第一七四号、大6・2)に掲載された。今回はドイツ哲学が大戦の原因になっているといった——アメリカの哲学者デューエ教授の反対論を紹介している。

ヘーゲルは考えた。戦争は国家が発展するうえで避けられぬ。それによって人類の腐敗が防止できる。国際法は正当な法律ではない。それは国家が交際するうえでの慣例にすぎない。絶対の最高実現である国家に反対するのは、存在する理由をもたぬ。デューエ教授は、今回の戦争の淵源は、こういったドイツ哲学にあると考えた。

淀野耀淳著『認識論之根本問題』(日本学術普及会、大正6・3)の「第四章 認識の形式」の第五節は、ヘーゲルの範疇論はんちゆうろん、第六節はヘーゲル以後の範疇論である。いずれも軽くふれたものである。範疇は、實在または思惟のもっとも普遍的、基本的な概念をいう。

カントの範疇論に次で近世に於て著名なる範疇論は、ヘーゲルの範疇論である。

安部能成よしなり(一八八三—一九六六、大正・昭和期の教育者・哲学者)が著わした『西洋近世哲学史』(哲学叢書第十編、岩波書店、大正6・4)は、おもにウィンデルバンドの近世哲学史によって書いたものという(「凡例」)。「第四章 カント及び独逸理想主義」の第五節は、ヘーゲルの章節である。論者によると、ヘーゲルが終始問題にしたのは、世界をもって神的精神(すなわち絶対的精神)の必然的發展と解したことである。

觀念論的形而上学の完成者はヘーゲルである。

『哲学研究』(第二卷・第一四号、大正6・5)の「ヘルマン・ロッツェ」(朝永三十郎)に、ヘーゲルの名が散見する。ロッツェを哲学の研究に導いたものは、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルなどの思弁的唯心論派の哲学であった。かれはことにヘーゲルから思想内容において大きな感化をうけた。

殊に初期の著作（「小形而上学」）に於ては、ヘーゲルの影響が著しく認められる。

西田幾太郎著『現代に於ける理想主義の哲学』（弘道館、大正6・5）は、京大における特別講演や『哲学研究』などに発表した論文などをまとめた一書としたものである。「第一部 第四講 理想主義哲学の史的概観」に、ヘーゲルのことが出てくる。

ヘーゲルに至つては、自然も精神も共に理性の発展であつて、世界は此理性が弁証的方法によって自らを發展したものに外ならぬ。（七六頁）

『倫理講演集』（第一八三号、大正6・11）の「独逸哲学と欧州大戦乱（十）」（中島力造）は、ヘーゲルの哲学思想が、第一次世界大戦といかなる点でどんな関係があるかを明らかにする準備段階として、この稿では、ヘーゲルの略伝、ヘーゲル哲学体系とその著述、ヘーゲルの権利哲学、ヘーゲル思想とヘーゲル以前の思想との関係などについて記している。論者によると、ヘーゲルの哲学書の難解さといったら古今無双だという。

ヘーゲルの哲学は、カント哲学に源流があり、フィヒテ、シェーリングの哲学をへて發展していったものである。ヘーゲル哲学は、

カント哲学の唯心論的方面の発達したるものであるというて宜しいのである。

『倫理講演集』（第一八四号、大正6・12）の小論「独逸哲学と欧州大戦乱（十一）」（中島力造）は、ヘーゲルの権利哲学（広義の倫理哲学）とくに抽象的すなわち客観的意志論（権利）について論じている。論者によると、ヘーゲルのばあい、権利があつて道徳があるという。道徳が發展して社会道徳があらわれてくるという。またヘーゲルの国家道徳は――、

今次の戦乱と直接間接の深き関係を有する国家至上説である。

という。

ヘフディング著
北畠吉詔

『近世哲学史 下巻』（早稲田大学出版部、大正6・12）の「第八編 浪漫主義の哲学」の第三章（二一〇～二三四頁）は、ヘーゲルの章節である。ヘーゲルの特性および伝記、弁証法、組織、法律哲学、宗教哲学などが論じられている。著者によると、ヘーゲルの著作をひろげて、まず読者をおどろかすのは――、

彼の説明の抽象的性質と、更に彼が使用してゐる幾多の術語とである。

田辺元（一八八五～一九六二、大正・昭和期の哲学者、京大教授）は、『哲学研究』（第三巻・第二四号、大正7・3）に、「独逸唯心論に於ける哲学的認識の問題（完結）」を寄せた。論者によると、ヘーゲル論理学の特徴は、その弁証法にあるという。論理は意味の自己発展という。

哲学者が自ら弁証的運動を行って知る所が、即ち理其物の発展なのである。此処に論理学の認識の特殊性が存する。ヘーゲルの論理学は思惟する主観無き理其物の開展である。

『論理講演集』（第一八八号、大正7・4）の「独逸哲学と欧州大戦乱（十二）」（中島力造）は、ヘーゲルの権利哲学の第三編すなわち社会倫理について論じたものである。論者によると、この社会倫理のなかに、ドイツの国家至上主義や軍国主義の趣旨がふくまれているという。ヘーゲルは上述の国家論を完成するために、

歴史哲学を著して 独逸国家の使命に就て論述して居るのである。

という。

『神学之研究』（第九巻・第六号、大正7・9）の「神学の概念」（紀平正美）に、ヘーゲルのことが出てくる。論者によると、神学とは神についての学問であるという。キリスト教の神学だけが唯一の神学ではなく、世界の各宗教に、それぞれ神学がある。

ヘーゲルは、哲学のうえに信仰を確立しようとしたし、

彼の理性主義によつて、全くキリスト基督教の精神を理性化（概念化）してしまった。

『東洋哲学』（第二六篇・第一号、大正8・1）の「独逸の興亡・新生と独逸哲学との関係（上）」（下沢瑞世）において、論者はこんなことをいっている。ドイツは侵略主義、武断主義、墮落的軍国主義を体现して、みずから自滅した、と。ドイツ哲学の背景と一二〇〇億ドルの借金を有し、一年に六〇億ドルの利子を払わねばならぬ国になった、と。

ドイツの国こく是すなわち軍国主義の二大源泉は、カントとゲーテである。前者は「義務」（各個人の義務と国家にたいする国民の義務）の学説をとえ、後者は「自己修養」の思想を説いた。

プロシア王国の標置した義務の高い見解と帝王政治の概念は、ヘーゲルの思想に近似する点があった。

尼子止編『最近哲学の進歩』（大日本学術教会、大正9・3）は、哲学を専門とする学者が、各部門について執筆したものであり、総括的な書物である。ヘーゲルが登場するのは、

- (一) 宗教哲学の現在将来……文学士 鈴木宗忠
- (二) 最近のカント哲学……文学士 鈴木俊行

である。カント以後いまにいたるまで、宗教の哲学的論議に関して、哲学史上に盛名をはせたのは、――

シユライエルマツヘルとヘーゲルとである。此二人は、カントと共に、宗教哲学の三大古典家と称せられる。

という。ヘーゲルによると、絶対は理性であるから、世界は理性の論理的発展だということ。また――、

ヘーゲルによれば 哲学は絶対を論理的に発展させて世界を解釈するものである。

帆足理一郎（一八八一―一九六三、大正・昭和期の哲学者、早大教授）が執筆した『哲学概論』（洛陽堂、大正10・3）は、著者の人生哲学をのべたものでなく、哲学研究を志す若者のための入門書であるという（「序」）。本書の核となったのはワセダにおける講義であった。

ヘーゲルが姿をみせるのは、「第四章 形而上学 第二編 実体論」においてである。ヘーゲルはシェーリングがそうであったように、唯一の根元（おおもと）から、いっさいの自然現象を説明しようとした。

十九世紀の哲哲ヘーゲルは スピノヅァ以来 此種の一元論を大成した人である（二三五頁）。

ヴィンデルバンド著 『十九世紀独逸思想史』（岩波書店、大正10・7）は、ヴィルヘルム・ヴィンデルバンド（一八四八―一九一五、ドイツの哲学者、吹田順助訳）

ハイデルベルク大教授）の述作『十九世紀のドイツの精神生活における哲学』を和訳したものである。このなかにヘーゲルの名が散見する。

ヘーゲルが、自然は精神の別荘である（一〇一頁）

といったとすれば、フォイエルバハ（一八〇四―七二、ドイツの哲学者。ヘーゲル左派の代表的思想家）にとって、精神こそ自然の別荘であった。ヘーゲルはシェーリング（一七七五―一八五四、ドイツの哲学者、のちベルリン大教授）よりも五歳年長であったが、その影響のもとに育った。

はじめから
始は却てセリングの思想に従ひ 深く希臘^{ギリシャ} 羅馬^{ローマ}の歴史及び法律を研究し、其れにて得たる知識を以て、セリング思想の解説をなし得たりき。(三四八～三四九頁)

『法学協会雑誌』(第三九巻・第九号、大正10、何月号に掲載されたか不明)の「雑録——新『ヘーゲル』派ノ法律哲学(二完)」(木村亀二)は、単独論文である(一四四～一六二頁)。法律哲学(法哲学)とは、哲学者の眼をもってみた法律のことのようである。それは法律に属し、しかも同時に哲学的学問を構成しているという。

ヘーゲル学徒は、その師ヘーゲルの歴史的精神をうけて、法律の歴史的研究に大いに貢献したが、他方それまでなおざりにしてきた「法律ノ哲學的省察ヲ新ニ發展セシムルコト」が課題としてのこされている。

大関増次郎訳『カント哲学批判』(大同館書店、大正11・3)の「第三章 カント以後の哲学の進化過程」に、ヘーゲルの名が散見する。ヘーゲルがベルリン大学において教授の職をえ、その進路を完成したのち、

シヨペンハウエルは ヘーゲルに対して最も憤怒の極に達してをつた。

紀平正美著『哲学叢書 第一編 認識論』(岩波書店、大正11・9)に、ヘーゲルの名がちらほら見られる。

極端なる理想論者ヘーゲルに於ては、哲学は文字通りの意義で反省(Nach=Denken)である。

紀平正美著『行の哲学』(岩波書店、大正12・1)は、著者によると、人としての行為の意義を解明しようとしたものという。同書の「第九章 カントよりフィヒテ、セリング、ヘーゲルへ」に、ヘーゲルのことが引きあいに出されている。

金子馬治著『現代哲学概論』(東京堂、大正12・2)は、十九世紀までの哲学を叙述した旧版に、あたらしい二十世紀哲学を解説したものとい

う。「第七章 近代理想主義の淵源」の第五節において、ヘーゲル哲学にふれている。

ヘーゲルの哲学は、非凡な才能を以て、これまでの理想主義の脈をば、一層組織的に又一層系統的に、一大系統のもとに組織し 完成したものと云はれる。

著者によると、ドイツ理想主義哲学におけるヘーゲルの地位は、ギリシャ哲学におけるアリストテレスの地位に酷似しているという。稀有な総合的手腕がどこまでもヘーゲルの天分であった。

『倫理講演集』（第二五〇号、大正12・6）の「創造的進化と価値の世界」（帆足理一郎）において、論者はヘーゲルの進化の観念、宇宙の観念などについて語っている。ことに宇宙については、――

宇宙全体を一個の完成組織即ち絶対組織の中に抱擁したのでありまして 絶対と云ふ不変不動の見地から見ると、宇宙は既に完全である、……

という。

『哲学研究』（第九巻・第九五号、大正13・2）に、「HegelのPhänomenologie des Geistes」（三土興三）が掲載された。論者によると、「ヘーゲルの精神現象学」が日本の学界であまり知られていないため、はじらいの気持をおさえつつ執筆したという。これはヘーゲルに関する単独の長編論文である（七八―一六一頁）。

精神現象学とは、精神の発展、顕現をいみするヘーゲルの哲学用語である。かれは人間が認識する過程を、意識による対象吸収の歴史とみなした『哲学小辞典』（岩崎書店、昭和22・7、三三八頁）。

本稿においては、――对象的意識――知覚の立場――力と悟性、現象と超感覚的世界――自覚――自覚独立と不独立――自覚の自由――理性などについて論じられている。この論文はつかみどころがなく、晦渋である。

『思想』（第二九号、大正13・3）の「アリストテレスとヘーゲルとの推理図式に就て」（紀平正美）も、単独の論文である（二―二二頁）。本

稿は、アリストテレスとヘーゲルの断言的三段推理図のちがいについての論者の考えの一端を発表したものである。この論文も晦渋である。論者いわく。

余が研究の煩瑣（こまごまとし、わずらわしい）なる点は、一般の読者には興味のない事であるが故に、研究の結果のみを記すこととする。

『倫理講演集』（第二号・編之三、大正13・5）の「パピニと其人物評論」（岡田哲蔵）のなかに、ヘーゲルの名がみられる。ジョバンニ・パピニ（一八八一〜一九五六、イタリアの作家、文芸批評家）は、詩人・哲学者・科学者・神秘家・画家などについての人物評論を三冊あらわした。

- (一) 『二十四の頭脳』（24 Cervelli, 一九〇二年〜一九一二年までの文集）
- (二) 『たたきつぶし』（Stroncare, 一九一六年）
- (三) 『照明』（Testemonianze, 一九一六年）

これらの三書は、いずれも二十四名の人物について評しているのだが、第一の書『二十四の頭脳』に、ヘーゲルが顔をだしている。

哲学者は英のバークリ、独のヘーゲルとニーチエ、英のスペンサー（後略）……

『我等』（第六巻・第五号、大正13・6）の「弁証法とマルキシズム」（嘉治隆一）において、論者はつぎのように論じている。フォイエルバッハ（一八〇四〜一八七二、ドイツの哲学者）によってヘーゲルの欠点を教えられたカール・マルクス（一八一八〜一八八三、ドイツの革命家・哲学者・経済学者、ヘーゲル左派に属する）は、十八世紀のフランスでおこなわれた啓蒙哲学としての唯物論を発展せしめ、自己の唯物哲学の基礎をつくった。また――、

ヘーゲルの長所たる弁証的論法を採って 自然及歴史の発達の上に現はると進化と革命との説明に利用したのである。

『哲学研究』（第九卷・一〇一号、大正13・8）の「ヘーゲルの歴史哲学」（関栄吉）は、論者によると、ヘーゲルの歴史哲学すなわち世界歴史の哲学についての梗要をのべたものという。ヘーゲルによると、歴史には三つの種類がある。

- (一) 原本的歴史
- (二) 反省的歴史
- (三) 哲学的歴史

そして歴史哲学が対象にするものが、さいごの哲学的世界史であるという。

ニコライ・ハルトマン著
橋高倫一訳

『哲学方法論』（大村書店、大正13・10）に、ヘーゲルの後世にたいする意義のことが記されている。かれが後世にたいする価値は、その弁証法的図型に存するのではなく、かれが――、

大規模な体系概念概念系に基いて、大いにこれを概念的に深化したことに存するのである。（二二九頁）

『国家学会雑誌』（第三八巻・第一号、大正13・11）の「ヘーゲルの国家理念論の考察」（今中次麿）は、ヘーゲルに関する単独の論文である（二八～六六頁）。このなかで論じられているのは、――ヘーゲルの国家論の立脚地、その規範的、合理的、啓蒙的要素である。

ヘーゲルは、国家は理念である、といった。国家が理念である、というのは、国家が事実ではないことを意味するという。ヘーゲルにおいては、国家意志の専制的行為がじゅうぶんに許される。

彼は民主主権論を否認し、国家主権をとり、

その最終決定を君主の統一性にもとめたという。

児玉達童著『哲学概論』（大村書店、大正13・11）は、日本大学の講義で用いた草稿に加筆してなったものであり、初心者参考書や教科書になることを願った。本書において、ヘーゲルの名が散見する。カントは哲学を認識論にかぎったのであるが、カント哲学から出発した――

ヘーゲルの哲学がカントの思想を正当に発展せしめたものであるか、

まだ学界において定説がないという。

西山庸平著『哲学汎論』（聚英閣、大正13・11）は、平易に、哲学上の史実を、第三者の立場から手っとり早く紹介したものである。本書の「第三篇 實在論」の第七章に、ヘーゲルの弁証論が説かれている。著者によると、ヘーゲルは不世出（ふせいしゅつ）（世にまれな）の総合的天才であり、その規模堂々たる弁証法を完成したという。かれにとって思想とはなんであったのか。ヘーゲルは、――

一切の思想は、必ずその反対の思想を産む。

といったようだ。

加藤玄智著『東西思想比較研究』（明治聖徳記念学会、大正13・12）に、ヘーゲルの名が散見する。

フィヒテの主観的観念論、シェリングの客観的観念的を更に統一して 広大な哲学組織を造つた学者が独逸に出でた、それは名高きヘーゲル。

マルクス著「ヘーゲル法理学批判」（『我等』第六巻・第一一号、大正13・12）は、マルクスが執筆した翌年――すなわち一八四四年、パリにおい

て発行していた『独仏年誌』に発表した論文（ただし序論でおわった）の邦訳である。

久留間鯨造（一八九三～一九八二、昭和期の経済学者、大原社会問題研究所をへて法政大教授。マルクス経済学の理論的権威者）は、『大原社会問題研究所雑誌』（第二巻・第二号、大正13・12）に、「ヘーゲルの哲学史とマルクスの経済学史」を寄稿した。これはヘーゲルに関する単独論文である（一二五～一五六頁）。本稿は——ヘーゲルとマルクス——マルクスの経済学における経済学史の尊重——哲学史に関するヘーゲルの見解——経済学史に関するマルクスの見解——から成る。

マルクス研究者は、マルクスがヘーゲルから大きな影響をうけたというが、論者によると、影響の中味については、従来じゅうぶんな考慮が払われてこなかったという。たとえば、マルクスはヘーゲルから弁証法を継承したが、その弁証法は、ヘーゲルにおいて神秘化し、さか立ちしていたのである。マルクスは、そのさか立ちの弁証法をてん倒することによって“合理の核心”を発見したという。

しかし、論者によると、合理の核心とは、マルクスの唯物的弁証法（＝唯物史観）であるが、“てん倒”は何を意味するものかはっきりしないようだ。

『講座』（大正13、何月号か不明）の「ヘーゲルの社会哲学」（関栄吉）は、ヘーゲルに関する単独論文（一～二二頁）である。論者がこの論文で考察しようとしたのは、法哲学全般についてでなく、ヘーゲルの社会哲学（ヘーゲルのばあい“道德哲学”を意味する）である。ヘーゲルにおいては、——

モラール・カント、ザツ・カント
道德と倫理とは普通には同意義に用ゐられてゐるが、ヘーゲルのばあい、本質的に異なるのである。

『講座』（大正13、何月号か不明）の「ヘーゲルの美学」（鼓常良）は、ヘーゲルに関する単独の長編論文（一～五六頁）である。論者によると、

彼（ヘーゲル）の美学は、その体系の組成要素であると同時に、この部分のうちにまた全体が顕現してゐるのも勿論である。

という。

『思想』（第三九号、大正14・1）の「含蓄から顕現へ」（木村素衛）において、論者は含蓄的全体から顕現への必然的道程について、ヘーゲルが示したものの意味を考えてみたいとおもったという。

村田豊秋著『^{近代}哲学大集成』（中央出版社、大正14・1）は、大著（六三〇頁）である。近代ヨーロッパにおける大物哲学者を、ほとんど網羅している。第七章は、ヘーゲルの哲学である（一五六―一九二頁）。

絶対的観念論——論理的唯心論——止揚と弁証的過程——矛盾原理——弁証的方法——論理哲学——自然哲学——精神哲学——絶対的精神——分裂と反対——ベネケの哲学などについて論じている。

所謂^{いわゆる}絶対的観念論を鼓吹^{こすい}して、覇^はを哲学界^{しやうがく}に称^{しょう}したものを、ヘーゲル其^その人^{ひと}とする。

『改造』（新年号、大正14・1）に、ハインリヒ・リッケルト（一八六三―一九三六、ドイツの哲学者、ヴィンデルバンドの弟子）の論文「如何にして国家学は学として可能なるか——フィヒテ及びヘーゲルに関する一研究」の邦訳が掲載された（一五五―一七五頁）。学的国家学者として、フィヒテとヘーゲルとの違いは、後者が——

現在実在する国家に対し、何ら命令^{めいれい}を与へ、政治上の要求をなし、成立する国家状態の改善のために何ら提案をなさんとするものではなかった。

ことである。

高木八太郎著『東西思潮講話』（共益社、大正14・2）は、大別すると、「上 東洋思潮」と「下 西洋思潮」からなるが、「ヘーゲルの哲学」の章節があり（六五五―六六一頁）、——ヘーゲル哲学の特色——汎理性論——弁証法——哲学の三部門——論理学——自然哲学——精神哲学などについて記されている。著者によると、ヘーゲルには組織的体系的な天賦の才があり、理想主義哲学を一大系統のもとに組織し、完成した。そしてドイツ理想主義におけるヘーゲルの位置は——、

希臘哲学に於けるアリストテレスの位置に比較される。

という。

『倫理講演集』（第二六八号、大正14・2）の「ヘーゲルの宗教論及び宗教と国家との関係論（一）」（紀平正美訳註）には、こんなことがみられる。

宗教を若し国家的生活より離せば、無内容となり、例へば神の如きものも亦抽象的な極限概念としてのみ残り、単なる彼岸の幻影たるに止まらん。

なお、この訳註は、第二六九号（三月）をもって完了している。

『外交時報』（第四八四号、大正14・2）に、紀平正美と小野正康の共訳による「ヘーゲルの国家論」（一九〇三八頁）が掲載された。訳者によると、市民社会をそのまゝ大きくしたのが西洋の国家だという。しかし、日本の国家とその趣（内容）を異にしている。この区別を知らない学者は、わが国家にあわない議論をし、国民の精神を混乱させているという。

国家統治の意義、憲法の精神、国体の概念、戦争の意味、国際法について、日本人はヘーゲルの議論を聴く必要があるという。ヘーゲルは、わが国家の意義を、哲学的に証明してくれたようなものという。

本稿にのせたものは、ヘーゲルの『哲学的諸科学集成』（*Encyclopädie der Philosophischen Wissenschaften im Grundrisse*）の五三五節～五四七節までの訳である。

国家は、自己意識的 人倫的実体である。

国家は一の特殊の個体である。

（国家は）現実態としては、「一個」の個体である。

橋本文書『哲学の要領』（宝文館、大正14・3）は、第一篇 哲学の概念 第二篇 本体論 第三篇 認識論 第四篇 価値論 綜収結などについて述べている。

じつに総合的・組織的天分にめぐまれた、

ヘーゲルは主観・客観を総合した絶対的唯心論を唱へた。

という。

『三田学会雑誌』（第一九巻・第三号、大正14・3）の「マルクス社会学説の起源なほ井に之に対するヘーゲル、フォイエルバッハ、シュタイン及びブルードンの影響」（平井新）は、キール大学教授ゲオルク・アドラー（一八六三―一九〇八、ドイツの社会経済学者。マルクスの学説を批評し、国際労働法を提唱）の“*Die Anfänge der Marxschen Sozialtheorie und ihre Beeinflussung durch, Feuerbach, Stein und Proudhon*”を反訳したものである。

訳者によると、この論文はこれまで閑却せられてきたマルクスの社会学説の研究に新生面をひらくものであり、マルクス研究者によってよく引用されているという。

アドラーによると、マルクスとヘーゲルの関係を伝える確実な典拠は、『資本論』の「序文」だという。

マルクス対ヘーゲルの関係は同時に従属的であり、対立的である。

という。そこでこの従属的ならびに対立関係はどこにあるかを決定するために、ヘーゲルの弁証法の本質を確定せねばならぬ、と述べている。

市川一郎訳著『『高尚なる理論を平易に論議せる』哲学概論』（大同館書店、大正14・4）は、Furman 大学の哲学教授 Fletcher の著述を反訳したものである。古代から現代までの哲学を網羅しているが、「第四六節」は、ヘーゲルの章節である（二五九―二七四頁）。このなかで説かれているのは、実在の本質——究極実在・絶対——絶対は真の普遍——知識と実在——主観客観の同一——自我——結論である。著者によると、ヘーゲルの思想は、ソクラ

テス、プラトン、アリストテレスらの見解を包括し、その体系は、――

一般に絶対的観念論と称せられてゐる。

という。

『神学研究』（第一七卷・第二号、大正15・4）の「ヘーゲルの基督教の本質」（今井新太郎）において、論者はヘーゲルのキリスト教観をつぎのように要約した。礼拝者の実現した団体が教会である。教理は保持されねばならない。その宣伝は教会の本質的な運動である。

ヘーゲルは教会には思想展開の全過程を包含するものと見た。

という。

『思想』（第五六号、大正15・6）の「ヘーゲルの学位論文についての穿鑿」（矢崎美盛）は、論者によると、思想上の論文ではなく、事実について調べたものである。ヘーゲルのチュービンゲン時代の学位論文に関する研究は、かれの思想を正しく理解するうえで、重要でないとはいえない、という。当時、ヘーゲル自著の二つの研究論文の所在は不明であった。

『宗教研究』（第三卷・第一号、大正15・7）の「ヘーゲルの宗教哲学」（石津照璽）は、ゲオルク・ラッソン出版の『ヘーゲル全集』ちゅう――第十二卷「宗教哲学講義のうち――第一部「宗教の概念」（*Begriff der Religion* 326s. Leipzig 1925, *Der Philosophische Bibliothek Band 59*）を解説したものという。ヘーゲルによると、――

宗教も哲学も、その対象とする所は 同じく「絶対」客観的真理即ち神である。

独逸テオバルト・チーグレル著
伊藤吉之助、飯田忠純共訳

『独逸思潮史 上』（国民図書株式会社、大正15・7）の第五章に、ヘーゲルの法哲学論がのっている。題して「ヘーゲ

ル法理学の勝利」(一九三〜二四一頁)。このなかで論じられているのは——個人主義的国体観——社会契約説——浪漫主義の国家観——ヘーゲルの法理学——言語学と歴史学などである。ヘーゲルの国家観を法理学的にかんがえたとき、——

国家は法律の中に自由意志が存在する限り法治国である。

という。

加藤玄智著『東西思想の比較研究』(京文社、大正15・9)の「第二編 欧州思潮の主要素と其^{その}史的研究法」に、カントの継承者のひとり——ヘーゲルのことがすこし出てくる。

此のフイヒテの主観的観念論、シエリングの客観的観念論を更に統一して広大な哲学組織を造つた学者が独逸に出た。それは名高いヘーゲルである。
(一二二頁)

浜尾俊治著『^{俗通}哲学講話』(大盛堂書店、大正15・10)の「第一編 哲学史 第三章 近世哲学 カント以後の哲学」に、ヘーゲルのことが出てくる。ヘーゲル哲学の概要を手みじかに要約している。ヘーゲルにとって、——

一切の事物は、皆この理性の発現に外ならない、

という。

土田杏村^{つちだ きょうそん}(一八九一〜一九三四、大正・昭和期の思想家。晩年、国家主義にかたむいた)は、『社会科学』(十月特輯、大正15・10)に、「ヘーゲルとマルクス、レニン^{レニ}ンの弁証法的唯物論」を寄稿した(一八七〜二一八頁)。論者は、マルクス主義における唯物史観説を、認識論的の意味において容認した。それは社会的経験的法則としては、まったく真であった。ある社会において生きる各個人が、うごく傾向を社会的に、平均的

に表現した法則として、「唯物史観説は否定せられ難い」ものであった。

斎藤 要著『世界哲学史年表』（聖山閣、大正15・11）は、東西約四百名の哲学説の概略とその学説の系統をのべたもので、「第二編 西洋近世哲学史 カント以後の近世哲学」に、ヘーゲルのことが出てくる。すなわち――、

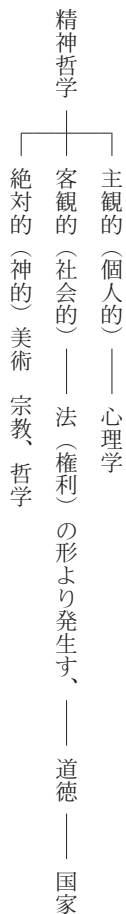
ヘーゲル、シエリングにおけると等しく哲学の主要問題として絶対者を論ず。

絶対者は進行である、哲学は天才的直観にあらず（学問にして詩歌にあらず）――絶対者は論理的進行なり。

論理的唯心論又は汎理論――凡て在るものは合理的ならざるべからず。

思想開展の法則、正――反――合、（弁証法）

論理学は範疇の学問、範疇は悟性作用の形式（カント）のみでなく世界思想開展の形式。



ヘーゲル主義に反対せるもの、（特に一元論、唯心論に――）ヘルバルト、シヨペンハウエル。

堺利彦（二八七〇～一九二三、明治から昭和期にかけての社会主義者。終始、社会主義者の組織化、まとめ役として活躍した）の小著『弁証法的唯物論』（無産社、大正15・12）は、「無産社パンフレット」のうちの一冊である。このなかに、弁証法や唯物論の歴史、唯心論の発生と発達、唯物論の全盛、ヘーゲル哲学などがやさしく説かれている。論者によると、フランスの唯物論と相ならんでドイツの新哲学が勃興したという。その哲学は、ヘーゲル哲学にいたって、その頂点に達した。ヘーゲルの弁証法の考え方は――、

一切万物が、絶えず運動し、変化し、発達するものと見られた。

注

- (1) 佐藤慶二著『哲学新講』（同文館、昭和十四年五月）、一三〇頁。
- (2) 桑木殿翼『明治の哲学界』（中央公論社、昭和十八年三月）、一八頁。
- (3) 大久保利謙編『西周全集 第一卷』（日本評論社、昭和二十年二月）、二八頁。
- (4) 山口誠一「日本ヘーゲル研究史編纂への歩み」（『法政哲学』第九号所収、平成25）、四六頁。
- (5) G. H. Lewes: *A Biographical History of Philosophy*, George Routledge & Sons, Limited, London, 刊行年不詳、六一二頁。
- (6) 同右。
- (7) 大塚三七雄著『明治維新と独逸思想』（日独出版協会、昭和十八年二月）、二二一頁。
- (8) 「鉤玄」とは、深い意味や道理を引きだして悟る意。
- (9) 「涓滴」とは、しずくの意。
- (10) 注(7)の二二八頁。
- (11) 「忍月居士」とは、石橋忍月（一八六五～一九二六、明治期の評論家、小説家）のこと。
- (12) 「天籟子」とは、詩文にすぐれた人の意。

一 本稿で取りあげたヘーゲル関連文献資料名一覧表

〔明治期〕

西周

「生性発蘊」（稿本、明治6・6）

西周

「人生三宝説 一」（『明六雑誌』（第三八号所収、明治8・6）

井上哲次郎、和田垣謙三、国府寺新作、有賀長雄編

『哲学字彙』（東京大学三学部、明治14）

「道徳ノ説」（『東京学士会院雑誌 第四編 自明治十五年一月至全 十二月』、明治16・3）

井上哲次郎著

『西洋哲学講義 卷之一』（発兌人 阪上半七、明治16・4）

〃 著

『倫理新説』（出版人 酒井清造、明治16・4）

西村茂樹

「心学畧伝」(掲載誌不詳、明治16・5?)

加藤弘之

英国レウエス氏原著
和田龍次郎訳述

「自由史 草稿第四」(『加藤弘之文書 第一巻』所収、同朋舎出版、平成2・8)

『哲学通鑑』(石川書房、明治17・1)

西周

「論理新説」(『東京学士会院雑誌』所収、明治17・5)

『真理一斑』(警醒社、明治17・10)

上村正久著

哲学教授 ぼうえん
哲学専修 有賀長雄 訳解

『原解 近世哲学 一巻』(弘道書院発兌、明治17・11)

竹越与三郎著

『独逸 哲学英華 完』(報告堂、明治17・11)

加藤弘之

「何ヲカ学問ト云フ」(『学芸志林』第一六巻所収、明治18・5)

末広鉄腸著

『二十三年未来記』(発兌人 高橋平三郎、明治19・6)

中江兆民著

ハルバート・スベンサア原著
英字譯得業生 佐竹時之助訳

『理学鉤玄 全』(集成社、明治19・6)

「哲学ノ定義」(『中央學術雑誌』第三二巻・第三三巻所収、明治19・7)

井上円了著

『哲学要領 前編』(哲学書院、明治19・9)

井上円了著

『哲学要領 前編』(四聖堂蔵版、明治19・9)

三宅雄二郎

「近世哲学(接前号)」(『中央學術雑誌』第四一号所収、明治19・11)

浮田和民

「英雄崇拜論」(『国民之友』第六号所収、明治20・7)

外山正一、
加藤弘之他

『哲学汎論』(哲学書房、明治20・10)

「西洋哲学小史(接前)」(『哲学会雑誌』第三三号所収、明治21・2)

西周

「論理新説」(『日本大家論集』第九編所収、明治21・2)

嵯峨のやおむろ著

『無味気 全』(駸々堂本店、明治21・4)

志賀重昂

「山和民族の潜在力」(『日本人』第七号所収、明治21・7)

「理学宗の駁撃」(『日本人』第八号所収、明治21・8)

井上哲次郎

- 「独逸学方針」〔『日本大家論集』第一五編所収、明治21・8〕
「吾輩ノ安楽国」〔『学』第一号所収、明治21・8〕
「東京輿論新誌」〔『学』第五号所収、明治21・11〕
「同志社大学設立旨意書を讀で所感を記す」〔『日本人』第一六号所収、明治21・11〕
「東洋 大家論集 合本第二集」〔『暁鐘館』明治21・11〕
「維納府に於て鳥尾中将と共にスタイン氏を訪ひ東西哲学の異同を論ず」〔『東洋 大家論説 合本 第二集』暁鐘館、明治21・11〕

ルートヴィヒ・ブッセ

- 「雜報」〔『カルル・フォン・プラントルの訃報』〔『哲学会雜誌』第二三号所収、明治21・12〕
「日本哲学ノ現況」〔『哲学会雜誌』第二七号所収、明治22・3〕

三宅雄二郎著

- 「道德哲学論」〔『学林』一卷一号所収、明治22・10〕
『哲学涓滴』完〔『文海堂』明治22・11〕

谷本富とまり

- 「独逸哲学ノ状景」〔『学林』第一号所収、明治22・10〕

リヨースレル述

- 「独逸学方針」〔『学林』第二号所収、明治22・11〕

谷本富

- 「独逸哲学ノ状景」〔『学林』第二号所収、明治22・11〕

丸山通一

- 「森林太郎君に横槍を呈す」〔『女学雜誌』第一六六号所収、明治22・6〕

村上専精著

- 「多学の弊へい乎、無学の弊」〔『国民之友』第六〇号所収、明治22・8〕
『日本仏教一貫論』〔哲学書院、明治23・1〕

- 「独逸哲学と英国哲学」〔『哲学雜誌』第三五号所収、明治23・2〕

- 「神の性質を論ず」〔『福音週報』第四号所収、明治23・4〕

- 「ロシア哲学の概況」〔『哲学会雜誌』第三八号、明治23・4〕

- 「文学者の技倆」〔『日本之文華』第八号所収、明治23・4〕

森鷗外

大西祝

中島力造

清沢満之

金井延

尾原亮太郎

星野天知

大西祝

得能文

夏目漱石

「流行に解脱す」(『少年園』第四〇号所収、明治23・6)

「アリストオテレスと忍月居士と」(『文学評論』志からみ草紙』第一〇号所収、明治23・7)

「答忍月論幽玄書」(『文学評論』志からみ草紙』第一四号所収、明治23・11)

「独逸の審美学」(『学林』第一二号所収、明治23・12)

「ヘルバルト、スベンセル」(『国民之友』第一〇四号所収、明治23・12)

「倫理攷究ノ方法并目的」(『哲学会雑誌』第四七号所収、明治24・1)

「ヘーゲル氏弁証法」(『哲学会雑誌』第四八号所収、明治24・2)

「宗教哲学」(真宗大学寮 明治24・9述)

「スタイン先生の一週忌」(『六合雑誌』第一三二号所収、明治24・12)

「実験心理学派学説一班」(『教育時論』第二四七号所収、明治25・1)

「莊学発蘊」(『城南評論』第一号所収、明治25・3)

「山房論文 其十一 早稲田文学の没却理想」(『文学評論』志からみ草子』第三〇号所収、明治25・3)

「美とは何そや」(『早稲田文学』第一四号所収、明治25・4)

「老子を読む(上)」(『女学雑誌』第三二二号所収、明治25・4)

「一元論ト二元論」(『教育時論』第二五四号所収、明治25・5)

「形式的論理学ノ三段論法 因明ノ三支作法并 彌兌ノ帰納則ヲ論ス」[第一] (『哲学雑誌』第七卷・第六四号所収、明治25・6)

「三宅君の我観を読む」(『亜細亜』第五八号所収、明治25・9)

「文界 彙報 美学講義」(『早稲田文学』第二六号所収、明治25・10)

「文壇に於ける平等主義の代表者『ウォルト、ホイットマン』 Walt Whitmanの詩について」(『哲学雑誌』第六八号所収、明治25・10)

中島力造 「英国新カント学派に就いて」『哲学雑誌』第六九号所収、明治25・11

園田宗恵 「ヘーゲルの弁証法 (Dialektik) ト東洋哲学」『哲学雑誌』第六九号所収、明治25・11

「不知庵主人の文学の範圍及び定義を異む」『城南評論』第九号、明治25・11

「審美論 (其二)」『文学評論』第三八号所収、明治25・11

井上哲次郎 「詩歌改良の方針 (承前)」『国民之友』第一八二号所収、明治26・2

高橋五郎 「偽哲学者の大僻論」『国民之友』第一八五号所収、明治26・3

中島力造 「現今の哲学問題」『国民之友』第一八八号所収、明治26・4

「近代厭世哲学 (承前) —— ショッペンハウエルの厭世哲学」『青山評論』第三五号所収、明治26・4

北村透谷 「人生の意義」『文学界』第五号所収、明治26・5

「純美文学」『文学界』第七号所収、明治26・7

西村茂樹著 「読書次第」(博文館、明治26・7)

中島力造 「哲学とは何ぞや」『講演筆記』『教育時論』第三〇〇号所収、明治26・8

戸川秋骨 「ゲーテの小河の歌を読む」『文学界』第一一号所収、明治26・8

「哲学の必要 (承前)」『教育時論』第三〇七号、明治26・10

金子馬治 「希臘美学 —— プラトンの美論」『早稲田文学』第四九号所収、明治26・10

「哲学の必要 (承前)」『教育時論』第三〇八号所収、明治26・11

「ヘーゲル後ノ哲学」『教育時論』第三一〇号所収、明治26・11

「おも影 其一 (風潭)」『文学界』第二二号所収、明治26・12

すみづのや 「シヨオープンハウエル」『早稲田文学』第五〇号所収、明治26・12

「シヨウペンハウエル」『日本評論』第五八号所収、明治26・12

松本文三郎 「哲学攻究の方法」『教育時論』第三一五号所収、明治27・1

久津見息忠

戸川秋骨

小西増太郎

みすゞのや

森田久万人

洪江保著

ヘーゲル原著
渋谷保訳述

石川喜三郎

$$\begin{array}{c} \text{U} \\ \bullet \\ \text{K} \end{array}$$

中沢臨川

高橋五郎

石川喜三郎

浅井豊久

井上哲次郎

「ヘーゲル後ノ哲学」(『教育時論』第三一五号所収、明治27・1)

「変調論」(『文学界』第一三号所収、明治27・1)

「露国思想界の近況」〔六合雜誌〕第一五七号所収、明治27・1

「シヨオペンハウエル」(『早稲田文学』第五九号まで二回連載、明治27・1(2)

「ヘーゲル後ノ哲学」〔完〕（『教育時論』第三一八号所収、明治27・2）

「哲学の勧め」(『同志社文学』第七四号所収、明治27・2)

『哲学大意』全（博文館、明治27・2）

『歴史研究法』〔上下二冊本〕、博文館、明治27・2（3）

「有神哲学上の三大観念」(『心海』第七号所収、明治27・3)

「批評」(『国民之友』第二二三号所収、明治27・4——これは中江兆民の重訳『道徳学大原論前編』[一二三館蔵版]を書評したもの。原著者ショーペンハオアを“スコペノーエル”とフランス風と呼んだことを批判している)

「哲学に関する謬見」(『教育時論』第二二五号所収、明治27・4)

「カント前の美論の大勢」(『早稲田文学』第六一号所収、明治27・4)

「歴史の価値と厭世思想」『六合雜誌』第一六一号所収、明治27・5

「信仰の廓清」くわくせい（『明星』第五号所収、明治27・5）

「フ井ヒテ (Ficht) 〓 学者の天職」(『六合雜誌』第一六二号所収、明治27・6)

「有神哲学上の三大観念」(『心海』第一〇号所収、明治27・6)

「美の道德的価値を論じて文学者の責任に及ぶ」(『早稲田文学』第六六号所収、明治27・6)

「東洋哲学研究の必要を論ず（承前）」『青山評論』第四八号、明治27・6

「米国の新文豪ラルト、ホイットマン」(『早稲田文学』第六七号所収、明治27・7)

「我^{わが}世界観^{いちじん}の一塵」(『哲学雑誌』第九卷・第八九号所収、明治27・7)

高杉栄次郎

「唯物論に就いて」〔『青山評論』第四九号所収、明治27・8〕

「美海びかいの藻屑もくず」〔『女学雑誌』第三九一号所収、明治27・8〕

エドワード・ダウデン

「文学の解釈（真正の読書法）」〔『早稲田文学』第七一号所収、明治27・9〕

戸川秋骨

「罔影録もうえいろく」〔『文学界』第二二号所収、明治27・10〕

「木村（鷹太郎）氏の倫理学論」〔『教育時論』第三四六号所収、明治27・11〕

「老子哲学一班（前号の続き）」〔『心海』第一五号所収、明治27・11〕

小崎弘道

「欧米神学思想の現況」〔『六合雑誌』第一六八号所収、明治27・12〕

「露国思想界の顛末てんまつ（承前）」〔『心海』第一七号所収、明治28・1〕

鎌田亥四郎

「シヨオペンハウエルの厭世観」〔『九州評論』第二号所収、明治28・2〕

「露国思想界の顛末一班（承前）」〔『心海』第一八号所収、明治28・2〕

「露国思想界顛末一班」〔『心海』第一九号所収、明治28・3〕

「新年の新思想」〔『八紘はっこう』第一号所収、明治28・3〕

津田真道

「唯物論」〔講演筆記〕〔『東京学士会院雑誌』第一七編之四所収、明治28・4〕

「ハイ子きが事を記すしる（其壹）」〔『宇宙神教』第四卷・第一号所収、明治28・5〕

「島国習気じゅっけ」〔『太陽』第三号所収、明治28・6〕

「露国思想界の顛末一班（承前）」〔『心海』第二二号所収、明治28・6〕

坪内逍遙

「国文学の将来」〔『国学院雑誌』第八号所収、明治28・6〕

戸川秋骨

「特別寄書」〔『国民之友』第二五七号所収、明治28・7〕

「気焰何処きえんどこにある」〔『文学界』第三一号所収、明治28・7〕

「独乙ドイツに於ける将来の哲学」〔『心海』第二二三号所収、明治28・7〕

「哲学と神学の将来」〔『八紘』第四号所収、明治28・7〕

文科大學哲學教師
ドクトル フォン・コエーベル講
文學士 下田次郎訳

蔵原惟郭

鈴木大拙だいせつ

藤井健治郎

内村鑑三かんざう述

真岡湛海

三宅雄二郎

中島力造著

蟹江義丸

渡辺国武くにたけ述

松本文三郎講述

森鷗外(?)

井上円了著

津田真道

「希臘文學と哲學思潮」(『帝國文學』第三卷・第七号所収、明治30・4)

『哲學要領 全』(南江堂書店、明治30・6)

『哲學問答 全』(普及舎、明治30・7)

「天才に就いて」(『女學雜誌』第四五〇号所収、明治30・9)

「膨張的日本經國論」(『其二』)、『教育時論』第四三〇号所収、明治30・9)

「浮世鏡」(『新著月刊』第一卷・第八号所収、明治30・11)

「独逸哲學を論じて禅學に及ぶ」(『日本人』第五八号所収、昭和31・1)

「所謂宗教教育問題」(『太陽』第四卷・第三号所収、明治31・2)

「湖上詩人を憶ふ」(『帝國文學』第四卷・第二号所収、明治31・2)

『月曜講演』(警醒社、明治31・3)

「シエリングが文學美術に対する見地」(『帝國文學』第四卷・第五号所収、明治31・5)

「哲學者とは何ぞや」(『日本人』第六六号所収、明治31・5)

「列伝体西洋哲學小史」(富山房、明治31・6)

「韓図の美學(承前)」(『帝國文學』第四卷・第九号所収、明治31・9)

「風景と文學」(『太陽』第四卷・第一八号所収、明治31・9)

『禅機ト哲學』(鴻盟社、明治31・12)

『最近哲學史』(哲學館講義録 合綴第五号、明治31・?)

「審美新説」(『めさまし草 まきの三十五』所収、明治32・2)

『通俗講談 言文一致 哲學早わかり』(開發社、明治32・2)

「唯心論の十三」(『東京學士會院雜誌』(第二二卷・編之三)所収、明治32・3)

「兒童研究史に於けるフレーベルの位置(上)」(『教育時論』第五〇四号所収、明治32・4)

森林太郎編述
大村西崖

森鷗外

高山林次郎編述

井上哲次郎編

江藤桂華著

森林太郎著

高山林次郎

高山林次郎

中島力造著

三宅雪嶺^{せつれい}述

戸張信一郎

『審美綱領 上巻』（春陽堂、明治32・6）

『独逸大学制度（二）』（『世界之日本』第四卷・第二四号所収、明治32・7）

『審美新説』（『めざまし草 まきの三十九』所収、明治32・9）

『近世美学』（博文館、明治32・9）

『異軒^{いせん}論文初集 全』（富山房、明治32・12）

『美学大要』（新声社、明治33・2）

『審美新説』（春陽堂、明治33・2）

『美学上の理想説に就いて』（『哲学雑誌』第一五卷・第一五七号所収、明治33・3）

『問答』（『教育時論』第五四〇号所収、明治33・4）

『外山博士を憶^{おも}ふ』（『太陽』第六卷・第四号所収、明治33・4）

『学術史』（『太陽』第六卷・第八号所収、明治33・6）

『応問』（『哲学雑誌』第一卷・第一六三号所収、明治33・9）

『問答』（『教育時論』第五五九号所収、明治33・10）

『哲学定義』（『哲学叢書』第一卷・第一集所収、集文閣、明治33・10）

『ロツチエ氏の哲学』（『哲学叢書』第一卷・第二集所収、明治33・11）

『現今の哲学問題 全』（普及社、明治33・11）

『問答』（『教育時論』第五六四号所収、明治33・12）

『近世哲学史』（哲学館第十二年度 高等教育学科講義録、明治33・？）

『カントの教育説（上）』（『教育時論』第五六六号所収、明治34・1）

『ニーチエの宗教論』（『太陽』第七卷・第五号所収、明治34・5）

『フリードリヒ、ニーチエを論ず（承前）』（『帝国文学』第七卷・第六号所収、明治34・6）

- 浮田和民著 かずたみ 『帝國主義と教育』（民友社、明治34・8）
- 吉田熊次 『所謂新教育学とは何ぞや』（『東洋哲学』第八編・第九号所収、明治34・9）
- 井上哲次郎 『無神無靈魂説の是非如何』（『太陽』第八卷・第二号所収、明治35・1）
- 大塚保治 やすじ 『ロマンチックを論じて我邦文芸の現況に及ぶ』（『太陽』第八卷・第四号所収、明治35・4）
- 波多野精一訳 『プロテスタントの哲学者カント』（『東洋哲学』第九編・第五号所収、明治35・5）
- 正岡芸陽著 『英雄主義』（新声社、明治35・5）
- 中江兆民遺稿 『警世放言』（松邑三松堂、明治35・5）
- 元良勇次郎 もとらゆうじろう 『哲学の変遷と新系統』（『東洋哲学』第九編・第七号所収、明治35・7）
- 中島力造 『グリーンの倫理説を論評す』（『東洋哲学』第九編・第八号所収、明治35・8）
- 朝永三十郎編 ともなが 『哲学綱要』（宝文館、明治35・11）
- 朝永三十郎編 『学究漫録』（『精神界』第二卷一、二、三、四号所収、明治35・11）
- 桑木厳翼 げんよく 『評論の評論』（『太陽』第九卷・第一号所収、明治36・1）
- 桑木厳翼 『文学者としての高山（林次郎）君』（『追悼文』（『太陽』第九卷・第三号所収、明治36・3）
- 高山五郎著 『目的と手段』（再びミューヘッド氏 再びミューヘッド氏 倫理學書に就て）（『独立評論』第三号所収、明治36・3）
- 大西祝著 はしめ 『最新 一元哲学』（前川文栄閣、明治36・9）
- 大西祝著 『独断主義』（『東洋哲学』第一〇編・第一二号所収、明治36・12）
- 大西祝著 『西洋哲学史（下巻）』（警醒社書店、明治37・1）
- 上杉慎吉 しんきち 『哲学と倫理學との關係』（『東洋哲学』第一一編・第四号所収、明治37・4）
- 上杉慎吉 『文明の趨勢を論じて新時代の芸術に及ぶ（中）』（『時代思潮』第三号所収、明治37・4）
- 吉野作造 『国家學史上に於けるヘーゲルの地位』（『法學協會雜誌』第二二卷・第七号所収、明治37・7）
- 吉野作造 『ヘーゲルの法律哲學の基礎』（『法學協會雜誌』第二二卷・第九号所収、明治37・9）

古野作造著

朝永三十郎著

建部遯吾たけべとんご

紀平正美きへいせいみ
小田切良太郎 共訳

紀平正美

村上専精せんじょう

藤波一如

北沢定吉

北沢定吉著

加藤弘之

岩野泡鳴著いほぬめい

金子馬治うまじ

岡嶋誘著

『ヘーゲルの法律哲学の基礎』〔小冊子、全九六頁〕〔法理研究会出版、明治38・1〕

『哲学辞典 全』（宝文館、明治38・1）

『時代文学の変遷（二）』（『教育時論』第七一三号所収、明治38・2）

『莊子論（続）——第二節 終局の道に就て』（『東洋哲学』第一二編・第二号所収、明治38・2）

『ヘーゲル氏哲学体系』（『哲学雑誌』第二二六号所収、明治38・2）

注・これは本邦におけるヘーゲルの「哲学的諸科学大系梗概」（エンチクロペディ）の最初の翻訳（一二六節）であり、昭和二年「一九二七」まで断続的に掲載された。

『ヘーゲル哲学と其の翻訳とに就て』（『哲学雑誌』第二一八号所収、明治38・4）

『『ハイデルベルヒ』大学百年間の国法教授』（『国家学会雑誌』第一九卷・第六号所収、明治38・6）

『宗教ト哲学及ビ倫理ノ異同』（『人性』第一卷・第三号所収、明治38・6）

『空虚なる日本』（『時代思潮』第二〇号所収、明治38・9）

『人類と動物との分界線としての言語』（『東洋哲学』第一三編・第一号所収、明治39・1）

『哲学史の概念』（『東洋哲学』第一三編・第二号所収、明治39・2）

『哲学史綱』（弘道館、明治39・5）

『新哲学』（『口述筆記』（『人性』第二卷・第六号所収、明治39・6）

『神秘的半獣主義』（佐久良書房、明治39・6）

『文芸消息』（ハルトマンの死を伝えたもの）（『早稲田文学』第八号所収、明治39・8）

『宗教学概論』（『警世新報』第一〇一号所収、明治39・9）

『キヤーケゴールドの人生観』（『早稲田文学』第九号所収、明治39・9）

『宗教学概論』（『警世新報』第一〇三号所収、明治39・10）

『西洋哲学史』（博文館、明治39・11）

北沢定吉

「ハルトマン氏に就いて」『東洋哲学』第一三卷・第一〇号所収、明治39・11

「ハルトマン逝く」『哲学雑誌』第二三五号所収、明治39・?

「他力信仰と見神」『警世新報』第一一七号所収、明治40・5

北沢定吉
宮地猛男 共編

『哲学汎論』(弘道館、明治40・5)

紀平正美著

『論理学綱要』(弘道館、明治40・10)

金子馬治

「理想派文芸と人生発展の觀念」『早稲田文学』第二四号所収、明治40・11

南山

「プラグマティズムと新自由主義」『早稲田文学』第二五号所収、明治40・12

岡村司つかさ

『哲学小史』(有斐閣書房、明治41・1)

今福忍著

『論理学要義』(宝文館、明治41・1)

得能文

「文芸上の自然主義」『早稲田文学』第二七号所収、明治41・2

「近世の唯物論に就て」『東洋哲学』第一五編・第五号所収、明治41・5

「文芸界の趨勢——第二節 独逸の思潮」『太陽』第一四卷・第八号所収、明治41・6

島村抱月ほうげつ

「文芸上の自然主義」『早稲田文学』第二六号所収、明治41・7

戸水寛人とみずひろと

「Hegelノ学説」『法学協会雑誌』第二六卷・第八号、明治41・8 注・これはヘーゲルに関する単独論文。

夏目漱石

「三四郎」『東京朝日新聞』明治41・8から連載

戸水寛人

「ヘーゲルの哲学大綱」『東洋哲学』第一五編・第九号所収、明治41・9

白柳秀湖しろうやなぎしゅうこ著

『黄昏』(如山堂、明治42・5)

長谷川天溪てんけい

「二葉亭四迷子逝く」『太陽』第一五卷・第八号所収、明治42・6

元良勇次郎

「ヘーゲルの存在論に就て」『哲学雑誌』第二四卷・第二七二号、明治42・?

網島政治著

『欧州倫理思想史』(杉本梁江堂、明治42・10)

得能文

「哲学の進歩(講話の一節)」『東洋哲学』第一七編・第九号所収、明治43・10

吉田静致

桑木敬翼

森鷗外

西田幾太郎著

朝永三十郎

錦田義富

桑木敬翼

〔大正期〕

ルドルフ・オイケン原著
安倍能成訳

桑木敬翼著

久保良英
宇井伯壽 共訳

ドルトル ヤコビ

かのこぎかずのぶ
鹿子木員信

ロージャース原著
藤井健治郎合訳
北 吟吉

宮田修

宮地猛男著

紀平正美

「人格的唯心論に就て」〔『哲学雑誌』第二八五号所収、明治43・11〕

「現代哲学」〔『太陽』第一七巻・第一号所収、明治43・12〕

「食堂」〔明治43・12〕

『善の研究』〔弘道館、明治44・1〕

「シヨーペンハウエルの哲学」〔『倫理講演集』第一〇二号所収、明治44・2〕

「トルストイ伯の哲学無能論」〔『国民雑誌』第二巻・第六号所収、明治44・6〕

「民之声——新しければ真理なりと思ふ迷信」〔『国民雑誌』第三巻・第八号所収、明治45・4〕

「ギューヨーの道徳無義務論」〔『倫理講演集』第一一七号所収、明治45・5〕

「哲学と現代」〔『倫理講演集』第一一九号所収、明治45・7〕

『ルドルフ
オイケン 大思想家之人生観』〔東亜堂、大正元・10〕

『哲学綱要』〔太陽堂書店、大正元・12〕

『哲学概論』〔弘道館、大正2・1〕

「独逸現代の哲学思想」〔講演の翻訳〕〔『東洋哲学』第二〇編・第三号所収、大正2・3〕

「哲学の使命」〔『倫理講演集』第一三七号所収、大正3・1〕

『西洋哲学史』〔富山房、大正3・2〕

「宇宙に彷徨ふ現代思潮（下）」〔『向上』第八巻・第四号所収、大正3・4〕

『哲学とは何んぞや』〔往来社書房、大正3・7〕

「スピノーザよりヘーゲル」〔『東洋哲学』第二二編・第八号所収、大正3・8〕

朝永三十郎 『近世に於ける『我』の自覚史』(『倫理講演集』第一四四号所収、大正3・8)

征矢野雄著 『シヨウペンハウエルの研究』(東亜堂書房、大正3・8)

伊藤源一郎編輯

大西祝 『西洋哲学史』[第三・四卷](警醒社書店、大正3・10)

朝永三十郎 『思想上の国産推奨論に就て』(『倫理講演集』第一四九号所収、大正4・1)

〃

藤井健治郎 『独逸思想と軍国主義』(『倫理講演集』第一五〇号所収、大正4・2)

稲毛詛風著 『英独思想の特徴を論ず』(『倫理講演集』第一五一号所収、大正4・3)

富士川遊 『オイケンと現代思潮』(天弦堂、大正4・7)

稲垣末松 『加藤老先生の壽を祝す』(『東洋哲学』第二二編・第八号所収、大正4・8)

中島力造 『倫理上の根本問題(二)』(『東洋哲学』第二二編・第九号所収、大正4・9)

松下舜孝 『西洋諸国の学風を論じ 我国将来の学風に関して希望を述べ』(『倫理講演集』第一六三号所収、大正5・3)

朝永三十郎著 『Romanticの思潮』(『東洋哲学』第二三編・第五号所収、大正5・5)

フランク、シルリー氏原著
若守義孝訳述 『独逸思想と其背景』(宝文館、大正5・5)

『古代より 西洋哲学史』(目黒書店、大正5・9)
『材能態度の類型差異を論じ 生命終息曲線に及ぶ(一)』(『東洋哲学』第二四編・第一号所収、大正6・1)

中島力造 『独逸哲学と欧州大戦乱(一)』(『倫理講演集』第一七三号所収、大正6・1)

注・この論文は、十二回(第一八八号、大正7・4)で完結した。

淀野耀淳著 『認識論之根本問題』(日本学術普及会、大正6・3)

安倍能成 『西洋近世哲学史』(岩波書店、大正6・4)

朝永三十郎 『ヘルマン・ロッツェ』(『哲学研究』第二卷・第一四号所収、大正6・5)

西田幾太郎著 『現代に於ける理想主義の哲学』(弘道館、大正6・5)

中島力造

〃

ヘフディング
著北吟吉訳

田辺元
はじめ

中島力造

紀平正美

下沢瑞世

尼子 止編
つとむ

帆足理一郎著
ほあし

ヴィンデルバンド著
吹田順助訳

木村亀二

大関増次郎訳

紀平正美著

紀平正美著

金子馬治著

帆足理一郎

三土興三

紀平正美

岡田哲蔵

嘉治隆一

関栄吉

「独逸哲学と欧州大戦乱（十）」『倫理講演集』第一八三号所収、大正6・11

「〃（十一）」『倫理講演集』第一八四号所収、大正6・12

『近世哲学史 下巻』（早稲田大学出版部、大正6・12）

「独逸唯心論に於ける哲学的認識の問題（完結）」『哲学研究』第三卷・第二四号所収、大正7・3

「独逸哲学と欧州大戦乱（十二）」『倫理講演集』第一八八号所収、大正7・4

「神学之概念」（『神学之研究』第九卷・第六号所収、大正7・9）

「独逸の興亡 新生と独逸哲学との関係（上）」『東洋哲学』第二六篇・第一号所収、大正8・1

『最近 哲学の進歩』（大日本学術協会、大正9・3）

『哲学概論』（洛陽堂、大正10・3）

『十九世紀独逸思想史』（岩波書店、大正10・7）

「新『ヘーゲル』派の法律哲学（二定）」『法学協会雑誌』第三九卷・第九号所収、大正10・?

『カント哲学批判』（大同館書店、大正11・3）

『認識論』（岩波書店、大正11・9）

『行の哲学』（岩波書店、大正12・1）

『現代哲学概論』（東京堂、大正12・2）

「創造的進化と価値の世界」（『倫理講演集』第二五〇号所収、大正12・6）

「Hegel の Phänomenologie des Geistes」『哲学研究』の第九卷・第九五号所収、大正13・2

「アリストテレスとヘーゲルとの推理図式に就て」（『思想』第二九号所収、大正13・3）

「パピニと其人物評論」（『倫理講演集』第二一号・編之三所収、大正13・5）

「弁証法とマルキシズム」（『我等』第六卷・第五号所収、大正13・6）

「ヘーゲルの歴史哲学」（『哲学研究』第九卷・一〇一号所収、大正13・8）

ニコライ・ハルトマン著
橋高倫一訳

今中次磨

児玉達童著

西山康平著

加藤玄智著

マルクス著
嘉治隆一訳

久留間鮫造

関栄吉

鼓常良

木村素衛

村田豊秋著

ハンリヒ・リッケルト

高木八太郎著

紀平正美

紀平正美
小野正康 共訳

橋本文壽著

平井新 訳

市川一郎訳著

今井新太郎

矢崎美盛

『哲学方法論』（大村書店、大正13・10）

「ヘーゲルの国家理念論の考察」（『国家学会雑誌』第三八巻・第一一号所収、大正13・11）

『哲学概論』（大村書店、大正13・11）

『哲学汎論』（聚英閣、大正13・11）

『東西思想比較研究』（明治聖徳記念学会、大正13・12）

「ヘーゲル法理学批判」（『我等』第六巻・第一一号所収、大正13・12）

「ヘーゲルの哲学史とマルクスの経済学史」（『大原社会問題研究所雑誌』第二巻・第二号所収、大正13・12）

「ヘーゲルの社会哲学」（『講座』大正13、？）

「ヘーゲルの美学」（『講座』大正13、？）

「含蓄から顕現へ」（『思想』第三九号所収、大正14・1）

『近
代
哲学大集成』（中央出版社、大正14・1）

「如何にして国家学は学として可能なるか——フィヒテ及びヘーゲルに関する一研究」（『改造』新年号、大正14・1）

『東西思潮講話』（共益社、大正14・2）

「ヘーゲルの宗教論及び宗教と国家との関係論（一）」（『倫理講演集』第二六八号所収、大正14・2）

「ヘーゲルの国家論」（『外交時報』第四八四号所収、大正14・2）

『哲学の要領』（宝文館、大正14・3）

「マルクス社会学説の起源并に之に對するヘーゲル、フォイエルバハ、シュタイン及びブルードンの影響」（『三田学会雑誌』第一九巻・第三号所収、大正14・3）

『高尚なる理論を
平易に講義せる
哲学概論』（大同館書店、大正14・4）

「ヘーゲルの基督教の本質」（『神学研究』第一七巻・第二号所収、大正15・4）

「ヘーゲルの学位論文についての穿鑿」（『思想』第五六号所収、大正15・6）

石津照璽

独逸テオバルト・チーグレル著
伊藤吉之助、飯田忠純共訳

加藤玄智著

浜尾俊治著

つあだきようそん
土田杏村

斎藤要著

堺利彦著

「ヘーゲルの宗教哲学」『宗教研究』第三卷・第一号所収、大正15・7)

『独逸思想史 上』(国民図書株式会社、大正15・7)

『東西思想の比較研究』(京文社、大正15・9)

『通 俗 哲学講話』(大盛堂書店、大正15・10)

「ヘーゲルとマルクス、レエニンの弁証法的唯物論」『社会科学』十月特輯所収、大正15・10)

『世界哲学史年表』(聖山閣、大正15・11)

『弁証法的唯物論』「小冊子」(無産社、大正15・12)

一 ヘーゲル略年譜

年代	年齢	著作	備考
一七七〇 (明和七年)	一		八月二十七日、官吏「財務局勤務」ゲオルグ・ルートヴィヒ・ヘーゲルの長男として、シュトゥットガルト市エーベルハルト通り五三番地で生れる。
一七七五	六		ラテン語学校に入学。この年、シェリング生れる。
一七八〇	一一		母、亡くなる。
一七八八	一九		テュービンゲン大学の神学科に入学。
一七九三	二四		大学を卒業。スイスのベルンで家庭教師となる。
一七九七	二八		一月中旬、フランクフルト・アム・マインのゴッペル家の家庭教師となる。
一七九九	三〇		父を失なう。
一八〇一	三二	「フイヒテ哲学とシェリング哲学との相違」をかく。	ワイマール公国のイエーナに赴く。イエーナ大学の私講師となる。

一八〇二	三三	シェリングとともに『哲学評論』を発行。	二月から主著『精神の現象論』の印刷はじまる。十月、イエーナ市ナポレオンの軍隊によって占領される。ヘーゲル、フランス兵の略奪をうける。
一八〇六	三七		
一八〇七	三八	『精神の現象論』刊行。	ニュルンベルクのギムナジウムの校長となる。
一八〇八	三九	『哲学入門』を執筆。	この年に結婚。
一八一	四二		
一八二	四三	『論理学』の第一巻を刊行。	
一八三	四四	同書の第二巻を刊行。	
一八二六	四七	同書の第三巻を刊行。	十月、ハイデルベルク大学の哲学教授となる。
一八二七	四八	『エンチクロペディ』（『哲学的諸科学体系梗概』）を刊行。	同書により、ヘーゲル哲学の体系のすべてが呈示された。
一八二八	四九		ベルリン大学の哲学教授となる。
一八二	五二	『法哲学大綱』を刊行。	
一八二九	六一		十月、ベルリン大学の学長に就任。
一八三〇	六二		学長を退任。
一八三一 (天保二年)	六三		十一月、コレラにより死去。
一八三二		この年より一八四〇年にかけて、『ヘーゲル全集』（十八巻）完成。	

概観 日本における西洋哲学とヘーゲル受容

わが国においてはじめて西洋哲学（スコラ、ギリシャ哲学）が、神学とともに教えられたのはキリシタン（安土桃山）時代のことであった。天文十一年九月（一五八三・一〇）、府内（現・大分市）に設けられたイエズス会の学院コレジオにおいて、ヨーロッパ中世の哲学がおしえられた。アントニオ・プレネステイノ神父が、五名の学生（ポルトガル人）に、ラテン語で論理学をおしえたのが最初である。

ついで文禄三年（一五九四）ごろ、天草の学院コレジオにおいて、ゴメス神父が編んだトーマス・アキナスの『神学綱要』が、日本人の学生のために講義された。が、西洋哲学を組織的にまなぶには至らなかった。⁽¹⁾

江戸時代に入ると、宇田川榕庵ようあん（一七九八―一八四六、江戸後期の蘭学者、幕府天文翻訳方）は、ヨーロッパの学術を大観した『西学凡』シシユエファン（刊行年はわが元和九年「一六二三」。中国在住のイタリアのヤソ会士・ジウリオ・アレーニが編んだ漢訳、のちに禁書となる）の写本を手に入れ、よんでいた。同書は、ヨーロッパの学問を六科にわけている。すなわち、――いまでいう修辭学・哲学・医学・法学・正經せいけい（儒教の正統書）・神学である。ほかに論理学、自然哲学（物理学）、形而上学、数学なども出てくる。

榕庵にとって、「ヒロソ」とか「ヒロソヒア」（当時、「哲学」といった訳語はなかった）は、物の理ものこと（ものごとの本質や道理）を究めるものであった。

幕末になると、主として自然科学に関心があった洋学者は、人文科学にも注意を払うようになり、やがて西洋哲学を発見するにいたる。ヨーロッパの哲学思想が、幕末から明治初年にかけて、わが国に入ってくるにつれて、それを紹介したり解説する者があらわれた。西周あまね（一八二九―一八九八、明治期の啓蒙的官僚学者）は、西洋に「性理之学せいりのがく」とか「理学りがく」とか、あるいは「ヒロソヒー」と呼べる学問があることを識り、それを国民に紹介した。後年、かれはそれに「哲学」という訳語をつけた。

いまでは「哲学」という語は、日本語として定着し、人口に膾炙かいしやしている。が、ひろく世に知られるようになったのは、明治二十年（一八八七）ごろのことであり、東京大学文学部の一学科となつてからのようだ（『哲学雑誌』第二七卷・第三〇〇号、大正元・10）。このころ「洒落哲しゃれ

学」「色情哲学」「処世哲学」「変哲学」などの書も流行したという（伊藤吉之助「哲学会史料（上）」『哲学雑誌』第三〇〇号所収）。また井上円了（一八五八～一九一九、明治期の仏教哲学者。哲学館「現・東洋大学」の創立者）が、機関誌『東洋哲学』を刊行するにつれて、この雑誌が『哲学』の二字の流行につくし、もっとも盛をきわめたり」という（『城南評論』第一巻・第一〇号、明治25、12）。

明治期。

明治初年から同二十年ごろまで（一八六八～一八九五）（は、近代日本思想の啓蒙期と考えられ、哲学思想の移入は、啓蒙運動⁽²⁾の一環とみられた。日本人は旧来の陋習⁽¹⁾（わるい習慣）を破壊して、ヨーロッパやアメリカの文明を輸入することに努めたが、皮相におわった。維新後の日本の文明は、急造のものであり、和洋混合であった（下田次郎「国難に面して」『倫理講演集』第二五四号、大正12・11）。江戸時代中期以後、西洋の学術をまなぶときの有力な西洋語であったオランダ語は、凋落の運命をたどり、かわって英語やフランス語やドイツ語が学習されるようになった。「学問弁」（明治19・3・13）は、いう。

蘭学^{すた}廃^{すた}リテ 英学トナリ 仏学トナリ 独逸学トナリ

と。

西洋の書物が各国から舶載されるようになったのは、明治三、四年（一八七〇～七一）ごろからという（大鳥圭介の講演「学問弁」明治19・3・13）。

洋学者は横浜の外人商会や東京の書店を通じて、欧米から書物を取りよせてよんだ。⁽³⁾明治初年に輸入された哲学は、おもに十九世紀の英仏の哲学が主流であり、それが自由主義・功利主義の社会、政治思想の基礎を⁽⁴⁾あたえたが、社会批判へとむかい、哲学の根本問題に深入りしなかつた。⁽⁵⁾

第一期……明治初年から同二十年ごろまで（一八六八～九五）。

西洋哲学の輸入時代がはじまった。それは第一期にかぎったことでなく、大正初頭にいたる五十年間のことでもある。知識人、大学人らは、洋書をよみ、その内容を世人につたえ、ときに翻訳さえした。明治十年前後（一八七〇年代）の『哲学的啓蒙活動』においていちばん活躍したのは、西周であった。が、かれは西洋哲学の『解説者』^{エクスボウネント}であつても、純然たる哲学者ではなかった。

明治3・10以降……西周は浅草鳥越町に設けた私塾「育英社」において、近世におけるヨーロッパの哲学者たちの人と思想について略述した。そのなかにヘーゲルがふくまれていた。西はおもに英語文献（シュヴェグラーの『簡約哲学史』の英訳、ルイスの『列伝哲学史』や英米の『百科辞典』）のたぐいを利用して講義した。

西は日本人にむかつてヘーゲルを紹介した第一号であつた。ヘーゲルは西によって、西洋哲学史上の一人物として紹介された。西は「人世三宝説」（『明六雑誌』第三八〇号所収）において、ドイツ観念論哲学者ヘーゲルに言及した。「俾歌兒」^{ヘーゲル}（ヘーゲルの名の漢字表記）が活字となった最初か。

明治11・9以降……アメリカ人教師フェノロサは、東京大学文学部において哲学・哲学史を講じ、このなかでヘーゲル哲学（論理、弁証法など）にふれた。

明治16・3……『東京学士会院雑誌』（第四編）に、ヘーゲルの名が現われた。

明治17・12……竹越与三郎著『逸 哲学英華 完』に、ヘーゲルへの言及がある。

明治十七年（一八八四）東京大学に「哲学会」が創設され、同二十年（一八八七）より、機関誌『哲学会雑誌』（のち『哲学雑誌』と改称）を刊行。

明治十九年（一八八六）三月——東京大学の従来の文学部は、「文科大学」となった。のち「文学部」に改称。

明治19・6……末広鉄腸著『二十三年未来記』に、ヘーゲルの名がみられる。

中江兆民著『理学鉤玄 全』（哲学概念のようなもの）に、ヘーゲルの名がみられる。

第二期……明治二十年から同三十年ごろまで（一八八七～九七）。

明治二十年（一八八七）九月——哲学館（東洋大学の前身）は、麟祥院（本郷区竜岡町三十一番地）において授業を開始した。明治二十年代なかば、カント研究がさかんになるきざしがあるが、ヘーゲル研究は、あまり活発ではなかった。明治二、三十年代の邦文献に現れたヘーゲル像は、どのようなものであったのか。そこに描かれた記事の多くは、ヘーゲル哲学の各分野の紹介的、批評的記述である。——西洋哲学史上のヘーゲルの位置、かれの哲学的系譜、美学、弁証法、国家観、ヘーゲル学派の分離、宗教観、法哲学など、論者のテーマはじつに多岐にわたっている。明治二十年代後半から同三十年代中ごろまで、哲学概論・哲学史概説などの移植作業がおわると、原典研究（認識論、存在論）といった専門的な哲学研究の段階がおとずれた。が、

明治三十年代、日本の哲学界は、まだ移植輸入の時代といえた（『哲学界——三十一年～三十八年』『早稲田文学』所収、明治39・6）。

ヘーゲルについての研究が、緒につくのは、明治三十年代以降のことである。哲学史書の刊行がさかんになるのもこのころである。

また明治三十年代までの日本の思想界は、わが国の国家的建設と国民の政治的権利とに不離の關係をもつて發達したものである（土田杏村著『日本支那現代思想研究』（第一書房、大正15・10、四三頁）。

第二期のヘーゲル關係のおもな論文、訳書としては、つぎのようなものがある。

中島力造『「ヘーゲル」氏弁証法』（『哲学会雑誌』第四八号、明治24・2）

注・これは明治二十四年（一八九一）一月、文科大学内でおこなわれた哲学会の例会（第58回）で発表したものを印刷に付したものである。

園田宗恵『「ヘーゲルの弁証法（Dialektik）」ト東洋哲学』（『哲学会雑誌』第六九号、明治25・11）

中島力造『列伝体西洋哲学小史』（富山房、明治31・6）

注・これはヘーゲル全体に関する叙述の最初のものといわれている。

紀平正美
小田切良太郎 共訳「ヘーゲル氏哲学大系」（『哲学雑誌』第二二六卷、明治38・2）

注・これは本邦におけるヘーゲルの先駆的な訳業である。

第三期……明治四十年前後から末期まで（一九〇七～一九一三）。

明治四十二年（一九〇九）一月、元良勇次郎は、大学構内の山上御殿で「ヘーゲルの实在の批評」を例会で発表。

大正期。

日本の学者は西洋思想に眩惑し、相かわらずこれを移植するのにきゅうきゅうとしていたから、大正時代は「翻訳時代、解題時代」ではないかという（宮田修『思想界の輸入超過』『倫理講演集』第一四一号、大正3・5）。しかし、大正期に入ると、哲学研究がいつそう盛んになり、専門的かつ学術的な研究が深化した。大正時代の哲学は、ひじょうにドイツ的な新理想主義的な特徴をとって発達した。だからドイツ哲学の模倣時代といえそうであった。ことに大正末期から昭和にかけて、わが国哲学界は、カント主義からヘーゲル主義へとむかった。

ヘーゲル研究は、大正十三年（一九二四）以後——紀平正美を中心とする研究会が開かれていたが、ヘーゲル哲学復興のきざしが現われたのは「ヘーゲル百年記念」がおこなわれる数年前からである。

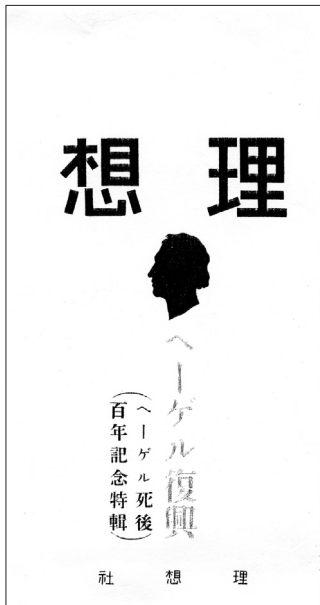
『思想』（昭和六年「一九三一・一〇」と『哲学雑誌』（昭和六年「一九三二・一二」）は、ヘーゲル特輯号をくんだ。大正五年（一九二六）、『京都哲学会』が発足。また『スピノザとヘーゲル』（国際ヘーゲル連盟日本版、岩波書店、昭和7・7）が刊行された。

昭和期。

第一期……昭和初期から終戦まで（一九二六～四五）。

昭和六年から同二十二年（一九三一～一九四七）ごろにかけて、ヘーゲルに関する研究書が多数刊行された。ヘーゲルの移植につとめた主な哲学者は——三木清、田辺元、務台理作、高山岩男、高橋里美、小山鞆絵、金子武蔵などである。日本におけるヘーゲル研究は、東大と京大でわけあっていた。

カント、ヘーゲル、フッサールについていえば、翻訳紹介の域を脱し、原典の文献的研究へとすすみ、さらにそこから一步進んで解釈的研究へ



『理想』のヘーゲル特集号。
(昭和6・4)

とむかい、独自の批評をするようになった。

昭和四年（一九二九）以降——三枝博音編『ヘーゲル及弁証法研究』を刊行。

昭和六年（一九三一）の満州事変後、日本は非常時に入り、同十七年（一九四二）以後、日本哲学「皇道哲学」が勃興し、戦時ちゅう「京都学派」の哲学者が戦争に協力した。

第二期……大東亜（太平洋）戦争後——昭和二十年から同三十年中ごろまで（一九四五～一九六〇）。

戦後、左翼思想が台頭し、マルクス主義、功利主義、実存主義などが活発化した。

第三期……昭和三十年中ごろから同四十五年初頭あたりまで（一九六〇～一九七〇）。

社会科学の哲学がさかんとなり、マルクス主義・現象学・分析哲学などが主導的地位をしめた。

第四期……昭和四十五年から同六十四年まで（一九七〇～一九八〇）。

日本はポスト工業社会にむかい、国際化の宣伝文句のもとに、社会科、哲学が発展し、数多くの研究成果がうまれた。

第五期……平成期（一九八九～）。

在野の若者や中高年層のあいだで、左派の近代思想や古典的な思想家カント

やヘーゲルの哲学が見直され、国内各地で「読書会」や「哲学カフェ」や「ヘーゲルの会」などが開かれ、活発な勉強会を展開している。また法政大学において、上妻精、加藤尚武らが世話人代表となり、「ヘーゲル研究会」が発足したのは、平成元年（一九八六）九月のことである。

*

ともあれ西洋哲学は、人文や社会、自然系の多くの学問がそうであったように、外国からの輸入品——“移入哲学”であった。日本における西洋哲学の本格的な移植は、明治時代にはじまり、これが漸次大正・昭和になるにつれて発展し、こんにちにいたっている。

明治初期の英米系の哲学紹介の特徴は、それが百科全書的、経世家的（政治家的）であった。が、明治中期以後、それは専門的、講壇的になっていった（家永三郎「明治哲学史の一考察」『日本歴史』第三二号所収、昭和26・2）。

明治十年代、フェノロサによってドイツ哲学が講じられて以来、それがやがて英仏の哲学を圧迫するようになり、明治二十八、九年（一八九五～九六）ごろを境として、ミルやスペンサーのイギリス流の哲学は、まったくドイツ哲学の下風に立った（大塚三七雄著『明治維新と独逸思想』（日独出版協会、昭和18・2、二〇二頁）。

明治三十年代、ヘーゲル哲学は、カント哲学ほど注目されず、また普及していなかった。しかし、ヘーゲルの翻訳刊行は、カントよりも古く、ヘーゲルの「歴史哲学」が、明治二十七年（二八九四）二月～三月にかけて、渋江保訳述『歴史研究法 上巻 下巻』（博文館）として出版された。もっともこれは、英訳からの重訳であった。

日本における哲学研究の中心は大学であり、一般大衆は哲学とは無縁であった。明治二十年代に入るまで、ヘーゲルと四つに組んだ真の研究は、中島力造の小論「ヘーゲル氏弁証法」（『哲学会雑誌』（第四八号、明治24・2）と翌年に発表された園田宗恵の「ヘーゲルの弁証法（Dialektik）ト東洋哲学」（『哲学会雑誌』第六九号、明治25・11）をのぞくと、まだなかった。後者の論文は、精神主義的なヘーゲル解釈であり、ヘーゲルに哲学（とくに弁証法）は、中国の老子や荘子らの思想と比較された。

中島力造は、明治三十年代初頭——『列伝体西洋哲学小史』（富山房、明治31・6）と題する大著（六六六頁）を著わし、「第五編 独逸哲学者」の章節において、ヘーゲル伝・論理学の概要・本質論・天然哲学などについて論じたが、これはヘーゲル哲学に関する統合的な研究の嚆矢となるものであった。

ついで日本におけるヘーゲルの著述の先駆的な訳者としては、紀平正美と小田切良太郎がいる。両人は「ヘーゲル氏哲学体系」〔哲学的諸科学体系梗概〕俗に「エンチクロペヂ」という）を、明治三十八年（一九〇五）二月から、昭和二年（一九二七）まで『哲学会雑誌』に継続的に二二六節掲載した。ヘーゲルが純粹に哲学的な態度で翻訳されたのは、これがはじめてという（鳥井博郎『明治思想史』河出書房、昭和28・12、一三四頁）。

大正時代に入ると、哲学研究がさかなくなり、プラトン、アリストテレス、デカルト、スピノザ、カント、ヘーゲルを中心とする古典研究が進められ、大正末から昭和初期にかけてヘーゲルの唯物弁証法の研究がさかになった。⁽⁶⁾ヘーゲルに関する研究書・評伝・翻訳（書簡・伝記など）の刊行がさかになるのは、昭和初期から戦後にかけてである。京都学派の西田幾太郎、田辺元、和辻哲郎らは、ヘーゲル哲学の洗礼をうけ、弁証法から影響をうけたが、これと批判的に対決し、独自の思想をうちたてた（沢田章『ヘーゲル』）。

明治・大正期の文献資料に現われたヘーゲルの特色。

ここでの文献資料とは、おもにつぎのような諸雑誌や単行本のことである。まず「雑誌」では——『明六雑誌』『東京大学第二年報』『東京学士会院雑誌』『明六雑誌』『学芸志林』『中央學術雑誌』『国民之友』『哲学会雑誌』『日本大家論集』『日本人』『学』『学林』『女学雑誌』『日本之文華』『少年園』『志からみ草紙』『教育時論』『城南評論』『早稲田文学』『亜細亜』『青山評論』『文学界』『日本評論』『六合雑誌』『同志社文学』『心海』『九州評論』『八紘』『太陽』『時代思潮』『国学院雑誌』『宇宙神教』『めさまし草』『新著月刊』『帝国文学』『世界之日本』『哲学叢書』『東洋哲学』『法学協会雑誌』『国家学雑誌』『人性』『警世新報』『倫理講演集』『哲学研究』『神学之研究』『思潮』『我等』『大原社会問題研究所雑誌』『講座』『改造』『外交時報』『三田学会雑誌』『神学研究』『社会科学』『国民雑誌』などにおけるヘーゲル関連の記事や単行本（一般書、哲学概論、哲学論、ヘーゲルの著作の訳書、哲学史、審美論、思想史、評伝の訳書など）にみられる、ヘーゲルに関する言及などを指す。明治・大正期の諸雑誌にみられるヘーゲル関連記事は、概してさりげない、紹介的なものが多い。また単行本の記事のなかには、ヘーゲルの人と思想についての専門的なものもみられるが、多くは概説的な浅薄な記事が多くを占めている。

注

- (1) 下村寅太郎編『哲学研究入門』（魚住書店、昭和三十年六月）、三〇七頁。
栗野安太郎編『哲学研究入門』（魚住書店、昭和三十年六月）、三〇七頁。
- (2) 鳥井博郎著『明治思想史』（河出書房、昭和二十八年十二月）、七〇頁。
- (3) 大塚三七雄著『明治維新と独逸思想』（日独出版協会、昭和十八年二月）、二〇八頁。
- (4) 注（1）におなじ。
- (5) 稲毛金七著『哲学教科書』（大同館、大正五年四月）、三九九頁。
- (6) 小松攝郎『ドイツ観念論の移植と発展』（別冊 哲学評論『日本における西洋哲学の系譜』所収、民友社、昭和二十四年一月）
- (7) 沢田章著『ヘーゲル』（清水書院、昭和四十五年七月）、二四三頁。

〔参考文献〕

- 「ヘーゲル文献」〔『哲学雑誌』「ヘーゲル百年忌記念号」第四六卷・第五三八号、昭6・12〕
注・これは明治二十三年（一八九〇）から昭和六年（一九三一）までの大まかな書誌。
- 「ヘーゲル文献」〔『思想』特輯号「百年祭記念 ヘーゲル研究」岩波書店、昭和6・10〕

清水幾太郎編
注・これは諸外国のヘーゲル関係文献やわが国のヘーゲル文献（明治二十三年「一八九〇」から昭和六年「一九三一」ごろまでを収録している。前掲「ヘーゲル文献」〔『哲学雑誌』昭和6・12〕を参考にしている。

上妻精編
「ヘーゲル文献目録」〔『思想』特集「ヘーゲル」岩波書店、昭和45・9〕

注・このリストは、昭和四十四年「一九六九」まで、日本および主要な欧米各国で公表された文献を網羅したものという。日本のものは、明治二十七年（一八九四）から記載されているが、あまり参考にならなかった。

金谷佳一編
「明治期ヘーゲル言及書誌」〔『ヘーゲル字典』所収、弘文堂、平成4・2〕

注・これは明治六年（一八七三）から同四十五年（一九一二）までの大まかな書誌。約三十数項目について言及している。

小松攝郎
「ドイツ概念論の移植と発展」〔別冊 哲学評論 日本における西洋哲学の系譜』所収、民友社、昭和24・1〕

拙稿
「西洋哲学伝来考——室町時代末期から明治期まで」〔『社会志林』五二巻・第一号所収、平成17・7〕

拙稿
「西洋哲学伝来小史」〔『社会志林』第五七巻・第一号所収、平成22・7〕

三枝博音著
『日本に於ける哲学的観念論の発達史』（文圃堂書店、昭和9・2）

- 戸弘柯三著 『近代日本哲学史』(ナウカ社、昭和10・8)
 永田広志著 『日本哲学史』(三笠書房、昭和12・8)
 佐藤慶二著 『哲学新講』(同文館、昭和14・5)
 桑木厳翼著 『西周の百一新論』(日本放送出版協会、昭和15・5)
 麻生義輝著 『近代日本哲学史』(近藤書店、昭和17・7)
 大塚三七雄著 『明治維新とドイツ思想』(日独出版協会、昭和18・2)
 桑木厳翼著 『明治の哲学界』(中央公論社、昭和18・3)
 大久保利謙編 『西周全集 第一巻』(日本評論社、昭和20・2)
 『哲学小辞典』(岩崎書店、昭和22・7)
 『哲学四十年』(辰野書店、昭和22・10)
 『哲学的教養』(春秋社、昭和23・7)
 『ヘーゲル』[アテネ文庫](弘文堂、昭和27・4)
 『明治思想史』(河出書房、昭和28・12)
 『明治哲学史研究』(シネルヴァ書房、昭和34・10)
 『大正哲学史研究』(法律文化社、昭和40・11)
 『ヘーゲル 人と思想 17』(清水書院、昭和45・7)
 『西洋哲学史 上・下巻』(岩波書店、昭和46・10)
 『ヘーゲル』[評伝](理想社、昭和57・7)
 Dr. Albert Schweigler: *A History of Philosophy in Epitome*, translated from the original German, D. Appleton and Company, New York, 1856
 Rev. Frederick Denison Maurice: *Modern Philosophy; A Treatise of Moral and Metaphysical Philosophy from the fourteenth Century to the French Revolution with a glimpse into the 19th Century*, Griffin, Bohn, and Company, 1862
 Francis Bowen, A. M.: *Modern Philosophy, from Descartes to Schopenhauer and Hartmann*, Marston, Searle, and Rivington, London, 1877 (?)
 George Henry Lewes: *A Biographical History of Philosophy*, George Routledge & Sons, London, 1893
 Franz Wiedmann: *Hegel, an Illustrated Biography*, Western Publishing Company, Inc, 1968